山形県埋蔵文化財センター調査報告書第236集

中関屋遺跡発掘調査報告書

公益財団法人　山形県埋蔵文化財センター

中関屋遺跡

発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 236 集

２０２０

公益財団法人　山形県埋蔵文化財センター

中関屋遺跡

なかせきや

発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 236 集

令和 2 年

公益財団法人　山形県埋蔵文化財センター

中関屋遺跡調査区遠景（西から）

調査区全景（南から）

遺構完掘状況（西から）

出土した須恵器・土師器（平安時代）

序

本書は、公益財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、中関屋遺跡の調査成果をまとめたものです。

中関屋遺跡は、山形県の北東部に位置する新庄市に所在します。新庄市は最上地域の産業の中心地として農業をはじめ商工業など広い分野で発展してきた中心都市です。古くは乱馬堂遺跡や山屋遺跡などの旧石器時代の遺跡群が有名です。江戸時代は戸沢家新庄藩の城下町として整備され、戸沢家墓所は国指定史跡となっています。藩政時代の宝暦６（1756）年からの伝統がある新庄まつりは、平成 28 年にユネスコ無形文化遺産に登録されています。

この度、山形県立新庄病院改築整備事業に伴い、事前に工事予定地内に包蔵される、中関屋遺跡の発掘調査を実施しました。調査では、平安時代の掘立柱建物跡や周囲を囲む溝跡などで構成される集落跡の様子が明らかになりました。また、須恵器や土師器など当時使用されていた生活の器もまとまって出土しました。市内では、平安時代の遺跡が発掘調査された事例は少なく、当時期の具体的な生活の様子を復元することができる多大な成果を得ることができました。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先のつくり上げた歴史を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちに課せられた重要な責務と考えます。その意味で本書が文化財保護活動の普及啓発や、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりますが、当遺跡を調査するに際し御支援、御協力いただいた関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

令和２年３月

公益財団法人　山形県埋蔵文化財センター

理事長　菅間　裕晃

凡　　例

1　本書は、山形県立新庄病院改築整備事業に係る「中関屋遺跡」の発掘調査報告書である。

2　既刊の年報、速報会資料、調査説明会資料などの内容に優先し、本書をもって本報告とする。

3　調査は山形県病院事業局県立病院課の委託により、公益財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

4　本書の執筆は、菅原哲文、廣瀬美紀が担当し、齋藤稔、黒坂雅人、荒木歩、伊藤邦弘、須賀井新人が監修した。
本書の執筆分担は、以下のとおりである。

第Ⅰ章	菅原哲文・廣瀬美紀
第Ⅱ章	菅原哲文・廣瀬美紀
第Ⅲ章	菅原哲文・廣瀬美紀
第Ⅳ章	パリノ・サーヴェイ株式会社　田中義文・松元美由紀
第Ⅴ章	菅原哲文

5　遺構図に付す座標値は、平面直角座標系第Ⅹ系（世界測地系）により、高さは海抜高で表す。方位は座標北を表す。

6　本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

SB…掘立柱建物跡　SK…土坑　SP…柱穴・ピット　SD…溝跡
SX…性格不明遺構　EP…遺構内柱穴・ピット
RP…登録土器　RM…登録金属製品

7　遺構・遺物実測図の縮尺は各図に示した。石器の自然面はドットで、 その他の網点の用法は各図に示した。
遺物実測図の断面黒塗りは須恵器を表す。また、拓影断面図の配置であるが、須恵器・土師器は左から内面・外面の順に掲載し、縄文土器は左に外面を掲載した。

8　基本層序および遺構覆土の色調記載については、2008 年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」によった。

調 査 要 項

遺跡名	中関屋（なかせきや）遺跡
遺跡番号	205-128
所在地	山形県新庄市大字金沢字中関屋
調査委託者	山形県病院事業局県立病院課
調査受託者	公益財団法人山形県埋蔵文化財センター
受託期間	平成 31 年 4 月 1 日～令和 2 年 3 月 31 日
現地調査	令和元年 6 月 17 日～ 8 月 27 日
調査担当者	業務課長　伊藤邦弘
	業務課長補佐　須賀井新人
	専門調査研究員　菅原哲文（調査主任）
	調査員　廣瀬美紀
調査指導	山形県教育庁文化財・生涯学習課
調査協力	新庄市教育委員会
	山形県最上教育事務所
業務委託	基準点測量業務　株式会社協同測量設計センター
	理化学分析業務　パリノ・サーヴェイ株式会社
	遺物保存処理業務（金属製品）　株式会社吉田生物研究所
発掘作業員	青柳笑子　五十嵐久悦　井関恭雄　伊藤恵子　柿﨑嘉一　柿﨑光子　黒坂敏夫
	小関忠雄　小林　彩　小屋久好　鈴木忠幸　高橋幸一郎　髙橋政行　早坂松一
	早坂武昌　八鍬博幸　（五十音順）
整理作業員	板垣牧子　鈴木　薫
	（五十音順）

目　次

Ⅰ　調査の経緯
　1　調査に至る経緯 …… 1
　2　調査の方法と経過 …… 1
　3　整理作業の方法 …… 3
Ⅱ　遺跡の位置と環境
　1　地理的環境 …… 4
　2　歴史的環境 …… 4
Ⅲ　調査成果
　1　遺跡の概要 …… 10
　2　検出された遺構 …… 10
　3　出土した遺物 …… 13
Ⅳ　理化学分析
　1　中関屋遺跡理化学分析 …… 41
Ⅴ　総括
　1　平安時代 …… 46
　2　縄文時代 …… 46
報告書抄録 …… 巻末

表

表１　調査工程表 …… 4
表２　遺跡地名表 …… 7
表３　土器観察表 …… 38
表４　石器・石製品観察表 …… 39
表５　金属製品観察表 …… 39
表６　出土遺物重量表 …… 39
表７　樹種同定結果 …… 42
表８　種実同定結果 …… 42

図　版

第 1 図　調査区概要図 …… 2
第 2 図　地形分類図 …… 5
第 3 図　遺跡位置図 …… 6
第 4 図　調査区全体図（上）・図版割付図（下） …… 15
第 5 図　遺構配置図１ …… 16
第 6 図　遺構配置図２ …… 17
第 7 図　遺構配置図３ …… 18
第 8 図　遺構配置図４ …… 19
第 9 図　遺構配置図５ …… 20
第 10 図　遺構配置図６ …… 21
第 11 図　調査区断面図１ …… 22
第 12 図　調査区断面図２ …… 23
第 13 図　SB ８平面図・断面図 …… 24
第 14 図　SB ８・23 土層注記 …… 25
第 15 図　SB23 平面図・断面図 …… 26
第 16 図　SB42 平面図・断面図 …… 27
第 17 図　SK20 ～ 22・SP62 …… 28
第 18 図　SK15・37・63・SX36・SD1 …… 29
第 19 図　SP35・41・61 …… 30
第 20 図　１区南側柱穴群 …… 31
第 21 図　SP17 ～ 19・49 ～ 51・57・SD1 …… 32
第 22 図　SD1 平面図 …… 33
第 23 図　須恵器・土師器（１） …… 34
第 24 図　須恵器・土師器（２） …… 35
第 25 図　須恵器・土師器（３） …… 36
第 26 図　縄文土器・石器 …… 37
第 27 図　炭化材（１） …… 44
第 28 図　炭化材（２） …… 45
第 29 図　中関屋遺跡出土須恵器・土師器集成図 …… 47
第 30 図　八幡原窯跡出土須恵器・鮭川村石名坂出土土師器 … 48
第 31 図　最上地方・村山地方北部の主な奈良・平安時代の遺跡 …… 49

写真図版

巻頭写真 1　中関屋遺跡調査区遠景・調査区全景

巻頭写真 2　遺構完掘状況・出土した須恵器・土師器（平安時代）

写真図版 1　遺跡近景・器材搬入・調査区外周の線掘り・重機による表土掘削・面整理作業・基準点測量・遺構精査状況

写真図版 2　記録作業・発掘調査説明会・2 区遺構検出状況・1 区溝跡検出状況・ 1 区遺構検出状況

写真図版 3　1 区北壁断面・1 区東壁断面・2 区西壁断面・1 区西側遺構検出状況

写真図版 4　調査区全景

写真図版 5　1・2 区遺構完掘状況

写真図版 6　1 区 SB8 完掘状況

写真図版 7　SB8EP9 ～ 12 断面・完掘状況

写真図版 8　SB8EP13・14 断面・完掘状況・SB23 検出状況

写真図版 9　SB23 完掘状況

写真図版 10　SB23EP7・25 断面・完掘状況・EP24・26 完掘状況・EP27・32 断面

写真図版 11　SB23EP28 ～ 31 断面・完掘状況

写真図版 12　SB42 検出状況・完掘状況

写真図版 13　SB42EP6・44 ～ 46 断面・完掘状況

写真図版 14　SB42EP47 断面・完掘状況・EP43 完掘状況・SK20 断面・遺物出土状況

写真図版 15　SK20-F1 下層遺物出土状況・SK20・SP62 完掘状況・SK21 断面・F1 遺物出土状況・完掘状況・SK22 断面・遺物出土状況

写真図版 16　SK22 遺物出土状況・RM5 銭貨出土状況・SX36 断面・SK15 断面・完掘状況

写真図版 17　SK37・63 断面・完掘状況・SP41 断面

写真図版 18　SP41-RP4 土師器坏出土状況・断面・SP61 断面・完掘状況・SP34 断面・SP35 遺物出土状況・SP3 完掘状況・SP17・18 断面

写真図版 19　SP5-RP2 出土状況・完掘状況・SP39 遺物出土状況 SP52 完掘状況・SP19 断面・完掘状況・SP49・50 断面・完掘状況

写真図版 20　SP51・53・55・56 断面・完掘状況・SP54・57 断面

写真図版 21　SP58 断面・SP57・58 完掘状況・1、2 区 SD1 検出状況・1 区 SD1 東端断面・1、2 区 SD1 断面・2 区 SD1 遺物出土状況

写真図版 22　1 区 SD1 完掘状況

写真図版 23　須恵器坏・蓋

写真図版 24　須恵器甕・壺・鉢（表・裏）

写真図版 25　土師器坏・甕

写真図版 26　土師器甕（表・裏）

写真図版 27　土師器甕・堝（表・裏）

写真図版 28　縄文土器・石器

写真図版 29　石器・銭貨・陶磁器・参考資料（土師器）

Ⅰ　調査の経緯

1　調査に至る経緯

山形県立新庄病院は「仁・愛・和」の基本理念の下、山形県最上地方唯一の基幹病院として、地域住民に信頼と安心を与える医療を提供してきた。しかし、1975年の建築から40年以上が経過し、施設設備の老朽化や駐車場の不足をはじめとした様々な課題が認識されるようになった。このため山形県では、地元住民の熱い要望も踏まえ、平成28年度に「山形県立新庄病院改築整備基本構想検討委員会」を設置し、基本構想を策定するとともに、新庄市金沢字中関屋地内への全面移転改築を決定した。平成29年度には専門家会議が設置され、新病院の具体的な診療機能や病床規模、整備スケジュール等について検討が行われた。この結果は「山形県立新庄病院改築整備基本計画」として取りまとめられ、平成30年３月に山形県病院事業局から示されている。新病院の建設予定地は、旧株式会社新庄富士通ゼネラルの工場跡地と北に隣接する旧水田で、敷地面積約56,400㎡を要する都市計画区域内の工業地域である。東側を国道13号に、南側は県道曲川新庄線に接しており、南側県道が進入・退出のための前面道路となる計画である。

山形県教育委員会では毎年、開発を担当する国と県の事業所や部局に対し、次年度以降の事業計画についての照会を行い、開発と埋蔵文化財の調整に当たっている。当該事業予定地には周知の遺跡は登録されていないが、大規模開発であることから、工事中における埋蔵文化財の不時発見を避けるために、遺跡詳細分布調査を実施する運びとなった。平成30年９月に工場跡地の北東部分を対象に１回目の試掘調査が行われ、７本のトレンチ中３本から遺構もしくは遺物が確認されたため、新規発見の奈良･平安時代の遺跡と判断された。その後、10月から11月にかけて都合４回の追加調査が実施され、遺跡範囲及び発掘調査対象区域を確定するに至った。延べ26本に及ぶトレンチ調査の結果、北東域以外では遺構・遺物が確認されず、発掘調査が必要な範囲は１回目の調査を行った周辺部の約2,400㎡の地区と判断された（第１図参照）。

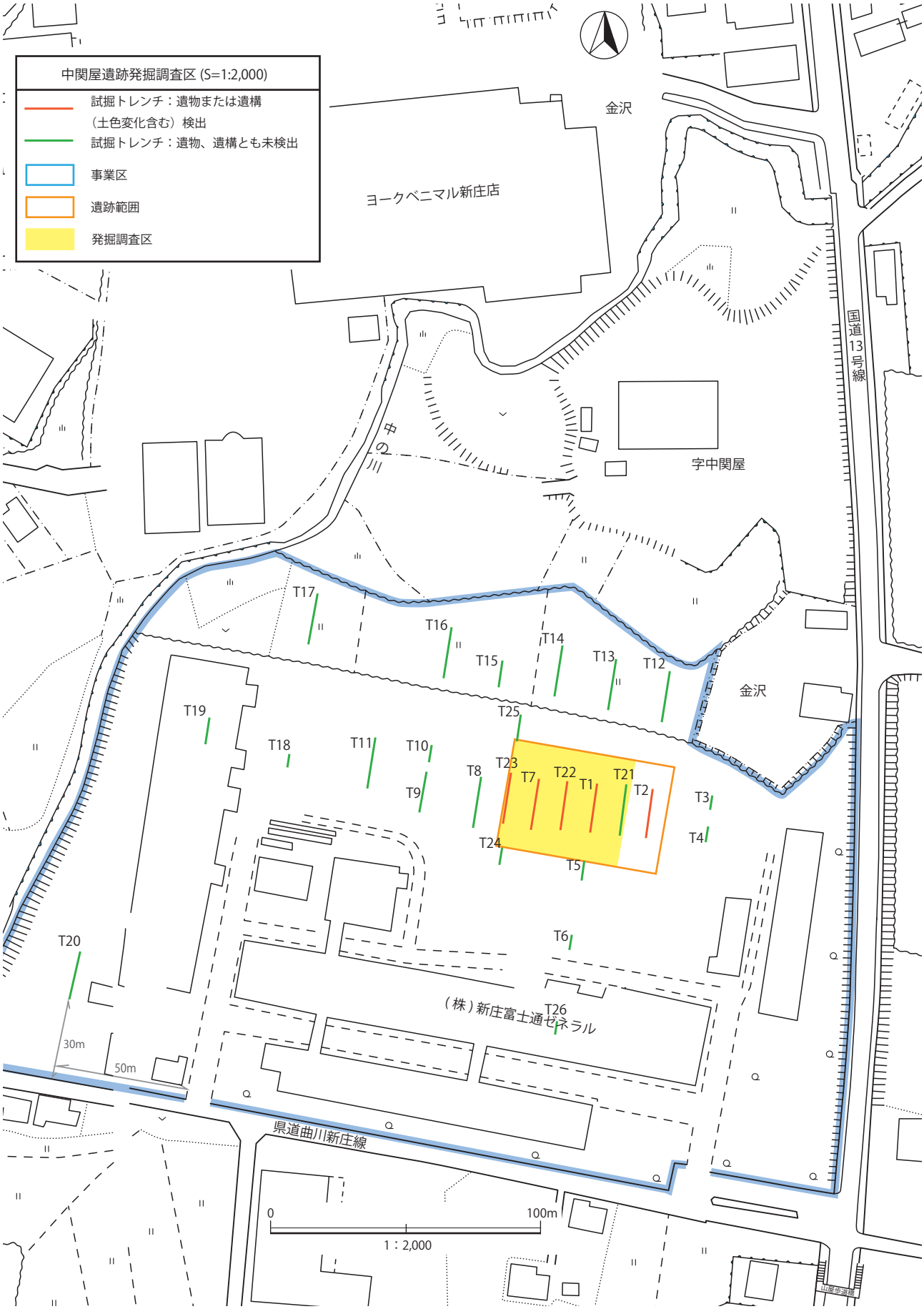
県教育委員会ではこれらの結果に基づき、事業者である県病院事業局と協議するため、当センターに対し発掘調査に要する経費の概算額を示すよう依頼が出されたのを受けて、11月中に回答した。12月には県教育委員会より遺跡の発見についての通知がなされ、「中関屋遺跡」として新規登録された。遺跡の取り扱いに関する協議が重ねられた結果、平成31年度内に当センターが緊急発掘調査及び整理・報告書刊行を実施することで調整が図られ、平成31年３月に調査に係る経費積算書及び見積書を作成・提出した。

平成31年４月１日付けで「埋蔵文化財発掘調査業務委託契約」を締結したが、現地調査の開始時期や工事との調整にはなお課題を要した。発掘調査区は建設される病院棟と一部重なることから、工事の一環として３箇所でボーリングによる地質調査が必要とされ、その終了を待てば発掘調査の開始が遅れ、年度内の報告書刊行が困難になる状況が危惧された。このため、調査区を２区に分割してボーリング箇所に影響しない区域から着手することとし、発掘調査は計画どおり６月開始とした。また、調査区と病院棟の位置関係を示した設計図面において、実際は調査区の東側が病院棟から大幅に外れることが判明し、調査対象面積は1,840㎡へ改められた。

これらと並行して､文化財保護法第92条に基づく「埋蔵文化財発掘調査の届出」の提出などの事前準備を整えた。５月中旬までに発掘調査の作業員を確保し、５月30日には事業者をはじめ最上教育事務所等の関係機関と、調査期間や方法等の実施計画及び現状での問題点等について事前打ち合わせを行っている。

2　調査の方法と経過

発掘調査の方法は、調査範囲の確認、２区に分割した調査区の設定、重機による表土除去、遺構検出のための面整理と進め、遺構プランの検出後に平面図作成・遺構


中関屋遺跡発掘調査区 (S=1:2,000)
試掘トレンチ：遺物または遺構（土色変化含む）検出
試掘トレンチ：遺物、遺構とも未検出
事業区
遺跡範囲
発掘調査区
ヨークベニマル新庄店
金沢
国道13号線
中の川
字中関屋
金沢
T17
T16
T15
T14
T13
T12
T19
T25
T18
T11
T10
T9
T8
T23
T7
T22
T1
T21
T2
T3
T4
T24
T5
T6
T20
T26
（株）新庄富士通ゼネラル
30m
50m
県道曲川新庄線
0
100m
1：2,000

第１図　調査区概要図

登録などの過程を踏んだ。

調査区内に設けたグリッドは５ｍ四方とし、グリッドの方角は平面直角座標系第Ｘ系（世界測地系）に基づく。原点は、Ｘ＝-136660.000、Ｙ＝-45540.000とした。グリッドの名称はハイフンによって繋げられたアルファベット及びアラビア数字（Ａ－１）で表した。アルファベットは北に向かって5m毎に、A、B、C…とふり、アラビア数字は東に向かって増加する数字で示した。グリッド名が示す範囲は、それぞれの数字が示す南北軸と東西軸の交点の第一象限となる５ｍ四方の25㎡である。

調査面積1,840㎡を対象に、調査員２名と作業員１日平均12人体制で、令和元年６月17日から８月22日までの調査期間を計画した。調査区南西部はボーリング地質調査の終了を待って着手するため、調査区の３/４に相当するそれ以外の区域を１区として先行した。

表土除去後に面整理を重ね、南半部に土坑や柱穴群の分布が認められたことから、掘立柱建物跡の存在が予期できた。北半部では溝跡が検出できたが、それ以外の遺構の分布は希薄であった。遺構検出と並行して、基準点杭及びグリッド杭打設を業務委託して実施した。座標値と番号を登録した遺構は、順次半截等の掘り下げを実施して断面精査を行い、写真撮影や実測図作成等の諸記録を経た後に完掘していった。ボーリング掘削の終了を受けて、７月９日から２区の表土除去を開始した。

１区・２区とも南端部は近現代の撹乱を受けており、調査区外に遺構の広がりはないことが見て取れた。柱穴の組み合わせから３棟の掘立柱建物跡が確認され、うち１棟は２間×２間の総柱建物跡であった。出土遺物は包含層・遺構内とも少なかったが、土坑２基からは須恵器や土師器片がまとまって出土した。遺構完掘後の平面図は手取りにより、1/20や1/50スケールで図化した。

８月１日に委託者である県立病院課に対して、調査状況と成果について説明を行った。７日にはドローンを使用して、上空から調査区全景の俯瞰撮影と遺跡遠景撮影を実施した。10日に調査説明会を開催し、降雨による悪天候であったが50名の参加者があった。盆休みによる中断をはさみ、最終週まで記録作業に追われながら、22日の最終日に機材を撤収して、延べ67日間に及んだ現地調査を終了した。なお、当日から調査区の埋め戻しを開始し、翌週の27日に完了したのを受けて30日には事業者へ現地の引き渡しを行った。

３　整理作業の方法

発掘調査の結果、平安時代の須恵器や土師器を主として整理用コンテナ８箱の遺物が出土した。出土遺物の整理過程は、洗浄→注記→分類→接合・復元→抽出→実測・拓本→トレース→写真撮影→版組・編集→収納の順に行った。

発掘調査終了後、直ちに図面や写真等記録類の整理を実施した。図面は通し番号を付加した上で図面台帳を作成し、遺構ごとに平面図と土層断面図の補整を行った後、全体図のトレースと土層注記の入力作業を実施した。９月より遺物の洗浄と注記を開始し、接合・復元を経て報告書掲載遺物を抽出した。その後、遺構図のトレースと並行させながら、土器の実測及び拓本に着手した。また、出土した古銭１点の保存処理と、建物跡柱穴等の遺構内から出土した炭化材の樹種同定、及び土坑堆積土中に遺存した種子同定に係る理化学分析につき、専門業者へ業務委託している。

10月中旬からは遺物実測図のトレースと、拓本のスキャニング及び画像調整を行い、これらと並行して遺構デジタル写真（RAWデータ）の現像を開始した。11月に入って報告書掲載遺物の写真撮影を実施した。また、遺構の版組みを行い遺物と共に順次編集して、報告書の頁単位で図版及び写真図版を作成していった。これら諸作業と並行して本文執筆を進め、１月の入稿までに至った。

報告書の原稿入稿後は、出土品と写真・図面等の諸記録類を県への移管のための収納準備に取り掛かり、出土遺物は報告書掲載と未掲載に区分して収納した。なお、報告書掲載遺物については後の検索・活用を考慮し、図版番号を追加して注記している。

Ⅱ　遺跡の位置と環境

1　地理的環境

中関屋遺跡が所在する新庄市は、北緯 38 度 45 分 43 秒、東経 140 度 18 分 18 秒に位置し、面積は約 222.85 ㎢（2015 年時点）である。山形県北部にある最上地方の中央に位置し、最上郡 7 町村のすべてに隣接している当地方の中心都市である。また、ＪＲ東日本・奥羽本線や陸羽東・西線、国道 13・47 号線などが通り、平成 11 年には山形新幹線が開通するなど、交通の要地となっている。

当市は神室山などの山々に囲まれた新庄盆地の中央に位置し、山から流れ出る谷川によって段丘や広大な扇状地が形成されている。また、西山・東山・福田山・南山・上台などの丘陵が各地に存在する平坦地が少ない盆地となっている。丘陵は西側が第三紀鮮新世の地層、東側が向町カルデラ起因となっている所が多い。

中関屋遺跡は、新庄市金沢に位置し、最上川へ合流する升形川の支流、中の川の左岸に立地する。地形は扇状地となっており、西に向かって緩やかに傾斜する。標高は約 107 ～ 108 mを測る。遺跡のすぐ東側は国道 13 号線が通り、南側は県道曲川新庄線が通る。遺跡の現況は工場跡地となっている。以前は水田・畑地として利用されていたという。

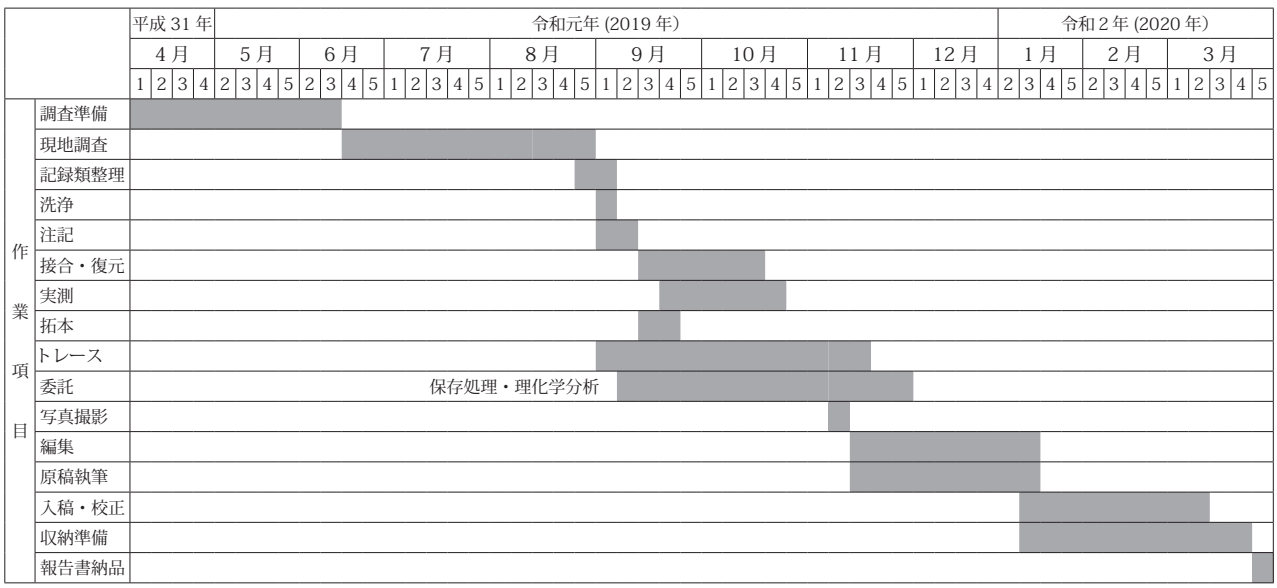
市内の気候であるが、オホーツク気団の勢力が強い年は山背という北東気流が 7 月下旬頃に流入し、冷夏となる。また、当市は霧の多い土地で、特に 9 月から 11 月は霧に包まれることが多く、周囲の山々の稜線部の冷気が盆地に流下して発生する寒気湖と呼ばれる濃い霧に覆われることもある。冬の積雪は年による変動が大きい。平均最深積雪は 145.3cm（1987 年時点）であるが、過去には 200cm 以上の積雪も観測されており、昭和 4・11 年には最深積雪 250cm を記録している。一方で最深積雪が 100cm 以下の年も記録されており、中には 50cm 前後の年もみられる。

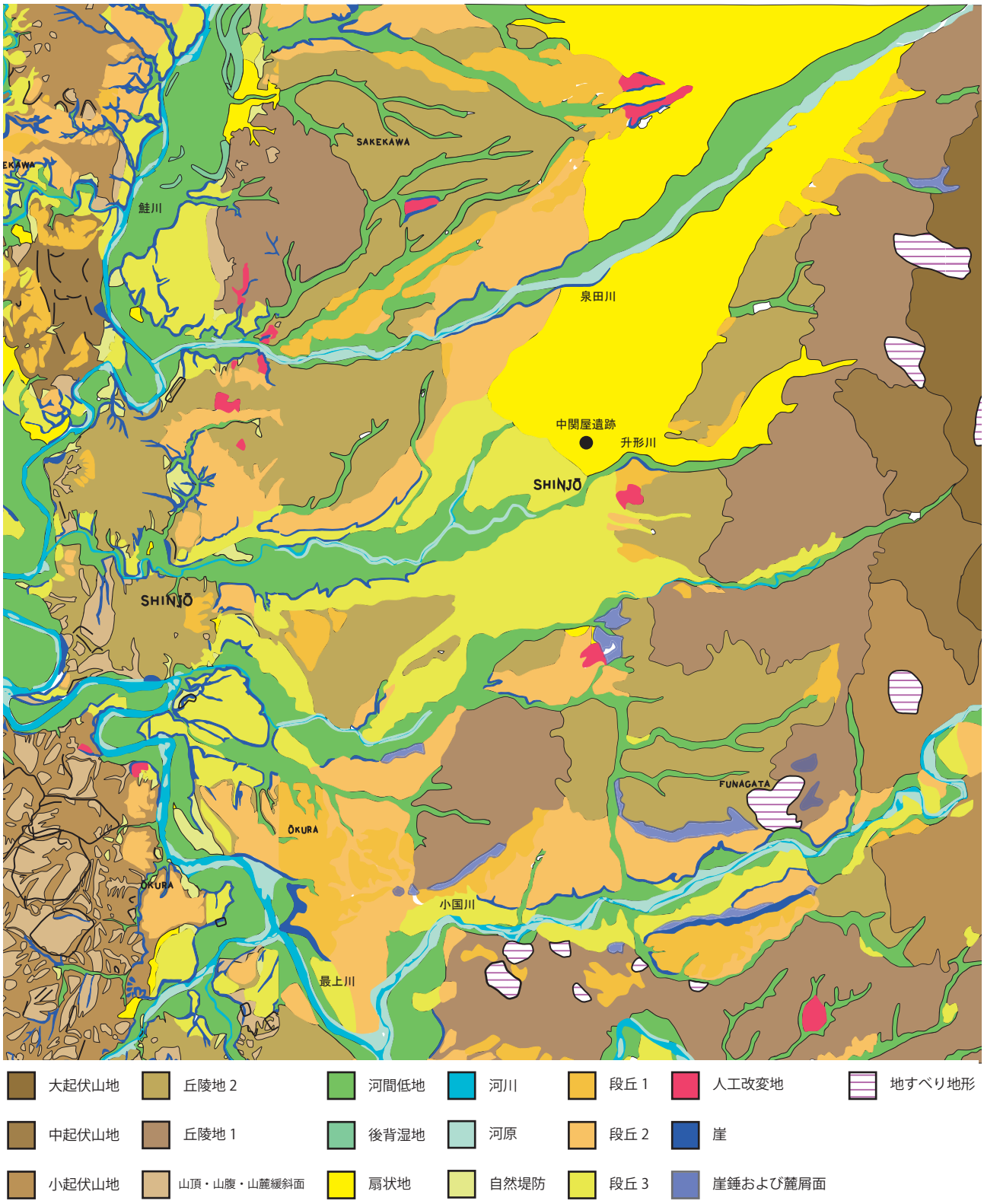
植生では、最上地方は冷温帯に生えるコナラ・ミズナラ・ブナなどの落葉広葉樹に覆われている。当地方では最上峡など各所で天然のスギ＝ブナ混交林が分布し、その内の多くがユキツバキを下層植生として伴っている。また、雪の多い地域のため日本海要素の植物が多く分布している。

2　歴史的環境

新庄市では、山形県遺跡地図情報において、126 カ所が登録されている（2019 年度）。以下、市内の遺跡

表１　調査工程表



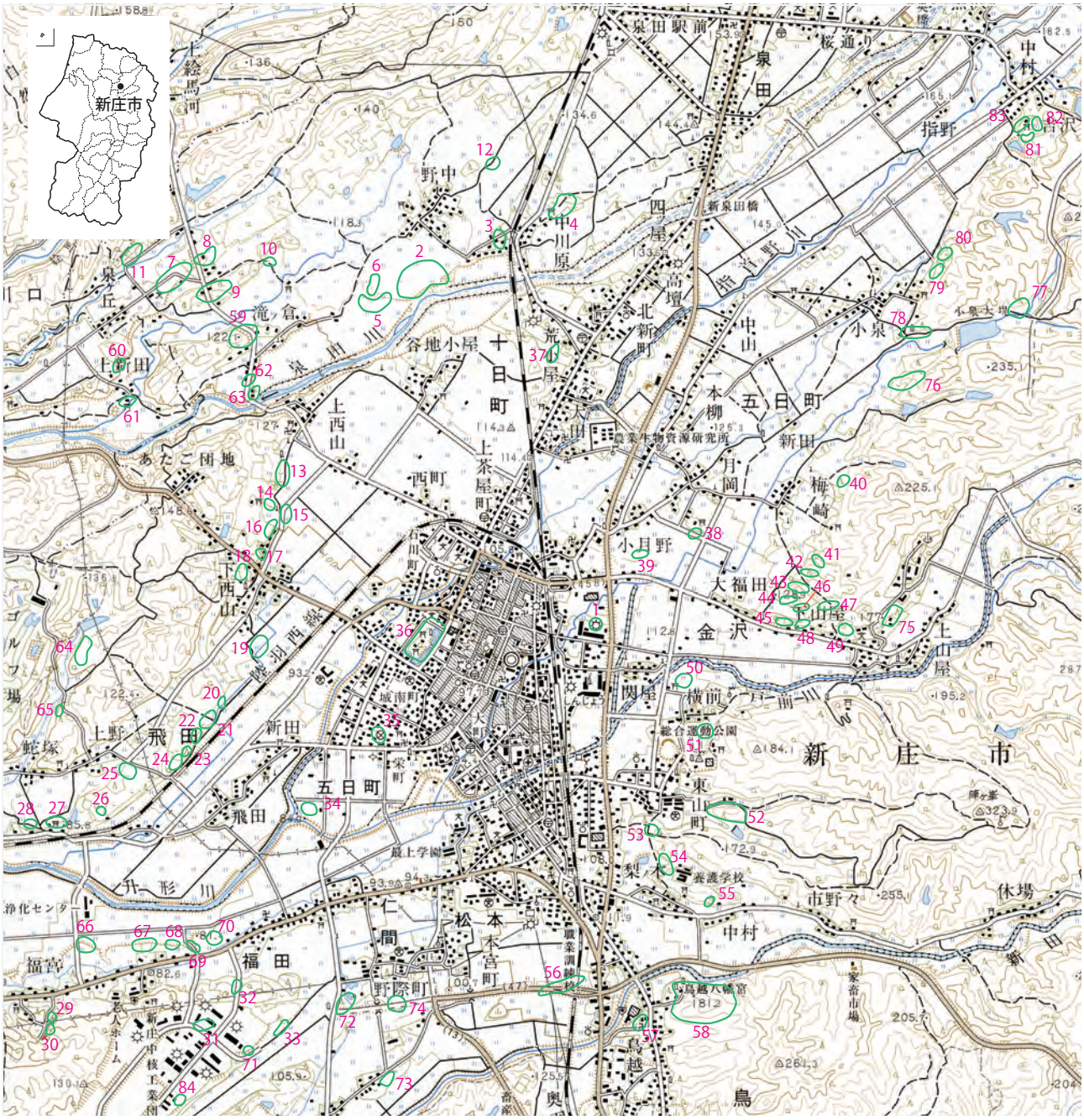


※本図は『土地分類基本調査　新庄』（山形県企画調整部土地対策課　1979）、同じく『清川』の「地形分類図」（２万５千分の１）を合成し、加筆したものである。

第２図　地形分類図

を中心として時代順に概観していく。

市内の旧石器時代であるが、山麓の台地沿いに市街地を囲むように、乱馬堂遺跡・山屋遺跡・横前遺跡・新堤遺跡・南野遺跡などの後期旧石器時代の遺跡が分布している。横前遺跡では、ナイフ形石器を中心とした石器群が出土した。南野遺跡では配石遺構や土坑が検出された。また、乱馬堂遺跡では 4,600 点を超える遺物が出土し、ナイフ形石器・掻器・削器・彫刻刀など豊富な石器類が



※国土地理院発行５万の１地形図「新庄」を使用

第３図　遺跡位置図

出土した。これらの石器からは、新庄盆地が湖であった頃の湖畔に生活する狩猟民の生活様相がうかがわれる。

縄文時代に入ると土器が作られ、煮炊きや貯蔵が可能となった。また、弓矢の使用や竪穴住居を建て集落を作るようになるなど生活様式が大きく変化する。当市では、この時代の遺跡は台地や河川流域に多く分布している。市内の縄文時代早期・前期の遺跡では、福田山Ａ遺跡、仁間磯ノ沢（にけんいそのさわ）Ｂ遺跡などがある。早期中葉や後葉、前期初頭の土器が出土している（新庄市 1989・山形県教委 1981）。仁間磯ノ沢Ｂ遺跡では部分的であるが、早期末の住居跡が２棟検出された。福田山Ａ遺跡では、前期の竪穴住居跡が１棟、土坑、陥穴が確認された。泉田川右岸の河岸段丘上に位置する中川原集落からは３カ所の遺跡が見つかっている。中川原遺跡は縄文時代中期を中心とする遺跡で土器や石器が出土し、石組炉をもつ竪穴住居跡が検出された（新庄市 1989）。中川原Ｃ遺跡は山形県埋蔵文化財センターによって４次にわたる発掘調査が実施され、縄文中期前半を中心とする集落跡の様子が明らかになった（山形埋文 2002・2007）。方形の大型建物跡や円形の住居跡が 22 棟、墓の可能性がある

表２　遺跡地名表

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	中関屋遺跡	集落跡	奈良時代・平安時代	43	山崎山Ｂ遺跡	散布地	縄文時代(中期)
2	中川原Ｃ遺跡	集落跡	縄文時代	44	大福裏Ｄ遺跡	散布地	縄文時代(中・後期)
3	中川原Ｂ遺跡	散布地	縄文時代(晩期)	45	大福裏Ｂ遺跡	散布地	縄文時代
4	中川原遺跡	集落跡	縄文時代(中期)	46	大福裏Ｃ遺跡	散布地	縄文時代
5	立泉川遺跡	散布地	縄文時代(中期)	47	山崎山Ａ遺跡	散布地	縄文時代
6	立泉川２遺跡	散布地	縄文時代	48	大福裏Ａ遺跡	散布地	旧石器時代・縄文時代(前期)
7	泉ヶ丘遺跡	集落跡	縄文時代(中期)	49	山屋遺跡	集落跡	旧石器時代
8	中谷地遺跡	散布地	縄文時代(早・中・晩期)	50	乱馬堂遺跡	集落跡	旧石器時代・縄文時代・中世・近世
9	真室道遺跡	散布地	旧石器時代・縄文(早期)	51	横前遺跡	集落跡	旧石器時代
10	八幡裏遺跡	散布地	旧石器時代	52	安食館跡	城館跡	中世
11	中峯山遺跡	散布地	縄文時代(早期)	53	前野遺跡	散布地	縄文時代
12	下向野遺跡	散布地	縄文時代(前期)	54	新堤遺跡	集落跡	旧石器時代
13	山崎Ｄ遺跡	散布地	旧石器時代・縄文時代	55	熊ノ堂遺跡	散布地	中世
14	山崎Ｃ遺跡	散布地	旧石器時代	56	新町後遺跡	散布地	縄文時代(中期)
15	山崎Ｂ遺跡	散布地	縄文時代(前期)	57	駒場遺跡	散布地	縄文時代
16	山崎Ａ遺跡	散布地	旧石器時代	58	鳥越館跡	城館跡	中世
17	下山崎Ａ遺跡	散布地	縄文時代	59	滝ノ倉遺跡	散布地	旧石器時代・縄文時代(早・前期)
18	下山崎Ｂ遺跡	散布地	旧石器時代・縄文時代	60	上新田Ａ遺跡	散布地	縄文時代(前期)
19	山岸遺跡	散布地	旧石器時代	61	上新田Ｂ遺跡	散布地	縄文時代(前・晩期)
20	白山Ｅ遺跡	散布地	旧石器時代	62	滝ノ倉前Ａ遺跡	散布地	縄文時代
21	白山Ｄ遺跡	散布地	旧石器時代	63	滝ノ倉前Ｂ遺跡	散布地	縄文時代
22	白山Ｃ遺跡	散布地	旧石器時代	64	盃盛館跡	城館跡	中世
23	白山Ｂ遺跡	散布地	旧石器時代・縄文時代	65	稲荷山遺跡	散布地	縄文時代(前期)・平安時代
24	白山Ａ遺跡	散布地	旧石器時代・縄文時代	66	福宮遺跡	散布地	縄文時代・奈良時代
25	上野遺跡	集落跡	縄文時代(前期)	67	清水端遺跡	散布地	縄文時代・中世
26	下上野遺跡	集落跡	縄文時代(中期)	68	八幡原１遺跡	散布地	縄文時代・奈良時代
27	下馬札遺跡	集落跡	縄文時代(中期)	69	八幡原２遺跡	散布地	縄文時代・奈良時代
28	上ミ野Ａ遺跡	散布地	旧石器時代・縄文時代	70	高田遺跡	散布地	縄文時代・奈良時代
29	丸森Ａ遺跡	散布地	旧石器時代(後期)	71	仁間磯ノ沢Ｂ遺跡	散布地	縄文時代・弥生時代
30	丸森Ｂ遺跡	散布地	旧石器時代(後期)	72	外久保遺跡	散布地	縄文時代(早・中期)
31	福田山Ａ遺跡	集落跡	縄文時代(前・中期)・弥生時代	73	虫の森遺跡	集落跡	縄文時代(中期)
32	福田山Ｂ遺跡	集落跡	旧石器時代・縄文時代	74	本宮後塚	石塚	中世
33	仁間磯ノ沢Ａ遺跡	集落跡	縄文時代(晩期)	75	比丘尼館跡	城館跡	
34	海藤館跡	城館跡	中世時代	76	小泉山遺跡	散布地	縄文時代
35	宮内遺跡	集落跡	縄文時代(晩期)・平安時代	77	芝草山遺跡	散布地	縄文時代(前・中期)
36	新庄城跡	城館跡	中世～江戸	78	沢口遺跡	散布地	縄文時代(前期)
37	荒小屋遺跡	散布地	旧石器時代・縄文時代	79	小泉Ａ遺跡	散布地	縄文時代
38	稲荷前遺跡	散布地	縄文時代・鎌倉時代	80	小泉Ｂ遺跡	散布地	縄文時代(中期)
39	大清水遺跡	散布地	縄文時代(晩期)	81	杢蔵Ａ遺跡	散布地	縄文時代(後期)
40	梅ヶ崎山Ｂ遺跡	散布地	縄文時代	82	杢蔵Ｂ遺跡	散布地	縄文時代(前・中期)
41	梅ヶ崎山Ａ遺跡	散布地	縄文時代(中期)	83	吉沢遺跡	散布地	縄文時代
42	山崎山Ｃ遺跡	散布地	縄文時代	84	仁間磯ノ沢Ｃ遺跡	散布地	縄文時代

埋設土器群、大量の土器や石器が出土した捨て場が検出された。土偶もまとまって出土し、舟形町の「縄文の女神」によく類似した形態である。後期の初めでは、中川原Ｃ遺跡で土坑などが、隣接する立泉川遺跡で捨て場が確認されている。指首野川と升形川の間の湿地帯に位置する宮内遺跡は、縄文時代晩期の遺跡である。亀ヶ岡式土器、石器、土偶などの遺物が出土した。

弥生時代であるが、当市の登録遺跡は、福田山Ａ遺跡と仁間磯ノ沢Ｂ遺跡のわずか２カ所のみである。両遺跡は新庄中核工業団地造成のため、昭和55年に山形県教育委員会によって発掘調査が行われた（山形県教委1981）。弥生時代中期の土器片が出土した。現況では市内の弥生文化については不明な部分が多い。同じ最上地方の遺跡としては、大蔵村の上竹野遺跡、最上町のげんだい遺跡、金山町の朴山野中（ほうやまのなか）遺跡などがある。上竹野遺跡は、古くから弥生時代の遺跡として知られていたが、近年の発掘調査により弥生時代前期から中期初めの住居跡や土坑、捨て場、墓地の存在が明らかになった。墓は合口土器棺による再葬墓が中心である。しかし、稲作の痕跡は検出されておらず、縄文時代の伝統が継続する社

会であった可能性がうかがわれる。

古墳時代から古代にかけての遺跡は最上地方では少なく、この時代の詳細は分かっていない。また、県内での古墳の分布は置賜地方に多く、最上地方から古墳は確認されていない。

奈良時代の和銅５（712）年９月に越後国の出羽郡をもとに出羽国が建てられる。この時は出羽・田川・飽海郡からなっており、翌月に陸奥国から最上（現在の村山・最上地方）・置賜の二郡を出羽国に編入したとされる。「続日本記」には天平９（737）年、陸奥按察使（あぜち）大野東人が多賀城から色麻柵を経て大室塞に到着し、その後北へ進み比羅保許（ひらほこ）山に陣を置いたとの記載がある。比羅保許山は最上地方であることは確かと考えられ、当地方が中央の歴史書に現れる最初とされる。天平宝字３（759）年８月 26 日条の「平戎」駅設置の記事から古代の官道が新庄を通ったことは十分に考えらえる。

奈良・平安時代の遺跡は中関屋遺跡を含め９カ所登録されているが、詳細が分かっていない部分が多い。平安時代の宮野遺跡は新田川北岸の河岸段丘上に位置し、竪穴住居跡が１棟検出されている。煙道が付く隅丸方形である。10 世紀頃までの物と思われる須恵器・土師器や赤焼土器などが出土している（山形県教委 1981b・新庄市 1989）。福田には八幡原窯跡があり、９世紀中頃から後半の時期に比定されている（山形県教委 2008）。本合海周辺には須恵器を出土する遺跡が分布する。また、出羽国内陸から出羽国府へと至る最上川沿いには、奈良時代末から平安時代初期にかけて、水駅が設置され、「水道駅路」が整備されていった。「野後（のじり）」駅推定地で官衙的施設の存在が指摘されている大石田町駒籠楯跡、「避翼（さるはね）」駅推定地とされる舟形町ホーヤ沢遺跡、「佐藝（さけ）」駅推定地の戸沢村出舟遺跡など、水駅に比定される遺跡が存在する。新庄市の八幡原１遺跡や八幡原窯跡などは、水駅や交通路との関わりがうかがわれる。

11 世紀中頃には、村山郡の中に摂関家領の寒河江・小田島荘が成立したが、新庄付近は国衙領として残っていたと考えられる。

中世に入ると最上氏は庶族を各地に配し、村山・最上地方の支配を固めた。最上地方には成沢兼義の六男・満久が清水（大蔵村）に配され、土地の名をとって清水氏を称した。清水氏は文明８（1476）年に築かれた清水城を本拠に、最上地方南部を支配した。

最上義光は最上地方への勢力拡大をはかり、天正８（1580）年に小国本城（最上町）を攻め、細川氏を追放した。細川氏に代わって家臣の蔵増氏が入部し、後に小国氏を称した。次に義光は天正９（1581）年に鮭延城を攻略し、城主・鮭延秀綱は義光に降った。その後、秀綱は最上家の重臣となり、現在の真室川町・金山町・鮭川村を治めた。こうして義光の最上地方支配は完了し、以降、本地方は清水氏・小国氏・鮭延氏の三勢力に分立し、それぞれの居城を中心に領内の繁栄に努めた。

関ヶ原の戦いで徳川方に付いた最上義光は、57 万石の領地を与えられ大々名となる。最上家は豊臣方についていたと噂されていた清水氏の討伐を決断する。慶長 19（1614）年、義親の庶兄である最上家親は延沢遠江守と左沢城主・日野将監に清水氏討伐を命じ、清水城を攻撃、清水氏は滅亡した。

清水氏滅亡後、家親は日野将監に蔵入地となった遺領を管理させた。日野将監は清水城に入らず、新庄に居城（新城）を設け、城下町の整備など領地の管理にあたった。以後は清水に代わって新庄が最上地方の中心となる。しかし、家親の急死を発端とする重臣間の対立が深刻化し、元和８（1622）年に山形藩は改易を命ぜられた。

最上氏の改易後、山形藩の遺領のうち６万石が戸沢政盛に与えられ、元和８（1622）年に新庄藩が誕生した。領地は最上地方と谷地などを含む村山地方の一部であった。政盛の義兄・鳥居忠政は最上川水運掌握のために大石田河岸の獲得を考え、政盛に要求して谷地２万石と大石田・尾花沢２万石を交換した。政盛は最初に真室城に入部したが手狭であったため、日野将監の居城であった新城を拡大整備し、寛永２（1625）年に新庄城（沼田城）が完成すると新庄に移住した。この頃の新庄藩の領知は、開発新田などを合わせて６万8,200石となった。移住後、新庄城は江戸時代を通じて、戸沢氏歴代の居城となった。

城は本丸・二の丸・三の丸を備える平城である。本丸は東西 110 m、南北 140 mの規模で、四囲に堀と土塁をめぐらし、天守閣、隅櫓、北半分に城館を配していた。本丸を囲んで二の丸、三の丸が配され、二の丸は諸役所、米蔵、名門藩士の屋敷が置かれ、三の丸には侍屋敷が置かれた。城址の建物は残っていないが、現在は市指定史跡に指定され最上公園となっている。また、「新庄藩主

戸沢家墓所」は、国指定史跡となっている。新庄太田の瑞雲院境内（六棟）と、上西山の桂嶽寺境内（一棟）の二カ所にあり、「御霊屋（おたまや）」と呼ばれている。

藩政期の宝暦６（1756）年が発祥と伝えられる新庄まつりは、東北地方最大の屋台まつりとして広く知られている。平成 28 年にユネスコ無形文化遺産に認定されている。

慶応３（1867）年の大政奉還により江戸幕府は倒れ、新政府が樹立し、戊辰戦争へと突入した。新政府軍に対抗するため奥羽越列藩同盟が結ばれ、新庄藩も同盟軍に加わった。しかし、新庄藩は同盟を離脱し、同盟離脱に対する庄内軍の攻撃により、慶応４（1868）年７月 14 日に新庄城は城下町もろとも焼失してしまう。藩主・戸沢正実は秋田に逃れ、明治元（1886）年 10 月１日に帰国、城下の復興が始められた。

版籍奉還、廃藩置県を経て明治４（1871）年に新庄藩は新庄県となる。その後まもなく山形県に合併され、山形県新庄出張所（同６年、新庄支庁に改称）に管轄される。また、同 22（1889）年には市制・町村制の施行により新庄町が誕生した。交通面では、初代山形県令・三島通庸による道路開削が行われ、同 36（1903）年には新庄で初となる鉄道（奥羽線）が開通し、新庄駅がつくられた。

大正３（1914）年の第一次世界大戦を契機に日本の産業が急速に発展し、国民生活が向上してきた。また、政治・社会・文化などの面で大正デモクラシーと呼ばれる新しい風潮が見られるようになった。教育の面では、自由主義教育や児童中心主義教育という新しい教育が行われるようになり、実科高等女学校が多くなった。交通の面では、大正３（1914）年に新庄・酒田間の酒田線（1917 年、陸羽西線に改称）、同６（1917）年には新庄・小牛田間の陸羽東線が全線開通した。

昭和 16（1941）年に太平洋戦争が始まり、アメリカによる空襲で新庄や真室川飛行場なども爆撃を受けた。昭和 20（1945）年８月 15 日の日本の降伏により戦争が終結し、同 24（1949）年４月１日から市制施行され新庄市が誕生する。その後、同 30（1955）年４月１日の萩野村合併、同 31（1956）年９月 30 日の八向村合併を経て現在の新庄市となる。

引用・参考文献

佐藤鎮雄　2008 『出羽国ができるころ－出羽建国期における南出羽の考古学－』 山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
新庄市　1989 『新庄市史　第一巻　自然・原始・古代・中世編』
新庄市　2002 『新庄市史　別巻　自然・文化編』
山形県教育委員会　1981a 『新庄中核工業団地関連遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第 43 集
山形県教育委員会　1981b 『分布調査報告書（８）』山形県埋蔵文化財調査報告書第 45 集
山形県教育委員会　2008 『最上川関連遺跡確認調査報告書（１）』山形県埋蔵文化財調査報告書第 209 集
山形県教育委員会　2009 『山形県内重要遺跡確認調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第 211 集
山形県高等学校社会科研究会最北支部地理部会　1991 『新庄・最上＝郷土資料＝』
（公財）山形県埋蔵文化財センター　2002 『中川原Ｃ遺跡・立泉川遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 98 集
（公財）山形県埋蔵文化財センター　2007 『中川原Ｃ遺跡第４次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 163 集
（公財）山形県埋蔵文化財センター　2019 『上竹野遺跡第１・２次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 234 集

Ⅲ　調査成果

1　遺跡の概要

遺構の分布

調査では、平安時代の遺構が検出された。掘立柱建物跡３棟、溝跡１条、土坑、柱穴などが確認された。遺構の全体の平面図と各調査区の平面図については、第４～10図に掲載している。以下に遺構の分布状況について述べる。

１区の北端から西端、２区西端にかけて、SD1溝跡がめぐり、ほとんどの遺構はこの溝の南側・東側に分布している。溝の北側・西側は遺構分布が希薄である。

掘立柱建物跡であるが、SB8が１区中央の西寄りに位置する。また、１区と２区の境界にかけてSB23、その南にSB42が位置する。SB23の東側には、柱穴群が分布する。土坑は、SB42と重複してSK21が、その北側にSK20・37と集中が認められる。

層序

調査区の基本層序であるが、Ⅰ～Ⅴ層で大別層を設定し、その中で細分を行った（第11・12図）。

Ⅰ層―現代の盛土と考えられる層である。層の土色や含有物でⅠa、Ⅰb層に分けている。調査区全域に認められる。

Ⅱ層―黒褐色や暗褐色シルトを主体とし、旧表土と考えらえる層である。調査区の西側に認められる。Ⅱa層は黒褐色シルト層で、しまり・粘性が強い。部分的に撹乱を受けている。Ⅱb層は暗褐色細砂を主とし、シルトも混じる。Ⅱc、Ⅱd層は、調査区西壁付近で部分的に確認される層である。

Ⅲ層―シルト質砂や細砂の層である。Ⅲa、Ⅲb層に分けられる。Ⅲa層は暗褐色シルト質砂層で、調査区西側に認められる。Ⅲb層は、にぶい黄褐色細砂層である。部分的にシルト質になったりする。

Ⅳ層―にぶい黄褐色の粘土層である。調査区の西側に分布する。

Ⅴ層―砂混じりの礫層である。河川の氾濫による堆積物と考えられる。

平安時代の遺構検出面は、主にⅢb層上面である。本来は、遺構の構築はより上層からと推定される。

2　検出された遺構

検出された遺構は、平安時代に帰属するものがほとんどである。土坑や柱穴などで遺物が出土していないものについては、覆土の状況で平安時代の遺構に類似するものをこの時期のものととらえた。

掘立柱建物跡

SB8（第13図）

１区のF・G－３・４グリッドで検出された掘立柱建物跡である。柱穴は６基確認された。EP9～14で構成される。建物跡の規模は、東西２間、南北２間、東西4.2m、南北4.2mの正方形を呈する。主軸方向は、N－２.7°－Eである。柱心心間距離は、各々2.1mとなる。柱穴は平面形が隅丸方形や円形を呈し、直径は38～64cm、深さは27～43cmである。EP9～11、13・14は柱痕が確認された。柱痕は直径約15～20cmと推定される。他の遺構との新旧関係であるが、建物の北西隅はSD1に切られており、SD1より古い。またSK63より新しい。

遺物は出土していない。遺構の覆土の状況から判断して、建物跡の時期は平安時代と考えられる。

SB23（第15図）

１・２区のE・F－５・６グリッドで検出された掘立柱建物跡である。柱穴は10基確認された。EP7・24～32で構成される。建物跡の規模は、桁行３間、梁行２間、南北5.4m、南北4.6mの方形を呈する。主軸方向は、N－10.0°－Eである。柱心心間距離は、桁行が各々1.8m、梁行が各々2.3mとなる。柱穴は平面形が隅丸方形や円形を呈し、直径は20～51cm、深さは14～30cmである。EP24・26以外は柱痕が確認された。柱痕は直径約15～20cmと推定される。

遺物はEP25から第25図37の土師器甕が出土している。建物跡の時期は平安時代と考えられる。

SB42（第16図）

１・２区のＣ－５・６グリッドで検出された掘立柱建物跡である。柱穴は６基確認された。EP6・43 ～ 47 で構成される。南側を現代の撹乱 SX60 によって切られており当初の規模は不明であるが、残存する建物跡の規模は、東西２間、南北２間以上、東西 5.6m、南北 4.0m 以上の方形と考えられる。主軸方向はＮ－ 5.8°－ W である。柱心心間距離は、EP6・45 の間が 2.9 m、EP45・46 の間が 2.7 m、EP6・44 の間と、EP46・47 の間が 2.1 m、EP43・44 間が 2.0 mとなる。柱穴の平面形は隅丸方形や不整円形を呈し、直径は 22 ～ 78cm、深さは 12 ～ 48cm である。EP43 は撹乱を受け、柱痕のみの残存となる。

遺物は EP47 下面とその周囲の層から第 26 図 42 の縄文土器深鉢が出土している。この建物跡に由来するのではなく、下層に由来するものである。遺構の時期であるが、平安時代と考えられる。

土坑

６基の土坑が検出されている。平安時代に帰属するものがほとんどである。遺物が出土していないものについては、覆土の内容により平安時代に帰属するものとして掲載した。

SK20（第 17 図）

２区のＤ－５グリッドに位置する。長軸 62cm、短軸 48cm、深さ 24cm、平面形は不整円形である。覆土は２層に分かれ、焼土を主体とし炭化物が混じる。土師器などの遺物が多く出土した。他の遺構との切り合いであるが、東側で SP62 に切られ、北側で小ピットと重複するが前後関係は不明である。覆土の内容から考えると、生活で不要となった物等を廃棄した場所と考えられる。

遺物は須恵器と土師器が出土した。須恵器は、第 24 図 14 の坏、15 の蓋、土師器は、第 24 図 16 ～ 20 の甕が出土している。なお、15 の蓋は内面が摩滅し墨痕があり、転用硯と思われる。また、覆土１層の土壌を採取し、含まれている炭化物等の同定を委託した。詳細は第Ⅳ章に記した。

SK21（第 17 図）

２区のＣ－５グリッドに位置する。平面形は円形で、規模は直径 94cm、深さ 72cm である。断面形は少しフラスコ状となる。覆土は４層に分かれ、遺物が出土する。覆土１～３層には焼土が含まれる。人為的な廃棄によると考えられる。覆土の内容は SK20 に類似する。

遺物は須恵器と土師器が出土した。須恵器は、第 23 図６・７の坏、土師器は、第 23 図８の埵、９～ 13 の甕が出土している。なお、６と８は SP35 出土遺物と接合した。

SK22（第 17 図）

１区のＤ－９グリッドで検出された。平面形は不整楕円形である。規模は長軸 215cm、短軸 170cm、深さ 42cm である。壁の立ち上がりは緩やかで、断面形は皿形である。底面には凹凸が認められる。覆土は４層に分かれる。覆土中からは円礫などの出土が多い。

遺物は須恵器、土師器、石器、金属製品が出土した。須恵器は、第 25 図 21 の壺、22 の甕、23 の鉢が出土している。石器は第 26 図 45 の石皿が出土しており、縄文時代のものが混入したと思われる。金属製品は、写真図版 29 の 46 の銭貨が出土している。

SK37（第 18 図）

２区のＤ－５・６グリッドで検出された。平面形は不整楕円形である。規模は長軸 175cm、短軸 132cm、深さ 34cm である。壁の立ち上がりは緩やかで断面が皿形状となる。覆土は、黒褐色砂混じりシルト層が主体である。遺物は、土師器甕の小破片が出土している。時期は平安時代である。

SK15（第 18 図）

１区のＨ－４グリッドで検出された。平面形は円形である。規模は直径 100cm、深さ 43cm である。壁の立ち上がりは、東側が緩やかで西側は急である。覆土は黒褐色シルトが主で、自然堆積と推定される。西側で平安時代の溝跡である SD1 に切られている。遺物は出土していない。

SK63（第 18 図）

１区のＧ－４グリッドで検出された。平面形は不整方形である。規模は長軸 128cm、短軸 90cm、深さ 42cm である。壁の立ち上がりは東側は緩やかであるが、南・北壁は急である。覆土は２層に分かれ、焼土ブロックや炭化物を含み、人為的な廃棄によるものと考えられる。遺物は出土していない。

性格不明遺構

SX36（第 18 図）

２区のＤ－５グリッドで検出された。平面形は楕円

形である。規模は長軸 100cm、短軸 64cm、深さ 14cm である。南西側が一段下がる。覆土は、人為堆積と考えられるが、後世の撹乱の影響を受けていると推測される。遺物は、土師器甕の破片が出土している。平安時代と考えられる。

ピット・柱穴

検出されたピット・柱穴で、主なものについて記載した。遺構番号をふって登録したものは 32 基あるが、番号をふっていないものを含めると、約 190 基検出されている。特記すべき遺構について以下に述べる。

SP62（第 17 図）

２区のＤ－５・６グリッドで検出された。楕円形である。SK20 を切る。規模は長軸 76cm、短軸 39cm、深さ 38cm である。

遺物は第 25 図 35 の土師器甕が出土している。

SP35（第 19 図）

２区のＤ－５グリッドで検出された。平面形は不整楕円形である。規模は長軸 58cm、短軸 34cm、深さ 9cm である。覆土に焼土ブロックや炭化物を含む。

遺物は須恵器と土師器が出土した。須恵器は第 23 図６の坏、土師器は８の埵、第 25 図 28 の甕が出土している。なお、６と８は SK21 出土遺物と接合した。遺構の時期は平安時代である。

SP41（第 19 図）

２区のＤ－５グリッドで検出された。平面形は楕円形状で、南側は深く落ち込み、北側が浅くなる。規模は長軸 71cm、短軸 36cm、深さ 52cm である。柱穴であり、覆土１層は柱の抜き取り痕と考えらえる。

遺物は第 25 図 31 の土師器坏が出土している。出土状況は、１層の上部に口縁を斜め上にして出土した。口縁の一部を欠くが、表土掘削の際に破損したものであり、本来は完形であったと思われる。柱の抜き取りを行った後に、埋納した可能性があると思われる。

SP61（第 19 図）

２区のＤ－５グリッドで検出された。平面形は楕円形である。規模は長軸 50cm、短軸 30cm、深さ 40cm である。柱穴と考えられる。

遺物は第 25 図 34 の土師器甕が出土している。

SP49・50（第 20・21 図）

１区のＤ－８グリッドで検出された。SP49 の規模は長軸 50cm、短軸 40cm、深さ 26cm である。SP50 の規模は長軸 60cm、短軸 40cm、深さ 23cm である。重複しており SP49 が古く、SP50 が新しい。どちらも柱穴と考えられる。遺物は SP49 から土師器甕の破片が出土している。平安時代に帰属する。

SP53（第 20 図）

１区のＤ－７グリッドで検出された。平面形は隅丸方形状で、長軸 48cm、短軸 39cm、深さ 13cm である。柱痕が検出された。土師器片が出土しており、平安時代に帰属する。

SP54（第 20 図）

１区のＤ－７グリッドで検出された。概ね円形で直径 35cm、深さ 11cm である。柱痕が認められる。

SP55（第 20 図）

１区のＤ－７グリッドで検出された。円形で直径 35cm、深さ 22cm である。柱痕が認められる。

SP56（第 20 図）

１区のＤ－７グリッドで検出された。円形で直径 35cm、深さ 14cm である。柱痕が認められる。

SP57（第 20・21 図）

１区のＤ－８グリッドで検出された。概ね円形で直径 35cm、深さ 24cm である。柱痕が認められる。

遺物は第 25 図 33 の須恵器甕の破片が出土している。平安時代に帰属する。

SP58（第 20 図）

１区のＤ－８グリッドで検出された。楕円形で長軸 55cm、短軸 35cm、深さ 17cm である。

SP17・18（第 21 図）

１区のＦ－５グリッドで検出された柱穴である。

SP17 は円形で直径 17cm、深さ 20cm である。SP18 は隅丸長方形で長軸 48cm、短軸 35cm、深さ 32cm である。南東隅に柱痕が認められた。重複関係であるが、SP18 が古く、SP17 が新しい。

SP19（第 21 図）

１区のＧ－５グリッドで検出された柱穴である。不整楕円形で長軸 79cm、短軸 55cm、深さ 36cm である。南側壁寄りに柱痕が認められる。

溝跡

SD1（第 21・22 図）

１区北側から西側、２区西側にかけて検出された。1

区の北東隅から西側に向かって延び、Ｉ－５グリッドで南西方向へ流路を変えて、２区南西隅に至る。１区の東側に向かって調査区外へと続く。２区南西隅では、調査区外へと本来は続くものと思われるが、現代の撹乱SX60によって切られている。幅は0.8～2.25ｍ、深さは20～34cm、総長は65ｍである。覆土は４層に分かれ、１・２層は黒褐色シルト、３・４層は砂が主体となる。断面形は、皿状やＵ字状になり、底面は概ね平坦であるが、Ｇ・Ｈ－３・４グリッドでは底面に不規則な凹凸が認められる。Ｉ－７～９グリッドでは、覆土１層上に炭化材・炭化物が集中して廃棄されている。この炭化材については、採取して樹種の同定を委託した（第Ⅳ章参照）。他の遺構との重複関係は、SB8より新しく、SK15より古い。

出土遺物であるが、第23図の１～３須恵器坏、４の須恵器壺、５の須恵器甕、その他土師器片、また縄文時代の遺物として第26図43の剥片、44の石皿が出土している。遺構の時期は平安時代と考えられる。

３　出土した遺物

出土した遺物は、平安時代に帰属するもの、縄文時代に帰属するものがある。個々の遺物の観察表については、表３～６に記した。また、各遺構からの種類別重量については、表７に記した。出土遺構等については、前述しているので、具体的な内容について考察する。

平安時代の遺物

須恵器、土師器、金属製品（銭貨）が出土している。須恵器・土師器の主なものについては、第29図に集成した。

須恵器は、坏・蓋・壺・甕が出土している。坏はロクロ成形で、底部から口縁にかけて緩やかに外傾する器形である。底部は全て回転糸切り調整である。なお、坏の出土量は、須恵器の個体が主である。

蓋（15）は、天井部に糸切りの痕跡が見られ、切り離しの後に箆削りを行っている。中央がくぼむツマミが付く。口縁は残存していない。

壺は底部破片と体部破片と考えられる個体が出土している。底部は貼り付け高台が付く器形となる。甕は全体の器形が判明する資料はない。頸部と体部の破片が出土している。24は頸部である。外面には平行のタタキ目、内面に同心円状のアテ痕が付く個体が多い。

土師器は、坏、甕、埵が認められる。坏（31）はロクロ成形で、底部は回転糸切りである。いわゆる赤焼土器と呼称されるものである。

埵は一個体のみの出土で、破片資料のため全体の器形は不明である。外面・内面に荒いハケメを施し、内面の口縁下に段が認められ、ナデ調整が施される。

甕は最も出土が多い。全体の器形が分かるものは限られているが、口縁部が短く外反し、長胴となる器形である。口縁部にはナデ調整を施し、外面や内面には全体にハケメが施される。底面には、木葉痕が認められる。

最上地方の須恵器・土師器の資料については、新庄市八幡原窯跡の資料が報告されている（阿部・丸吉2009）。須恵器は坏・有台坏・蓋・皿・壺・甕が認められる（第30図）。坏を見ると、底部が回転糸切りであり、器形や底部から口縁にかけての立ち上がりの形状が中関屋遺跡の資料と類似する個体が認められる。底部の切り離し径がやや小振りながら、見込み部分（内底面）では大きく押し広げられる整形を受けている（第30図９など）個体は、中関屋遺跡の第23図６・７、第24図14などと共通している。[1]これらの資料については、９世紀第２四半期から第３四半期に位置づけられており、中関屋遺跡の出土須恵器もこの年代に該当するものと推定される。

その他、金属製品であるが、SK22より銭貨が出土した。外縁は腐食が進んでおり欠けている部分が多い。委託による保存処理を施した。処理の過程で２枚が付着している事が判明したが、分離すると破損の恐れがあるためそのままの状態で保管している。銭種は不明である。

縄文時代の遺物

縄文時代の遺物として、縄文土器１個体が出土している（第26図42）。また、石器では剥片が１点（第26図43）、石皿が２点（第26図44・45）が出土している。石皿は平安時代のSK22土坑から出土しているが、縄文時代の物を二次的に利用したもの（カマドの骨組みなど）が廃棄されたものと思われる。

縄文土器の器種は深鉢である。42aの口縁部は波状口縁となるが、42bの口縁には連続した押圧が認められる。口縁部上に、原体LRの押圧縄文が横に２条施され、体部上にも同じく２条が施される。波頂部下の押圧縄文間

には、指の圧痕と思われる押圧文が認められる。地文は、原体 LR 0 段多条の斜行縄文が施される。胎土には繊維が多く含まれる。42c は、体部下半の破片と考えられる。

時期であるが、縄文前期初頭に位置づけられると考えられる。当時期の土器型式として、上川名Ⅱ式があり、これに該当するものと思われる。なお、縄文原体を平行に押圧する手法は県内に類例が乏しく、位置づけには検討を要する。縄文土器の出土地点であるが、平安時代の掘立柱建物跡 SB42EP47 の遺構底面から破片が出土し、精査したところ、柱穴下や横の地山内からも同一個体の破片が出土した。縄文土器が出土した層は、平安時代の遺構検出面であるⅢ層上面より約 30cm 下、暗褐色砂質シルト層中であり、層厚は約 20cm である。縄文土器は、この地点のみの出土で、他の深く掘り下げた平安時代の柱穴・土坑などの遺構から出土は認められなかった。土器は摩滅した状態ではない。平安時代の遺構面の下に、縄文時代の包含層が広がっている可能性もある。

次に石器について述べる。第 26 図 43 は頁岩製の剥片である。出土遺構が平安時代の SD1 であるため、混入と思われる。

第 26 図 44 は石皿である。偏平な礫を用いており、両面に発達した磨面が認められる。破損し、1/4 以下の残存と思われる。また、被熱によると思われる炭化物の付着が認められる。

第 26 図 45 は、石皿と思われる。正面と側面の一部に磨面が認められるが、あまり顕著ではない。破損し、1/2 程度の残存と考えられる。

近現代の遺物

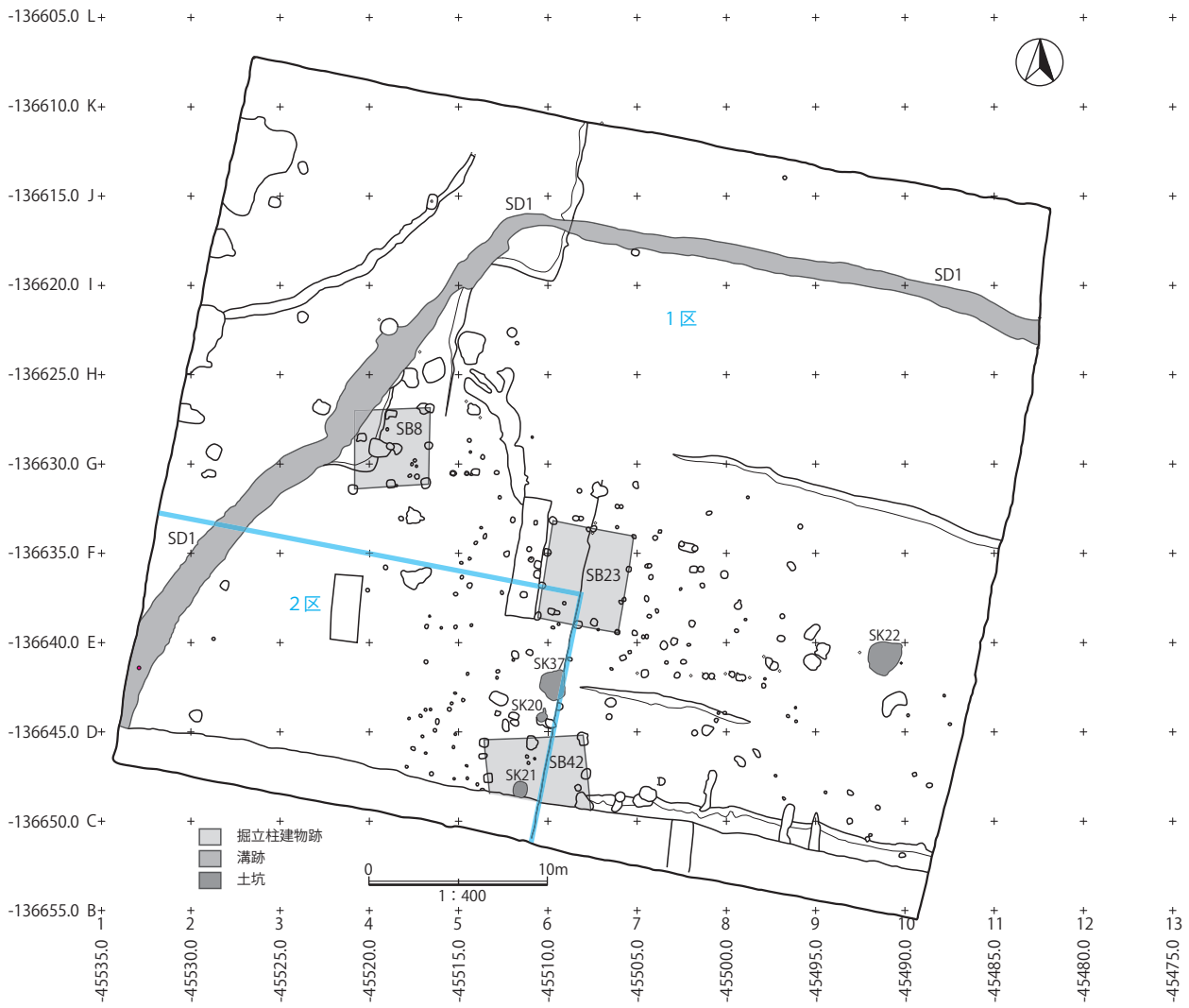
調査区南端に広がる SX60 からは、近現代の遺物が出土した。事業区内にあった工場の建物に由来するものと思われる。ガラス破片、陶磁器、金属部品などが出土した。そのうち 2 点を写真図版に掲載した。写真図版 29 の 47 は磁器の湯呑碗、48 は土管である。

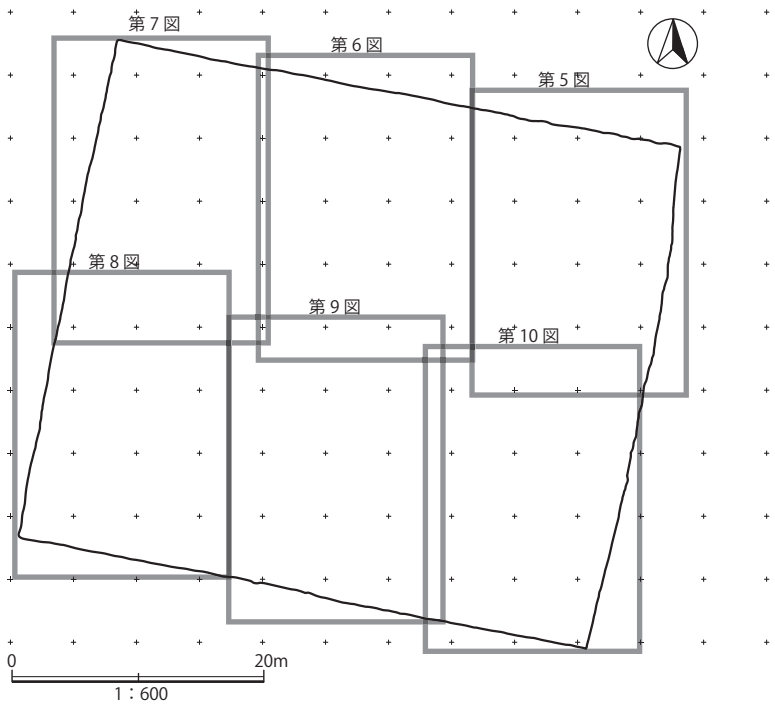
注

1）　阿部明彦氏はこのような特徴を持つ須恵器坏を 9 世紀第 2 四半世紀に位置づけられるものと考えている。

引用・参考文献

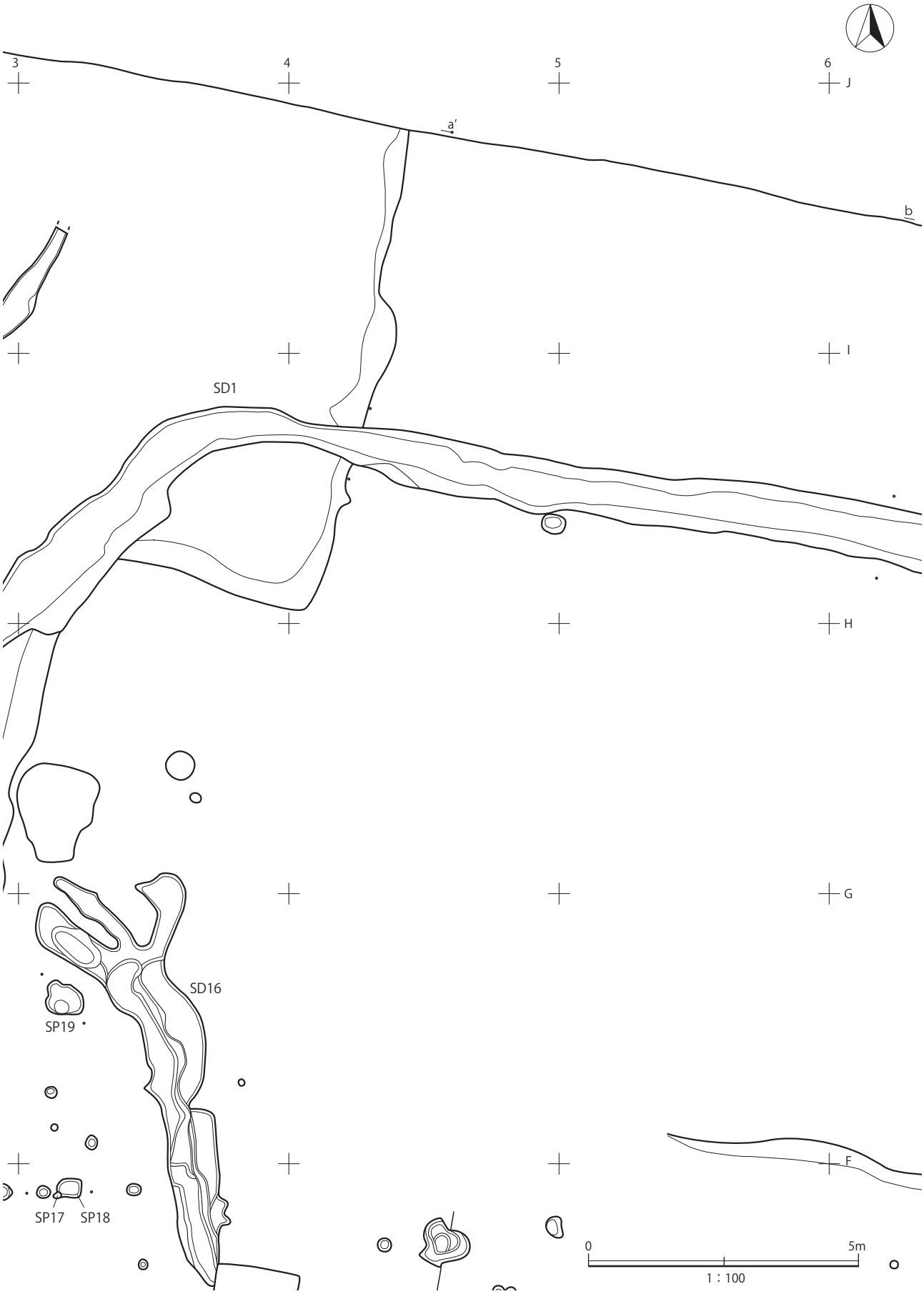
阿部明彦・丸吉繁一　2009 「第 3 章　八幡原窯跡出土遺物調査」『山形県内重要遺跡確認調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第 211 集 p.30 ～ 39
阿部明彦・水戸弘美　1999 「山形県の古代土器編年」『第 25 回古代城柵官衙遺跡検討会資料』第 25 回古代城柵官衙遺跡検討会事務局 p.63 ～ 112
早瀬亮介　2008 「前期大木式土器」『総覧 縄文土器』p.226 ～ p.233





第 4 図　調査区全体図（上）・図版割付図（下）

第 5 図　遺構配置図 1



第６図　遺構配置図２

a
0
5m
1：100
2
3
4
5
K
J
I
H
G
風倒木
撹乱
SD1
SK63
SX68
EP14
SP67
EP12
SB8
EP13

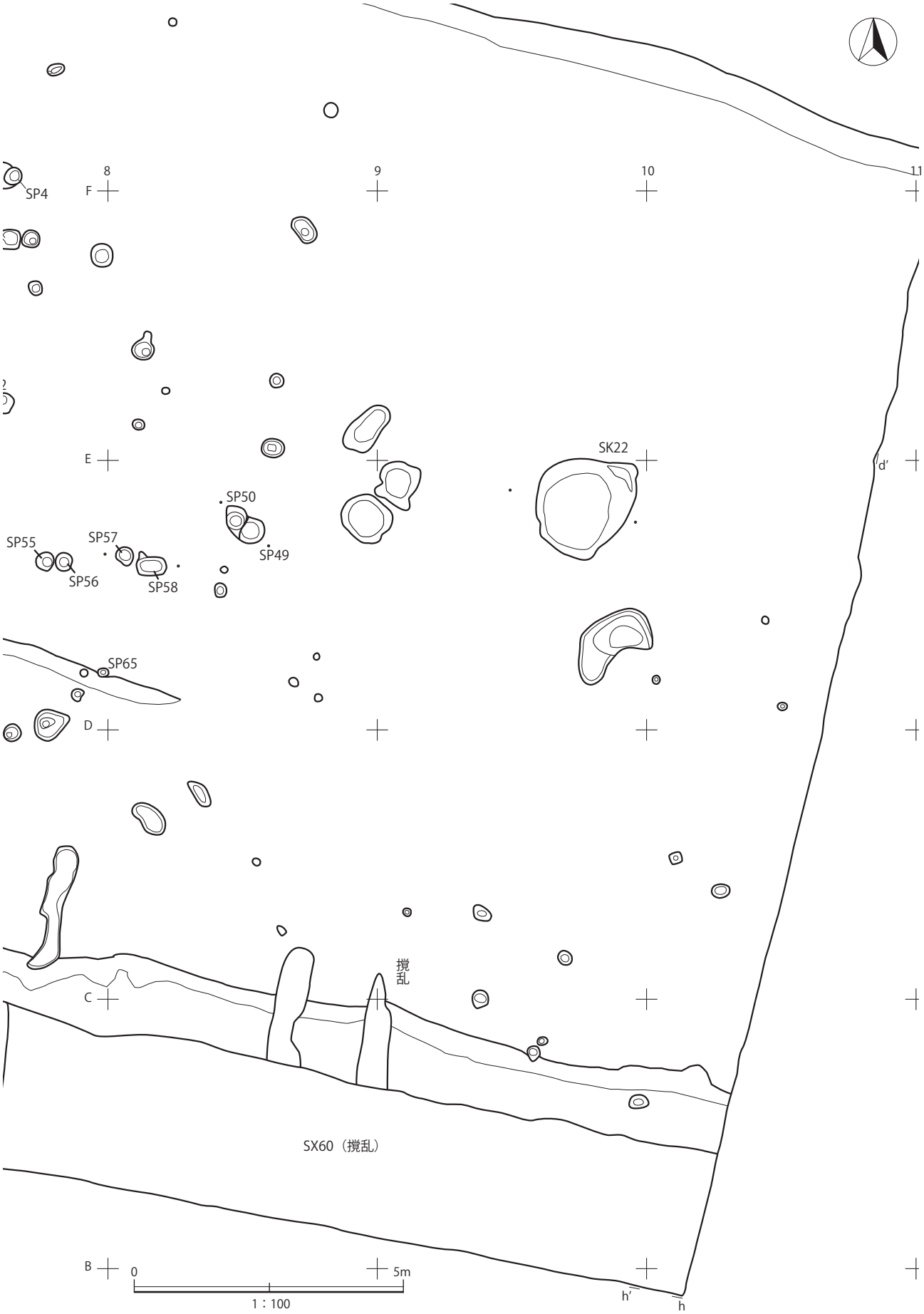
第７図　遺構配置図３

撹乱
SB8
EP14
SK63
SX68
SD1
EP9
EP10
トレンチ
RP3
SX60（撹乱）
G
F
E
D
2
3
4
e′
e
f
f′
0
5m
1：100

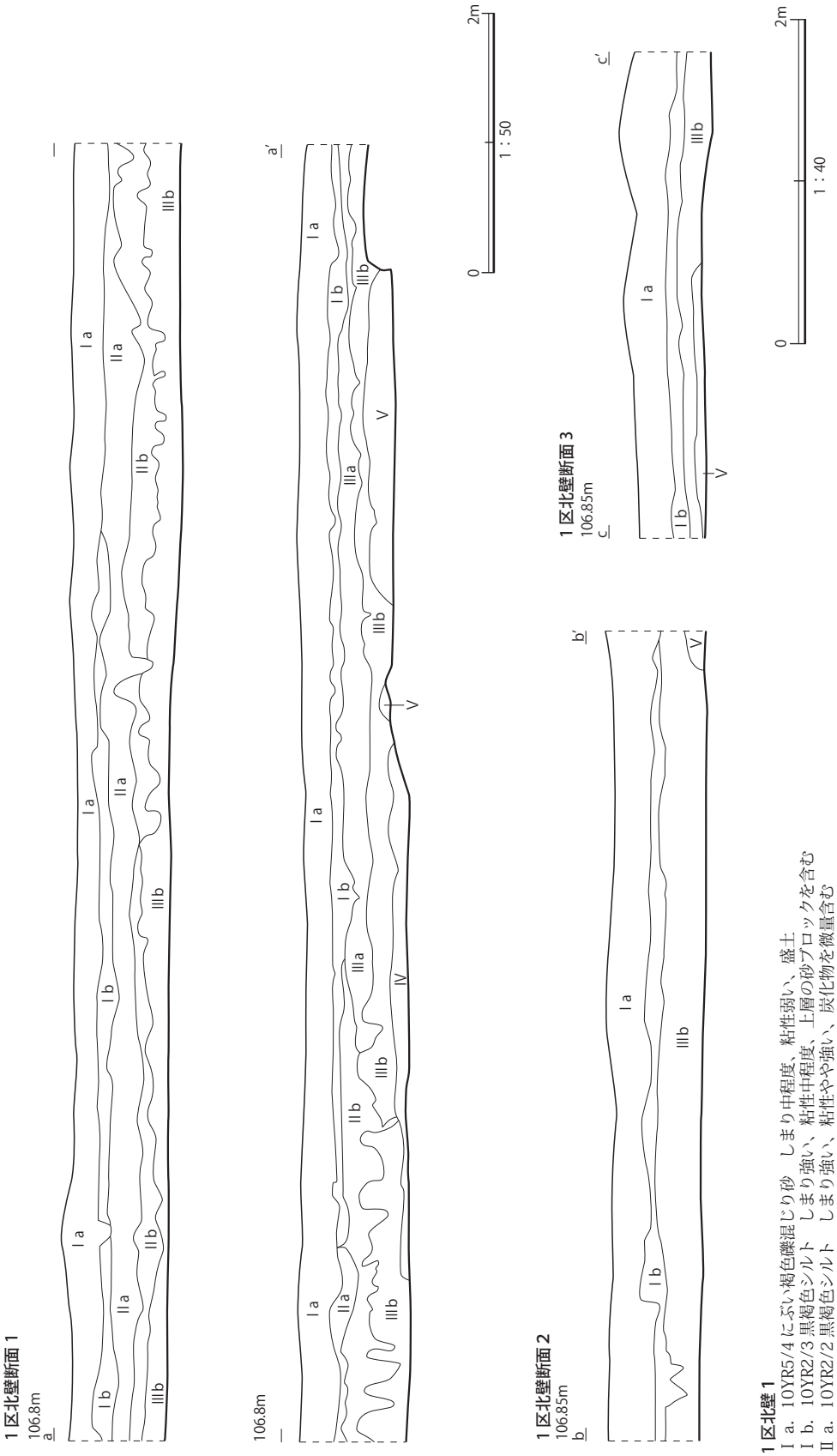
第８図　遺構配置図４

SP67
EP12
5
6
7
G
SP17
SP18
EP11
EP28
EP27
EP26
SP52
SP4
F
EP29
トレンチ
SP3
EP25
SB23
EP30
SP5
SP66
EP24
SP2
EP31
EP32
EP7
SP40
SP57
E
SP48
RP1
SP64
SP38
SP55
SP33
SK37
SP53
SP54
SX36
SP35
SK20
SP41
SP62
SP61
D
EP6
SP34
EP46
EP45
SP59
EP47
SB42
EP44
SK21
EP43
C
g'
g
トレンチ
0
5m
1：100

第９図　遺構配置図５


8
9
10
11
F
E
D
C
B
SP4
SK22
d′
SP50
SP49
SP55
SP56
SP57
SP58
SP65
撹乱
SX60（撹乱）
0
5m
1：100
h′
h

第 10 図　遺構配置図 6



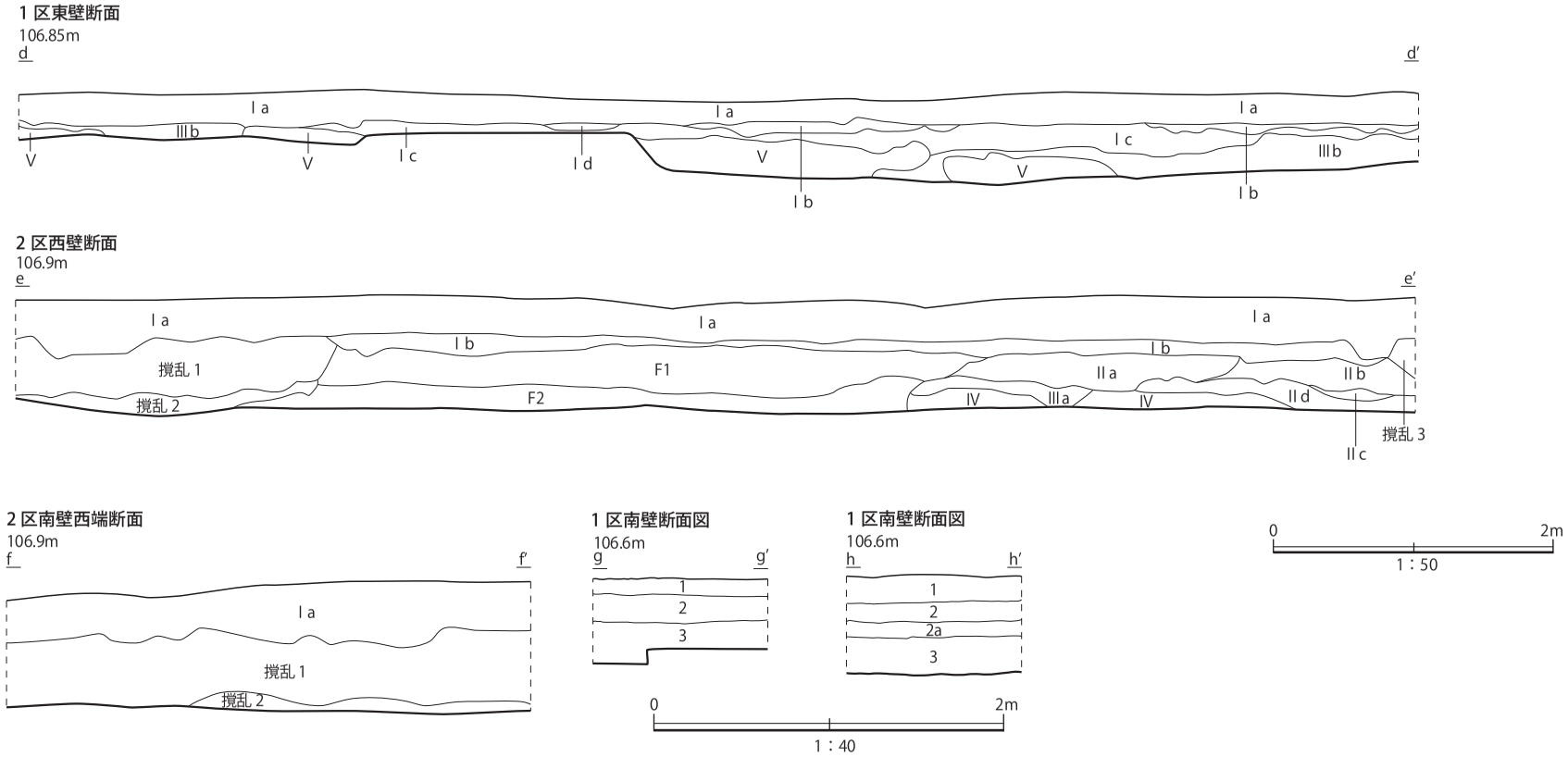
1区北壁1

Ⅰa. 10YR5/4にぶい褐色礫混じり砂　しまり中程度、粘性弱い、盛土
Ⅰb. 10YR2/3黒褐色シルト　しまり強い、粘性中程度、上層の砂ブロックを含む
Ⅱa. 10YR2/2黒褐色シルト　しまり強い、粘性やや強い、炭化物を微量含む
Ⅱb. 10YR3/3暗褐色細砂　10YR2/3黒褐色シルトブロックを10%含む
Ⅲa. 10YR3/4暗褐色シルト質砂　10YR2/3黒褐色シルトブロックを2%含む
Ⅲb. 10YR4/3にぶい黄褐色細砂　10YR2/3黒褐色シルトブロックを3%含む
Ⅳ. 10YR4/3にぶい黄褐色粘土　部分的にシルト質となる
Ⅴ. 10YR4/3にぶい黄褐色礫　直径5~10mm、砂が混じる

1区北壁2・3

Ⅰa. 10YR5/4にぶい黄褐色礫混じり砂　しまり中程度、粘性弱い、盛土
Ⅰb. 10YR2/3黒褐色シルト　しまり強い、粘性中程度、上層の砂ブロックが入る
Ⅲb. 10YR4/3にぶい黄褐色細砂　しまり強い、粘性弱い、地山の砂ブロックを全体の30%含む、礫（直径10~50mm）を7%含む
Ⅴ. 10YR3/3暗褐色砂混じりシルト　礫（直径10~50mm）を2%含む

第11図　調査区断面図1



2 区西壁・南壁

Ⅰa.　2.5Y8/4 淡黄色砂　しまり・粘性弱い、盛土（現代）
Ⅰb.　2.5YR2/2 黒褐色シルト　しまり強い、粘性弱い、礫（直径 5~20mm）を 2％含む、盛土
Ⅱa.　10YR2/2 黒褐色砂混じりシルト　しまり強い、粘性弱い、酸化鉄を含む
Ⅱb.　10YR3/3 暗褐色砂　しまり強い、粘性弱い、酸化鉄を含む、黒褐色砂混じりシルトブロック（直径 20~50mm）を 3％含む
Ⅱc.　10YR3/4 暗褐色砂混じりシルト　しまり強い、粘性弱い、礫（直径 20~50mm）を 5％含む
Ⅱd.　10YR2/1 黒色シルト　しまり強い、粘性中程度
Ⅲa.　10YR3/3 暗褐色細砂　しまり強い、粘性弱い
Ⅳ.　10YR4/6 褐色砂　しまり中程度、粘性弱い、礫（直径 10~100mm）を 20％以上含む
SD1F1.　10YR2/2 黒褐色シルト混じり砂　しまり強い、粘性やや弱い、黒色シルトブロック（直径 5~20 mm）を 5％含む
SD1F2.　10YR2/2 黒褐色シルト　しまり強い、粘性中程度、炭化物（直径 5mm）を 1％含む
撹乱 1　10YR3/3 暗褐色砂質シルト　しまり強い、粘性やや弱い、礫（直径 5~100mm）を 3％、黒褐色シルトブロック（直径 5~10mm）を 3％含む
撹乱 2　10YR3/3 暗褐色砂　しまり強い、粘性弱い、礫（直径 20~100mm）を 5％含む
撹乱 3　2.5Y7/4 浅黄色砂　しまり・粘性弱い、黒褐色シルトブロック（直径 5~20mm）を 20％含む

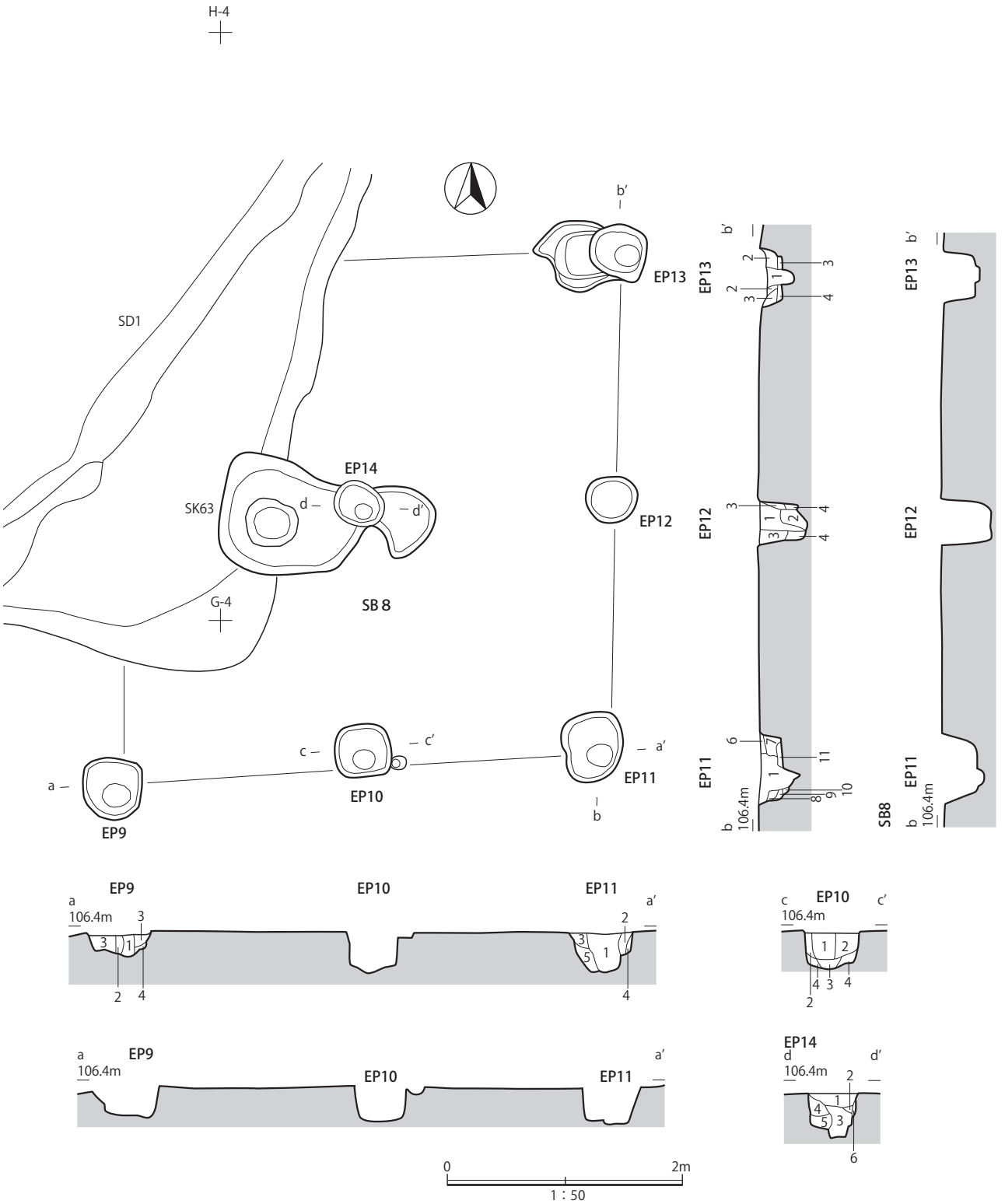
1 区東壁

Ⅰc.　10YR4/4 褐色シルト混じり砂　黒色シルトブロックを 5％含む、礫を 2％含む、撹乱されている
Ⅰd.　10YR4/4 褐色砂　礫（直径 5~30mm）を 7％含む
※Ⅰa・Ⅰb・Ⅲb・Ⅴは 1 区北壁 1 に同じ

1 区南壁

1．10YR3/3 暗褐色砂　礫を多く含む、盛土
2．10YR5/3 にぶい黄褐色砂　礫を多く含む、盛土
3．10YR3/2 黒褐色シルト混じり砂　礫が多い、現代の撹乱

第 12 図　調査区断面図 2



SB8EP9
1．10YR2/2 黒褐色シルト　しまり強い、粘性中程度、暗褐色砂ブロック（直径 5mm）を 1% 含む
2．10YR2/2 黒褐色シルト　しまり強い、粘性中程度、暗褐色砂ブロック（直径 5~10mm）を 3% 含む
3．10YR3/2 黒褐色砂　しまり強い、粘性弱い、褐色砂ブロック（直径 5~10mm）を 5 %含む
4．10YR2/2 黒褐色シルト　しまり強い、粘性中程度

SB8EP10
1．10YR2/2 黒褐色砂　しまり強い、粘性弱い、暗褐色砂ブロック（直径 5~30mm）を 10% 含む
2．10YR2/2 黒褐色砂　しまり強い、粘性弱い、暗褐色砂ブロック（直径 5~20mm）を 5% 含む
3．10YR3/2 黒褐色シルト　しまり強い、粘性中程度
4．10YR2/3 黒褐色シルト　しまり強い、粘性中程度、礫（直径 20~30mm）を少量含む

第 13 図　SB 8 平面図・断面図

SB8EP11
1．10YR2/2 黒褐色シルト　しまり強い、粘性中程度、暗褐色シルト（直径 5~10mm）を 1%含む
2．10YR2/2 黒褐色シルト　しまり強い、粘性中程度、暗褐色シルト（直径 10~30mm）を 10%含む
3．10YR2/2 黒褐色シルト　しまり強い、粘性中程度、暗褐色砂質シルトブロック（直径 5~10mm）を 5%含む
4．10YR3/3 暗褐色砂質シルト　しまり強い、粘性やや弱い
5．10YR3/3 暗褐色砂　しまり強い、黒褐色シルトブロック（5~30mm）を 10%含む
6．10YR2/2 黒褐色シルト　しまり強い、粘性中程度、暗褐色砂質シルトブロック（直径 5~10mm）を 10%含む
7．10YR2/2 黒褐色シルト　しまり強い、粘性中程度、暗褐色砂ブロック（直径 5~10mm）を 10%含む
8．10YR2/2 黒褐色シルト　しまり強い、粘性中程度、暗褐色砂ブロック（直径 5 mm）を 3%含む
9．10YR3/3 暗褐色砂　しまり強い、粘性弱い、黒褐色シルトブロック（直径 5~10mm）を 5%含む
10．10YR3/3 暗褐色砂質シルト　しまり強い、粘性やや弱い、黒褐色シルトブロック（直径 5mm）を 2%含む
11．10 に同じ

SB8EP12
1．10YR2/2 黒褐色砂質シルト　しまり強い、粘性やや弱い、暗褐色細砂ブロック（直径 5~20mm）を 5% 含む
2．10YR3/3 暗褐色砂　しまり強い、粘性弱い、黒褐色シルトブロック（直径 10~20mm）を 10% 含む
3．10YR3/3 暗褐色砂　しまり強い、粘性弱い、黒褐色シルトブロック（直径 5~30mm）を 20% 含む
4．10YR3/2 黒褐色シルト　しまり強い、粘性中程度、暗褐色砂ブロック（直径 10~20mm）を 5% 含む

SB8EP13
1．10YR2/2 黒褐色シルト　しまり強い、粘性中程度、暗褐色砂ブロック（直径 5~10mm）を 2% 含む
2．10YR2/2 黒褐色砂混じりシルト　しまり強い、粘性やや弱い、褐色砂ブロック（直径 5~10mm）を 5% 含む
3．10YR3/3 暗褐色細砂　しまり強い、粘性弱い、黒褐色シルトブロック（直径 5~10mm）を 5% 含む
4．10YR3/3 暗褐色シルト　しまり強い、粘性中程度、黒褐色シルトブロック（直径 5mm）を 2% 含む

SB8EP14
1．10YR2/3 黒褐色シルト　しまり強い、粘性中程度、暗褐色砂ブロック（直径 5~20mm）を 5% 含む
2．10YR2/3 黒褐色砂　しまり強い、粘性弱い、黒褐色シルトブロック（直径 10~30mm）を 10% 含む
3．10YR2/2 暗褐色シルト　しまり強い、粘性中程度、暗褐色砂ブロック（直径 10mm）を 2% 含む
4．10YR2/2 暗褐色シルト　しまり強い、粘性やや弱い、暗褐色砂ブロック（直径 5~20mm）を 5% 含む
5．10YR3/3 暗褐色砂　しまり強い、粘性弱い、黒褐色シルトブロック（直径 5~10mm）を 3% 含む
6．10YR4/3 にぶい黄褐色砂　しまり強い、粘性弱い

SB23EP7
1．10YR2/2 黒褐色シルト混じり砂　しまり強い、粘性やや弱い、炭化物（直径 5~10mm）を 3% 含む
2．10YR2/2 黒褐色シルト混じり砂　しまり強い、粘性やや弱い、炭化物（直径 5mm）を 1% 含む、褐色砂ブロック（直径 5~10mm）を 3% 含む

SB23EP24
1．10YR2/2 黒褐色シルト　しまり強い、粘性中程度、炭化物（直径 5mm）を 1% 含む

SB23EP25
1．10YR2/2 黒褐色砂混じりシルト　しまり強い、粘性やや弱い、褐色砂ブロック（直径 5~20mm）を 5% 含む
2．10YR3/2 黒褐色砂質シルト　しまり強い、粘性弱い、褐色砂ブロック（直径 5~10mm）を 5%含む

SB23EP26
1．10YR2/2 黒褐色シルト　しまり強い、粘性中程度

SB23EP27
1．10YR2/2 黒褐色砂混じりシルト　しまり強い、粘性中程度
2．10YR2/3 黒褐色砂混じりシルト　しまり強い、粘性やや弱い

SB23EP28
1．10YR2/2 黒褐色シルト　しまり強い、粘性中程度、炭化物（直径 5mm）を 2%含む、褐色砂ブロック（直径 5mm）を 2%含む
2．10YR3/3 褐色砂　しまり強い、黒褐色シルトブロック（厚さ 2~5cm）が互層となる

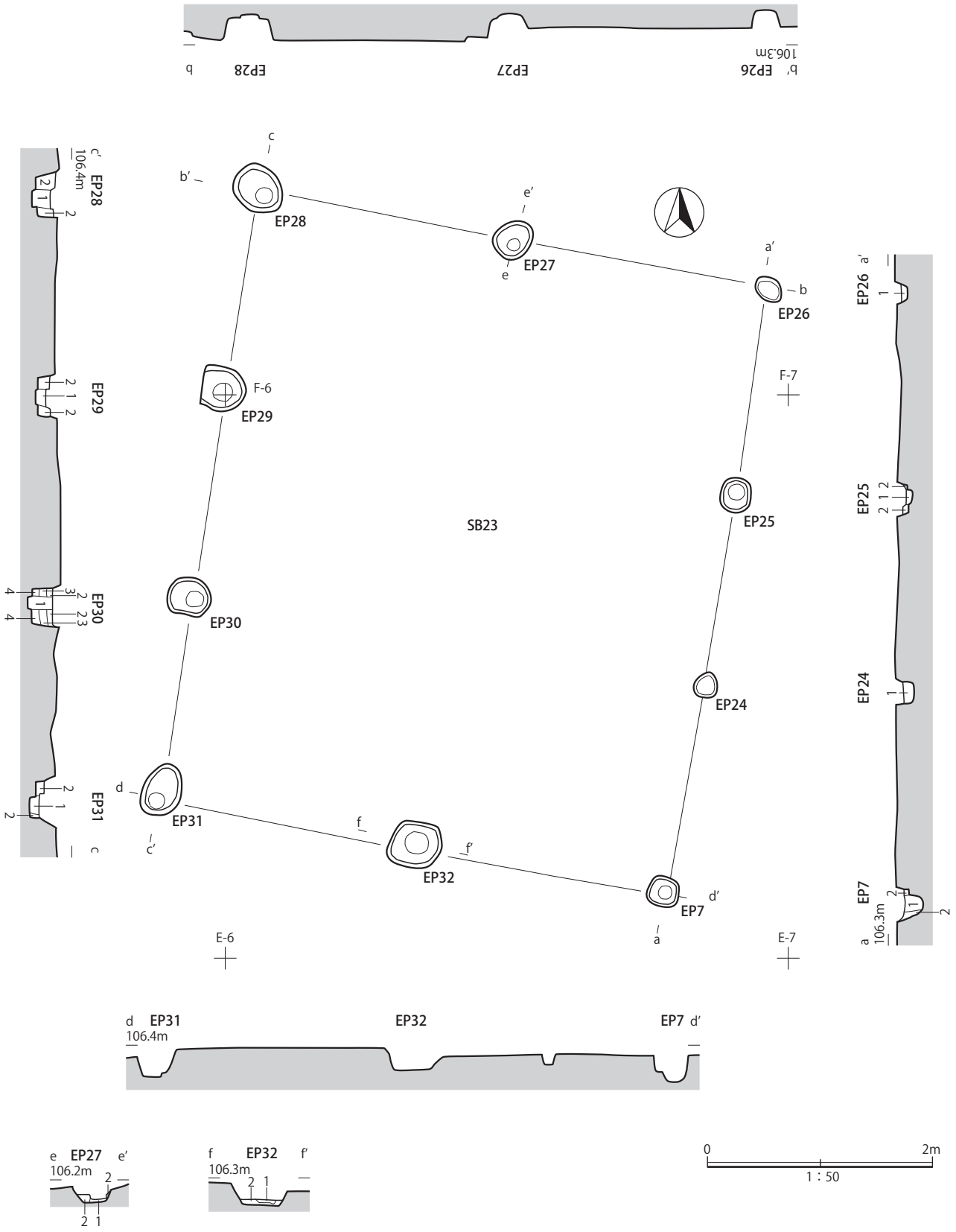
SB23EP29
1．10YR2/2 黒褐色シルト　EP28-1 に内容が同じ
2．10YR2/2 黒褐色砂混じりシルト　しまり強い、粘性やや弱い、暗褐色砂ブロック（直径 5~30mm）を 10% 含む

SB23EP30
1．10YR2/2 黒褐色シルト　しまり強い、粘性中程度、炭化物（直径 5mm）を 1% 含む
2．10YR2/2 黒褐色砂混じりシルト　しまり強い、粘性やや弱い、暗褐色砂ブロック（直径 5~10mm）を 10% 含む
3．10YR2/2 黒褐色砂混じりシルト　しまり強い、粘性やや弱い、褐色砂ブロック（直径 5~10mm）を 1%含む
4．10YR2/2 黒褐色砂混じりシルト　しまり強い、粘性やや弱い、褐色砂ブロック（直径 5~10mm）を 10% 含む

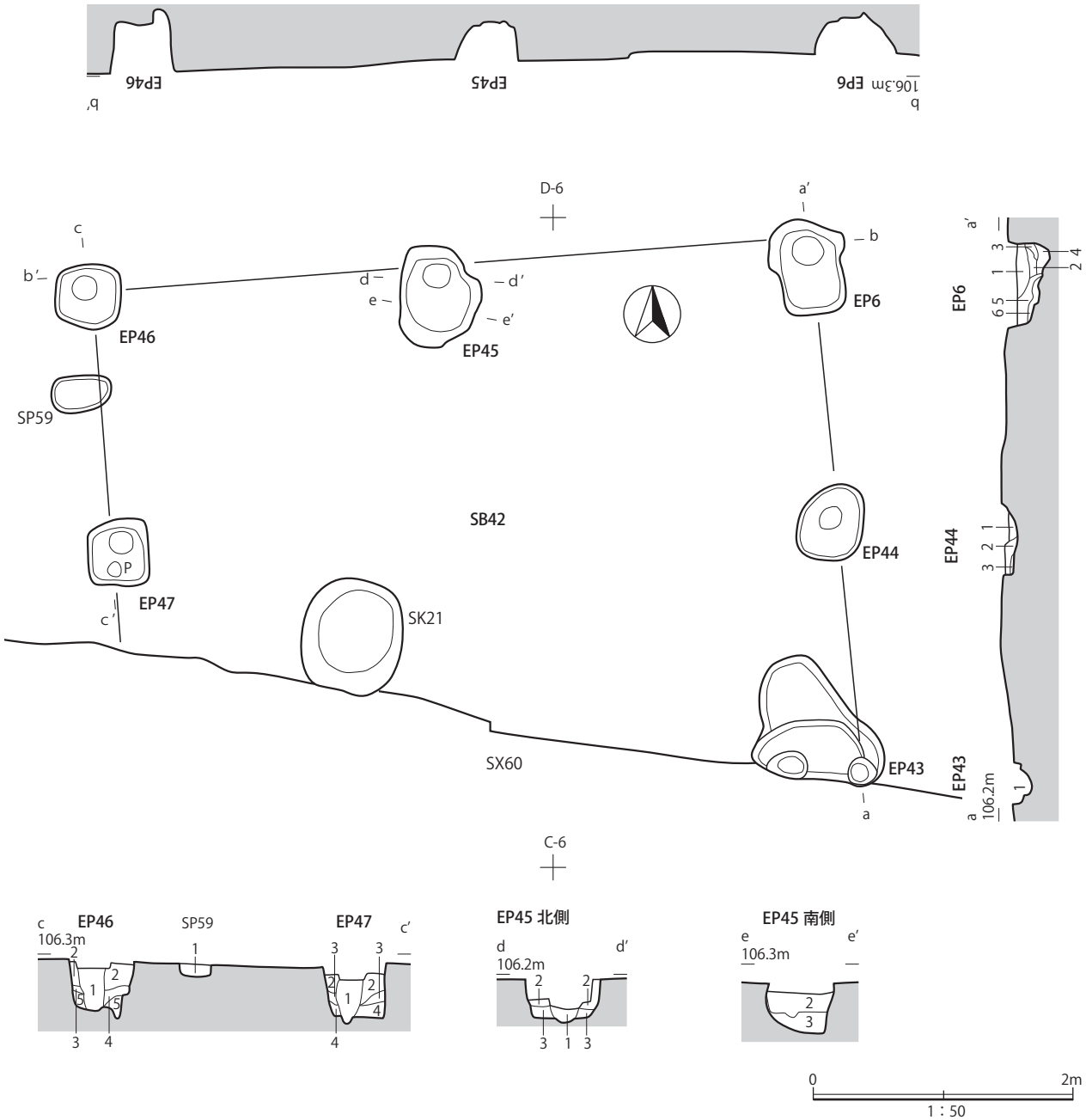
SB23EP31
1．10YR2/2 黒褐色シルト　しまり強い、粘性中程度、炭化物（直径 5~10mm）を 2% 含む
2．10YR2/3 黒褐色砂　しまり強い、粘性弱い、褐色砂ブロック（直径 5~20mm）を 10% 含む

SB23EP32
1．10YR2/2 黒褐色シルト　しまり強い、粘性中程度
2．10YR2/3 黒褐色砂　しまり強い、粘性弱い、褐色砂ブロック（直径 5~20mm）を 10% 含む

第 14 図　SB 8・23 土層注記



第 15 図　SB23 平面図・断面図



SB42EP6

1．10YR2/2 黒褐色シルト　しまり強い、粘性中程度、炭化物（直径 5mm）を 2% 含む、褐色砂ブロック（直径 5~10mm）を 2% 含む
2．10YR2/1 黒色シルト　しまり強い、粘性中程度、褐色砂ブロック（直径 5~10mm）を 2% 含む
3．10YR2/3 黒褐色砂混じりシルト　しまり強い、粘性やや弱い、褐色砂ブロック（直径 5~10mm）を 5%、黒褐色シルトブロック（直径 5~10mm）を 3% 含む
4．10YR2/3 黒褐色砂混じりシルト　しまり強い、粘性やや弱い、褐色砂ブロック（直径 5~20mm）を 7%、黒褐色シルトブロック（直径 5~10mm）を 5% 含む
5．10YR2/2 黒褐色シルト　しまり強い、粘性中程度、褐色砂ブロック（直径 5~10mm）を 3% 含む
6．10YR2/3 黒褐色砂混じりシルト　しまり強い、粘性中程度、褐色砂ブロック（直径 5~10mm）を 5%含む

SB42EP43

1．10YR2/2 黒褐色シルト　しまり強い、粘性中程度、褐色砂ブロック（直径 5~10mm）を 5% 含む

SB42EP44

1．10YR2/2 黒褐色シルト　しまり強い、粘性中程度、褐色砂ブロック（直径 5~10mm）を 5% 含む、炭化物（直径 5mm）を 2% 含む
2．10YR2/3 黒褐色砂混じりシルト　しまり強い、粘性やや弱い、褐色砂ブロック（直径 5~20mm）を 3%、黒色シルトブロック（直径 5~10mm）を 5% 含む
3．10YR2/3 黒褐色砂混じりシルト　しまり強い、粘性やや弱い、褐色砂ブロック（直径 5~20mm）を 10%含む

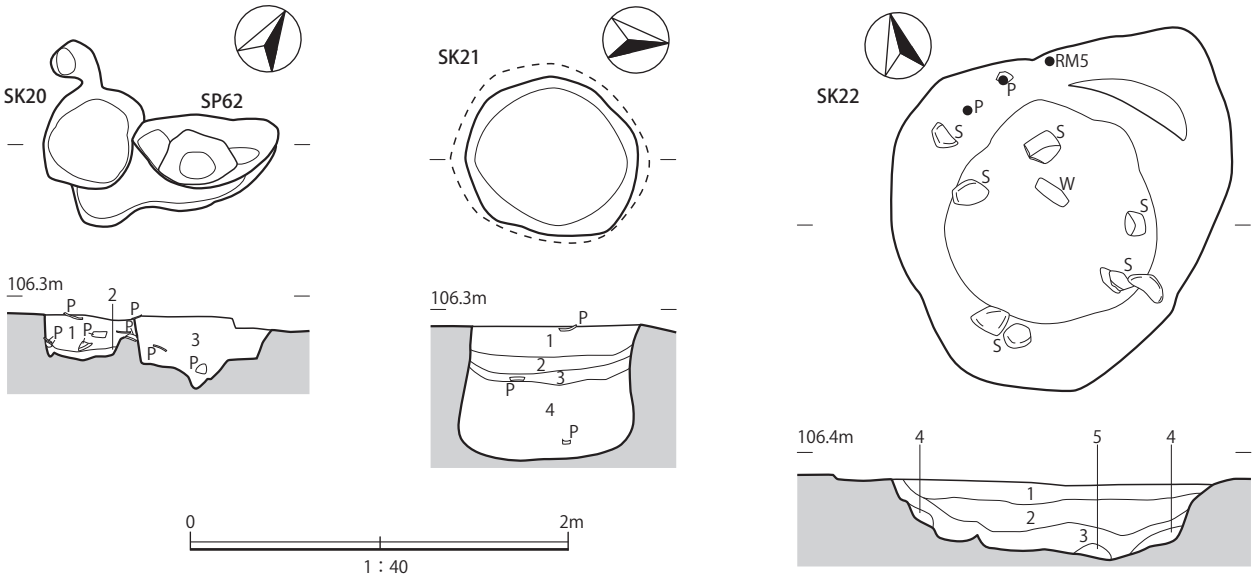
第 16 図　SB42 平面図・断面図

SB42EP45
1．10YR2/1 黒色シルト　しまり・粘性やや強い、褐色砂ブロック（直径 2~5mm）を 2% 含む、炭化物（直径 5~10mm）を 1% 含む
2．10YR2/2 黒褐色砂質シルト　しまり強い、粘性弱い、黒褐色シルトブロックを 3% 含む、褐色砂ブロックを 3% 含む
3．10YR4/6 褐色砂質シルト　しまりやや強い、粘性弱い、黒褐色砂質シルトブロック（直径 5~30mm）を 10%含む

SB42EP46
1．10YR2/1 黒色シルト　しまり強い、粘性中程度、褐色砂ブロック（直径 5~20mm）を 1% 含む、炭化物（直径 5~10mm）を 1% 含む
2．10YR2/1 黒色シルト　しまり強い、粘性中程度、褐色砂ブロック（直径 5~20mm）を 3% 含む
3．10YR3/1 黒褐色シルト　しまり強い、粘性やや強い、褐色砂ブロック（直径 5~20mm）を 5%含む
4．10YR4/3 にぶい黄褐色砂　しまりやや弱い、粘性やや弱い、黒色シルトブロック（直径 10~30mm）を 3% 含む
5．10YR3/3 暗褐色砂質シルト　しまりやや強い、粘性やや弱い、黒色シルトブロック（直径 5~20mm）を 1% 含む

SB42EP47
1．10YR3/1 黒褐色シルト　しまりやや強い、粘性やや強い、褐色砂ブロック（直径 5~20mm）を 1% 含む、炭化物（直径 20mm）を 1% 含む
2．10YR2/1 黒色砂質シルト　しまり強い、粘性中程度、褐色砂ブロック（直径 5~40mm）を 10% 含む
3．10YR2/3 暗褐色砂質シルト　しまり強い、粘性やや弱い、黒褐色シルトブロック（直径 5~10mm）を 2%含む
4．10YR3/3 暗褐色シルト　しまり強い、粘性中程度、黒褐色シルトブロック（直径 10~20mm）を 2% 含む

SP59
1．10YR2/3 黒褐色砂混じりシルト　しまり強い、粘性やや弱い、褐色砂ブロック（直径 10~20mm）を 10% 含む

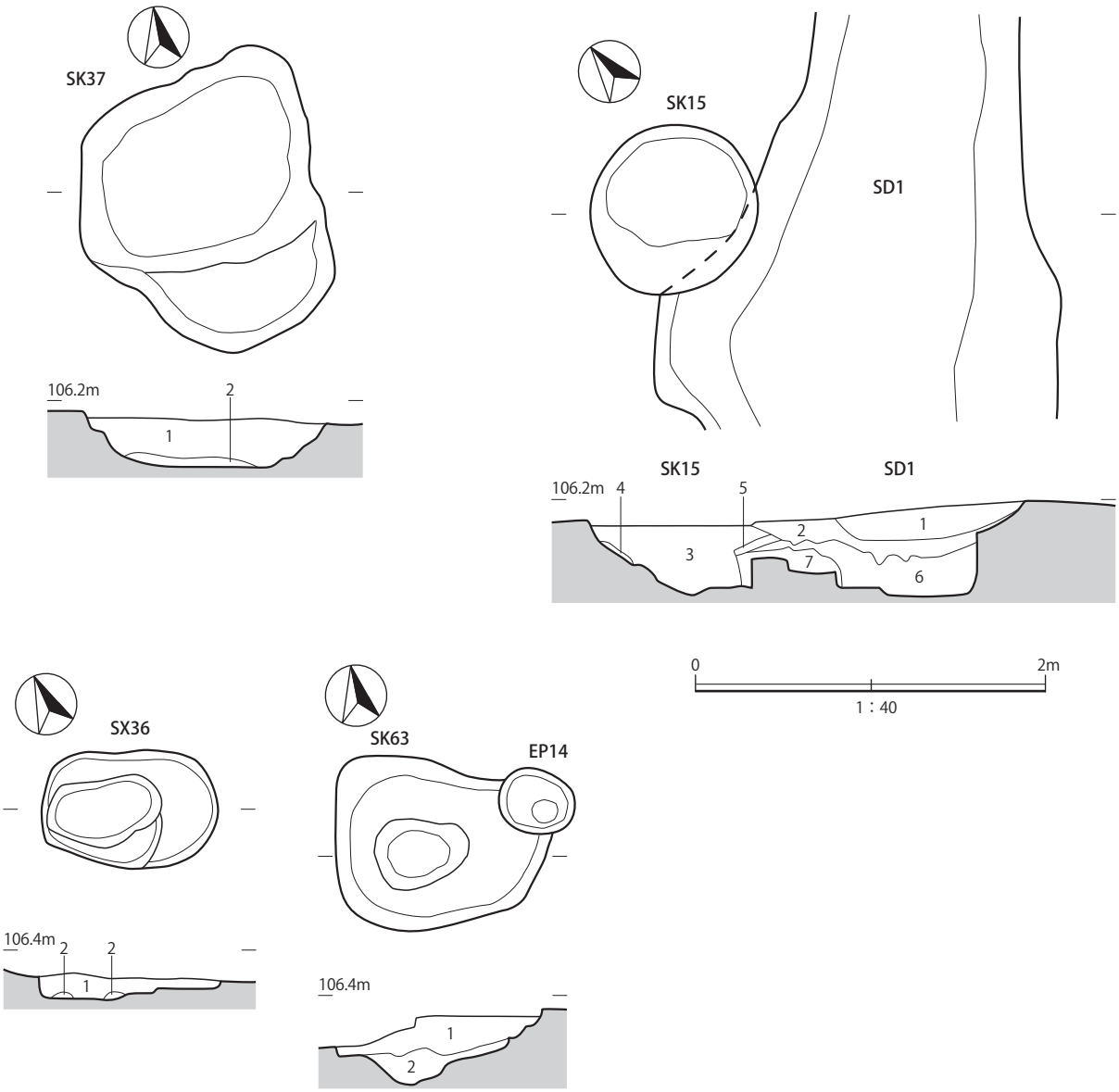


SK20・SP62
1．7.5YR3/2 黒褐色シルト　しまり強い、粘性弱い、焼土ブロック（直径 5~20mm）を 20%、炭化物（直径 5~10mm）を 3%、黒褐色シルトブロック（直径 5~30mm）を 3 %含む、SK20 覆土
2．7.5YR2/3 極暗褐色砂混じりシルト　しまり強い、粘性弱い、焼土ブロック（直径 5mm）を 5%含む、SK20 覆土
3．7.5YR2/2 黒褐色砂混じりシルト　しまり強い、粘性やや弱い、焼土ブロック（直径 5mm）を 3%含む、褐色砂ブロック（直径 5mm）を 3%含む、SP62 覆土

SK21
1．7.5YR2/3 極暗褐色シルト　しまり強い、粘性中程度、焼土ブロック（直径 5~10mm）を 5% 含む、炭化物（直径 5mm）を 2%含む
2．7.5YR2/2 黒褐色シルト　しまり強い、粘性中程度、焼土ブロック（直径 5~10mm）を 3%含む、褐色シルトブロック（直径 5~10mm）を 3% 含む
3．7.5YR2/2 黒褐色シルト　しまり強い、粘性中程度、焼土ブロック（直径 5~10mm）を 2%含む、褐色シルトブロック（直径 5~30mm）を 5%含む
4．10YR2/1 黒色シルト　しまりやや強い、粘性中程度、褐色シルトブロック（直径 5~30mm）を 3%含む

SK22
1．10YR3/2 黒褐色シルト　しまり強い、粘性中程度、炭化物（直径 5mm）を 1%含む、酸化鉄を含む
2．10YR3/1 黒褐色砂質シルト　しまり強い、粘性やや弱い、炭化物（直径 5mm）を 1%含む、間に砂層の薄い層（厚さ 5mm）を何層か含む
3．10YR3/1 黒褐色シルト混じり砂　しまり強い、粘性弱い、にぶい黄褐色砂ブロック（直径 10~50mm）を 3%含む
4．10YR3/1 黒褐色シルト　しまり・粘性中程度
5．10YR4/3 にぶい黄褐色砂　しまり中程度、粘性弱い、黒褐色砂ブロック（直径 10~50mm）を 10%含む

第 17 図　SK20 ～ 22・SP62



SK15・SD1

1．10YR5/2 灰黄褐色砂混じりシルト　しまり強い、粘性弱い、炭化物（直径 10~20mm）を 1% 含む、褐色砂ブロック（直径 5~20mm）を 7% 含む、SD1 覆土
2．10YR4/2 灰黄褐色砂　しまり強い、粘性弱い、白色砂ブロック（直径 2~10mm）を 7% 含む、褐色砂ブロック（直径 20mm 以上）を 3% 含む、SD1 覆土
3．10YR2/2 黒褐色シルト　しまり中程度、粘性やや弱い、SK15 覆土
4．10YR4/3 にぶい黄褐色砂　しまり中程度、粘性弱い、黒褐色シルトブロック（直径 20mm 以上）を 7% 含む、SK15 覆土
5．10YR2/2 黒褐色シルト　しまり・粘性中程度、SK15 覆土
6．10YR2/2 黒褐色砂　しまりやや強い、粘性弱い、褐色砂ブロック（直径 5~20mm）を 10% 含む、地山
7．10YR3/3 暗褐色シルト　しまり・粘性中程度、黒褐色シルトブロック（直径 20mm 以上）を 3% 含む、褐色砂ブロック（直径 20mm）を 2% 含む、地山

SK37

1．10YR2/2 黒褐色砂混じりシルト　しまり強い、粘性中程度、褐色砂ブロック（直径 10~30mm）を 3% 含む
2．10YR3/3 暗褐色砂　しまり強い、黒褐色シルトブロック（直径 10~30mm）を 10% 含む、黄褐色シルトブロック（直径 10~50mm）を 10% 含む

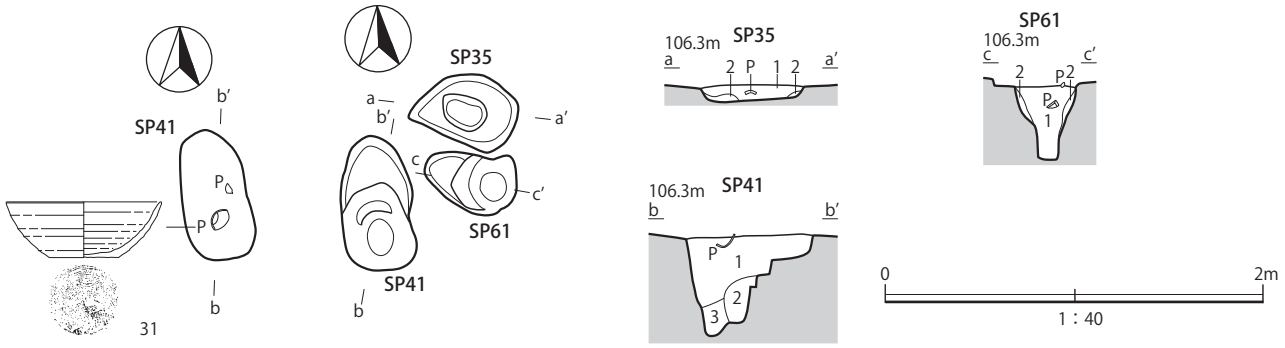
SK63

1．10YR2/2 黒褐色シルト　しまり強い、粘性中程度、焼土ブロック（直径 10~30mm）を 25% 含む、炭化物（直径 10mm）を 2% 含む
2．10YR2/2 黒褐色シルト　しまりやや強い、粘性中程度、炭化物（直径 5mm）を微量含む

SX36

1．10YR2/2 黒褐色砂混じりシルト　しまり強い、粘性やや弱い、暗褐色砂ブロック（直径 10~50mm）を 10% 含む、撹乱の影響を受けている
2．10YR3/3 暗褐色砂　しまり強い、粘性弱い、黒褐色シルトブロック（直径 5~10mm）を 3% 含む

第 18 図　SK15・37・63・SX36・SD1



SP35
1．7.5YR2/2 黒褐色砂混じりシルト　しまり強い、粘性中程度、焼土ブロック（直径 5~20mm）を 10% 含む、炭化物（直径 5mm）を 2%含む
2．10YR2/3 黒褐色砂混じりシルト　しまり強い、粘性やや弱い、炭化物（直径 5mm）を 1%含む

SP41
1．10YR2/2 黒褐色シルト　しまり中程度、粘性やや強い、暗褐色砂ブロック（直径 10~20mm）を 3% 含む
2．10YR3/2 黒褐色シルト　しまり中程度、粘性やや強い、褐色砂ブロック（直径 2~5mm）を 5% 含む、黒色シルトブロック（直径 20mm 以上）を 5% 含む
3．10YR3/1 黒褐色シルト　しまり中程度、粘性やや強い

SP61
1．10YR2/2 黒褐色砂質シルト　しまりやや強い、粘性弱い、褐色砂ブロック（直径 5~20mm）を 1% 含む、炭化物（直径 2~5mm）を 1% 含む
2．10YR4/3 にぶい黄褐色砂　しまり強い、粘性弱い、褐色砂ブロック（直径 20mm 以上）を 7% 含む、黒色シルトブロック（直径 20mm 以上）を 10% 含む

SP49
1．10YR3/3 暗褐色砂　しまり強い、粘性弱い、褐色砂ブロック（直径 20mm 以上）を 1% 含む
2．10YR3/2 黒褐色砂質シルト　しまりやや強い、粘性弱い、褐色砂ブロック（直径 20mm）を 7% 含む

SP50
1．10YR4/3 にぶい黄褐色砂　しまり強い、粘性弱い

SP51
1．10YR3/2 黒褐色砂　しまり強い、粘性弱い、褐色砂ブロック（直径 5~10mm）を 1% 含む

SP53
1．10YR2/2 黒褐色砂混じりシルト　しまり強い、粘性やや弱い、炭化物微量含む、褐色砂ブロック（直径 5~30mm）を 5%含む
2．10YR3/3 暗褐色砂　しまり強い、黒褐色シルトブロック（直径 5~10mm）を 5% 含む

SP54
1．10YR2/2 黒褐色砂混じりシルト　SP53-1 に内容が同じ
2．10YR3/3 暗褐色砂　SP53-2 に内容が同じ

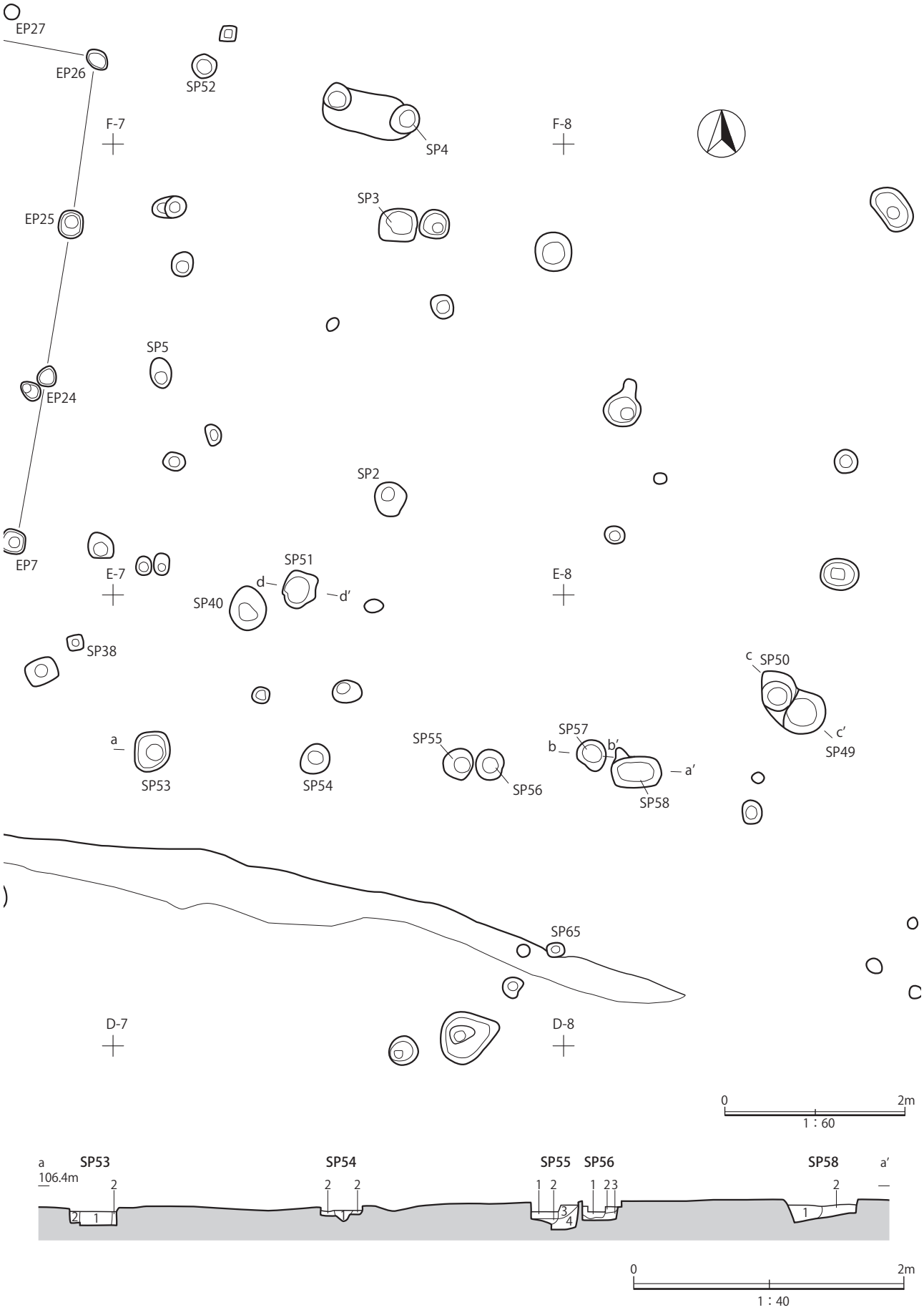
SP55
1．10YR2/2 黒褐色シルト　しまり強い、粘性中程度、炭化物（直径 5mm）を微量含む、2.5YR4/4 にぶい赤褐色シルトブロック（直径 5~10mm）を 2% 含む
2．10YR2/3 にぶい赤褐色シルト　しまり強い、粘性中程度
3．10YR2/2 黒褐色シルト　しまり強い、粘性やや弱い、褐色砂ブロック（直径 5~20mm）を 7% 含む、にぶい赤褐色シルトブロック（直径 5mm）を 3% 含む
4．10YR2/2 黒褐色シルト　しまり強い、粘性中程度、褐色砂ブロック（直径 5mm）を 2% 含む

SP56
1．10YR3/4 暗褐色砂　しまり強い、粘性弱い、黒褐色シルトブロック（直径 5~10mm）を 20% 含む
2．10YR3/4 暗褐色砂　しまり強い、粘性弱い、黒褐色シルトブロック（直径 10~20mm）を 10% 含む
3．10YR4/3 にぶい黄褐色砂　しまり強い、粘性弱い、黒褐色シルトブロック（直径 10~20mm）を 5% 含む

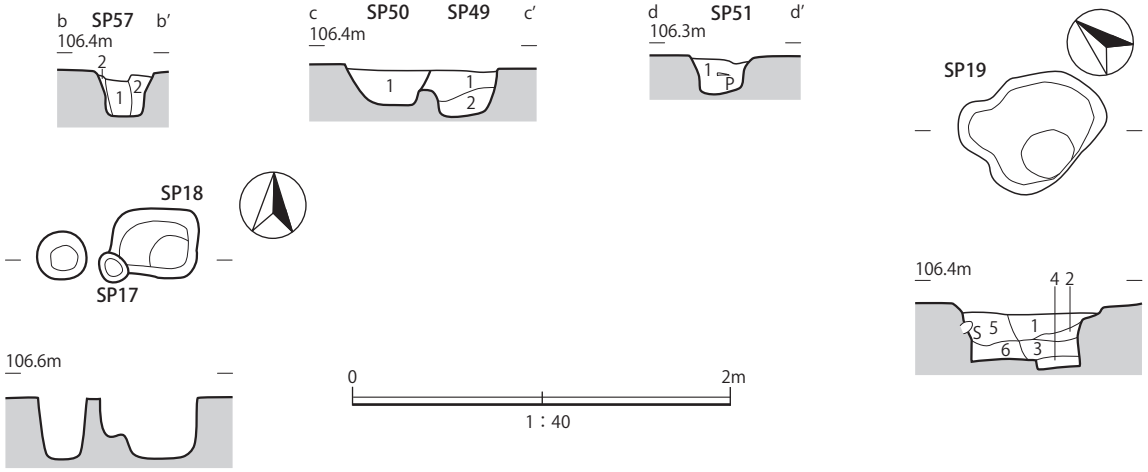
SP57
1．10YR3/2 黒褐色砂質シルト　しまりやや強い、粘性弱い、炭化物（直径 5~10mm）を 1% 含む
2．10YR4/3 にぶい黄褐色砂　しまり強い、褐色シルトブロック（直径 10~20mm）を 5% 含む、黒褐色砂ブロック（直径 20mm）を 5% 含む

SP58
1．10YR2/2 黒褐色シルト　しまり強い、粘性やや弱い、褐色砂ブロック（直径 5~10mm）を 5% 含む、にぶい赤褐色シルトブロック（直径 5~10mm）を 3% 含む
2．10YR2/2 黒褐色シルト　しまり強い、粘性やや弱い、褐色砂ブロック（直径 10~30mm）を 7% 含む、にぶい赤褐色シルトブロック（直径 5~10 mm）を 2% 含む

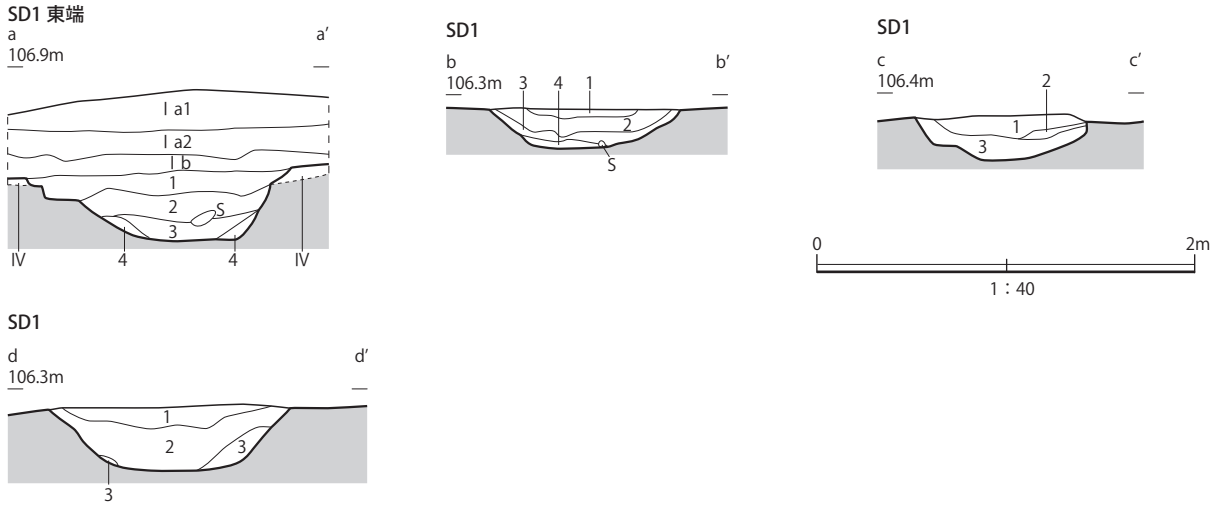
第 19 図　SP35・41・61



第 20 図　1 区南側柱穴群



SP19
1．10YR2/2 黒褐色シルト　しまり強い、粘性中程度、暗褐色砂ブロック（直径 5~10mm）を 3%含む
2．10YR2/3 黒褐色砂　しまり強い、粘性やや弱い
3．10YR2/2 黒褐色シルト　しまり強い、粘性中程度、暗褐色シルトブロック（直径 5~10mm）を 2%含む
4．10YR3/3 暗褐色砂　しまり強い、粘性弱い
5．10YR2/3 黒褐色シルト　しまり強い、粘性中程度、暗褐色砂ブロック（直径 5~10mm）を 2%含む
6．10YR2/2 黒褐色シルト　しまり強い、粘性中程度、暗褐色砂ブロック（直径 5mm）を 1% 含む



SD1（a-a′）
Ⅰa1．10YR3/3 暗褐色砂　しまり・粘性弱い、盛土
Ⅰa2．10YR5/3 にぶい黄褐色砂　しまり強い、粘性弱い、盛土
Ⅰb．10YR3/2 黒褐色砂混じりシルト　現代撹乱の影響を受ける
1．10YR3/3 黒褐色砂混じりシルト　しまり強い、粘性やや弱い、礫（直径 10~30mm）を少量含む、撹乱の影響あり
2．10YR3/2 黒褐色砂混じりシルト　しまり強い、粘性中程度、黒色シルトブロック（直径 10~30mm）を 3% 含む
3．10YR3/2 黒褐色シルト混じり砂　しまり強い、粘性弱い、礫（直径 10~40mm）を 10% 含む
4．10YR4/4 褐色砂　しまり強い、黒褐色砂ブロックを少量含む
Ⅳ．10YR4/2 灰黄褐色砂　地山

SD1（b-b′）
1．10YR1.7/1 炭化物層　10YR2/2 黒褐色シルトを 10%含む、酸化鉄粒（直径 5mm）を 2% 含む
2．10YR4/3 にぶい黄褐色砂混じりシルト　しまり強い、粘性弱い、炭化物（直径 5~10mm）を 1% 含む
3．10YR4/2 灰黄褐色砂　しまり強い、粘性弱い、褐色砂ブロック（直径 5~10mm）、黒褐色シルトブロック（直径 2~5mm）を 1% 含む
4．10YR7/4 にぶい黄橙色砂　しまり・粘性弱い、層の下面に酸化鉄が溜まる

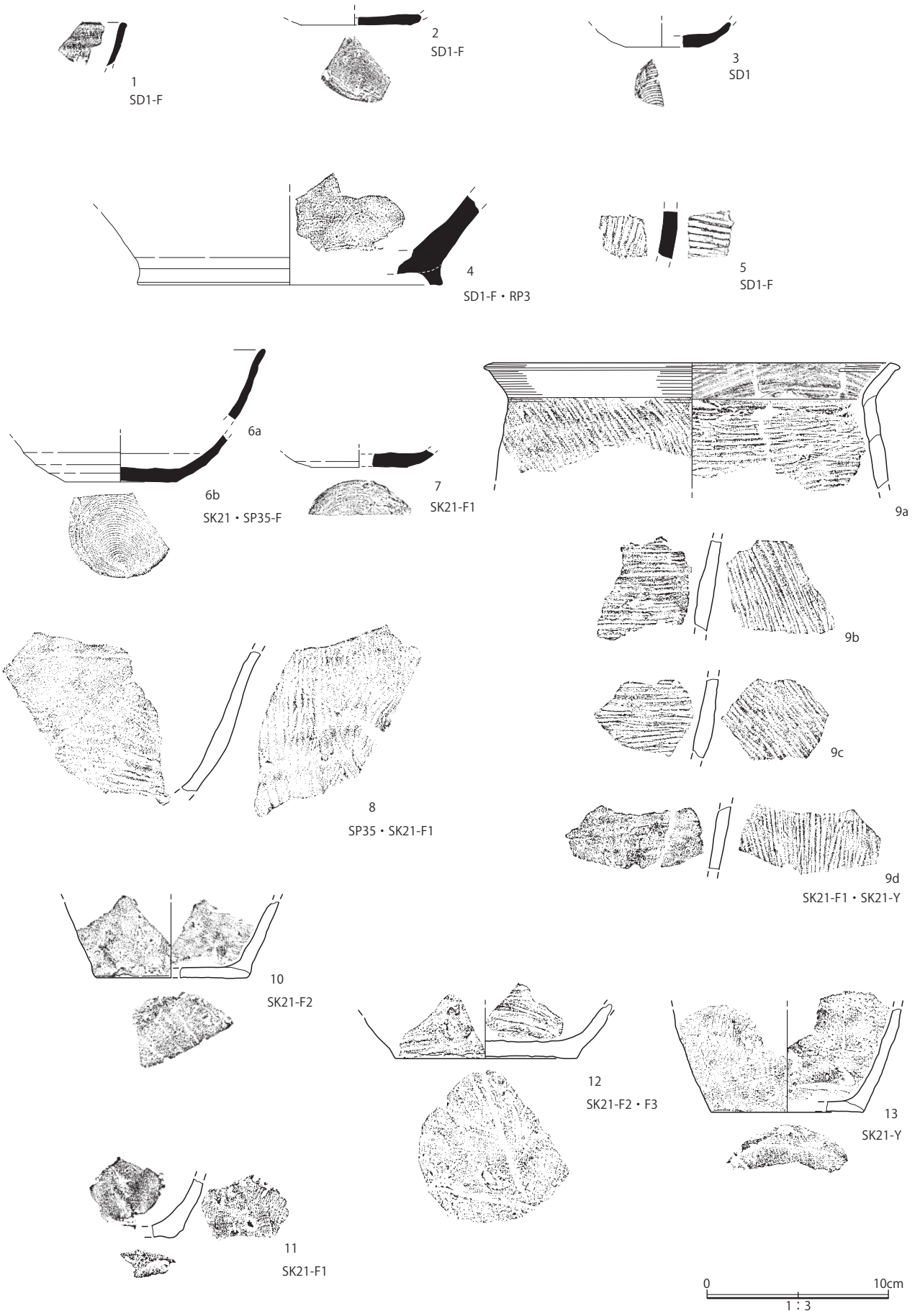
SD1（c-c′）
1．10YR2/2 黒褐色砂混じりシルト　しまり強い、粘性やや弱い、炭化物（直径 5~10mm）を 2%含む
2．10YR2/2 黒褐色砂　しまり強い、粘性弱い、礫（直径 10~30mm）を 5% 含む
3．10YR3/3 暗褐色砂　しまり強い、粘性弱い、酸化鉄を多く含む

SD1（d-d′）
1．10YR2/2 黒褐色砂混じりシルト　しまり強い、粘性中程度、礫（直径 10~50mm）を 5%含む
2．10YR2/2 黒褐色シルト　しまり強い、粘性弱い、炭化物（直径 5mm）を微量、酸化鉄を微量含む
3．10YR3/3 暗褐色砂　しまり強い、粘性弱い、酸化鉄を多く含む、礫（直径 10~40mm）を 7% 含む

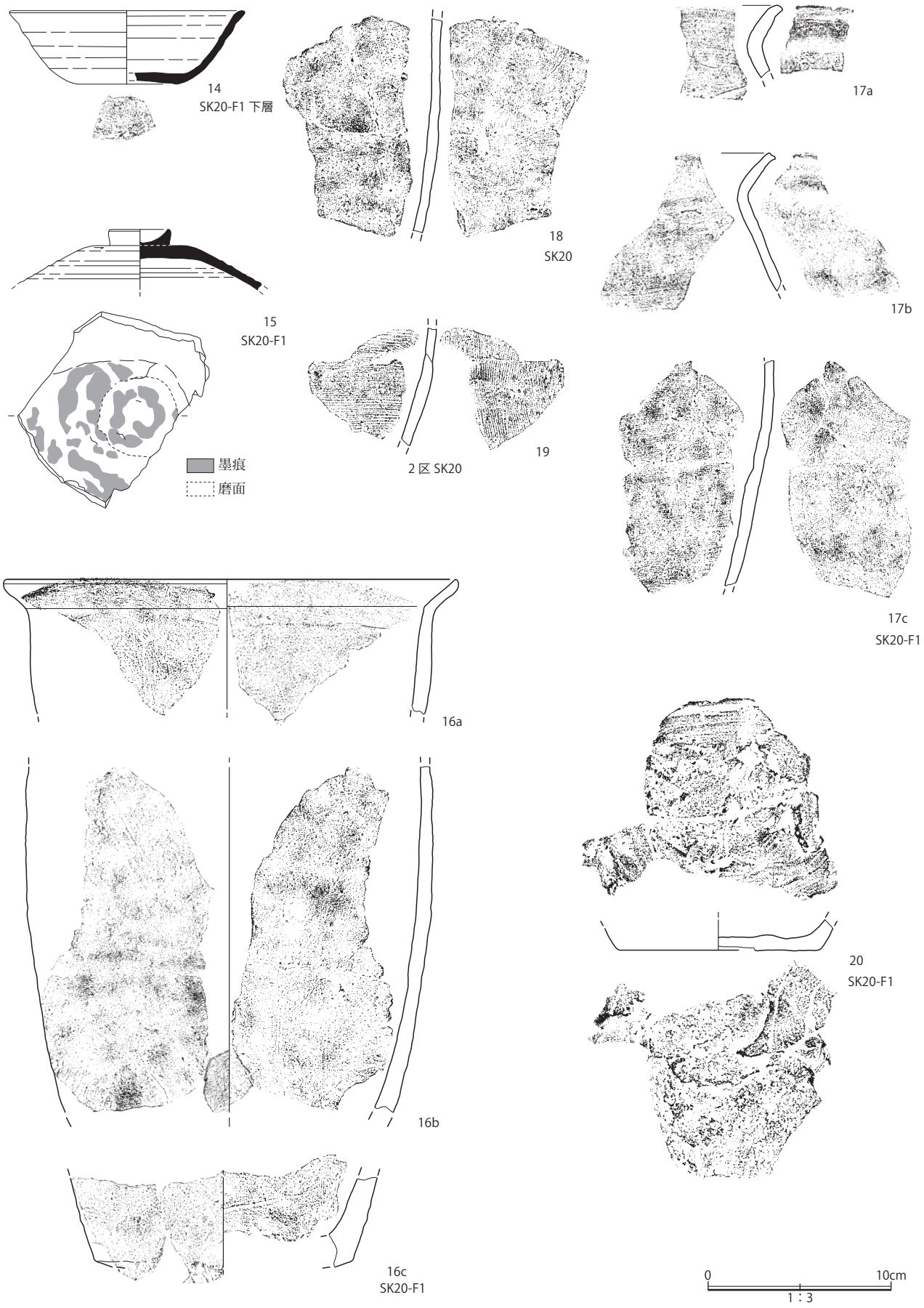
第 21 図　SP17 ～ 19・49 ～ 51・57・SD1

a
a′
11
SD1
10
9
b
b′
8
7
c
c′
6
SD1
5
4
3
風倒木
撹乱
SK22
撹乱
SP49
SP50
SP58
SP65
SP57
SP56
SP55
SP4
SP2
SP54
SP3
SP40
SP53
SP52
SP5
SP38
EP24
EP26
EP25
EP7
EP44
EP6
EP43
EP27
SB23
EP32
SP62
SB42
SK21
SP66
SK20
EP28
EP29
EP30
EP31
SK37
SP61
EP45
SP35
SP48
SP41
EP47
SP64
SP59
トレンチ
SX36
EP46
SD16
SP33
SP34
SP18
SP17
SP19
EP12
EP11
EP13
SP67
SB8
EP14
SX68
EP10
SK63
EP9
トレンチ
d′
SD1
d
4
E
D
F
G
H
RP3
0
10m
1：200

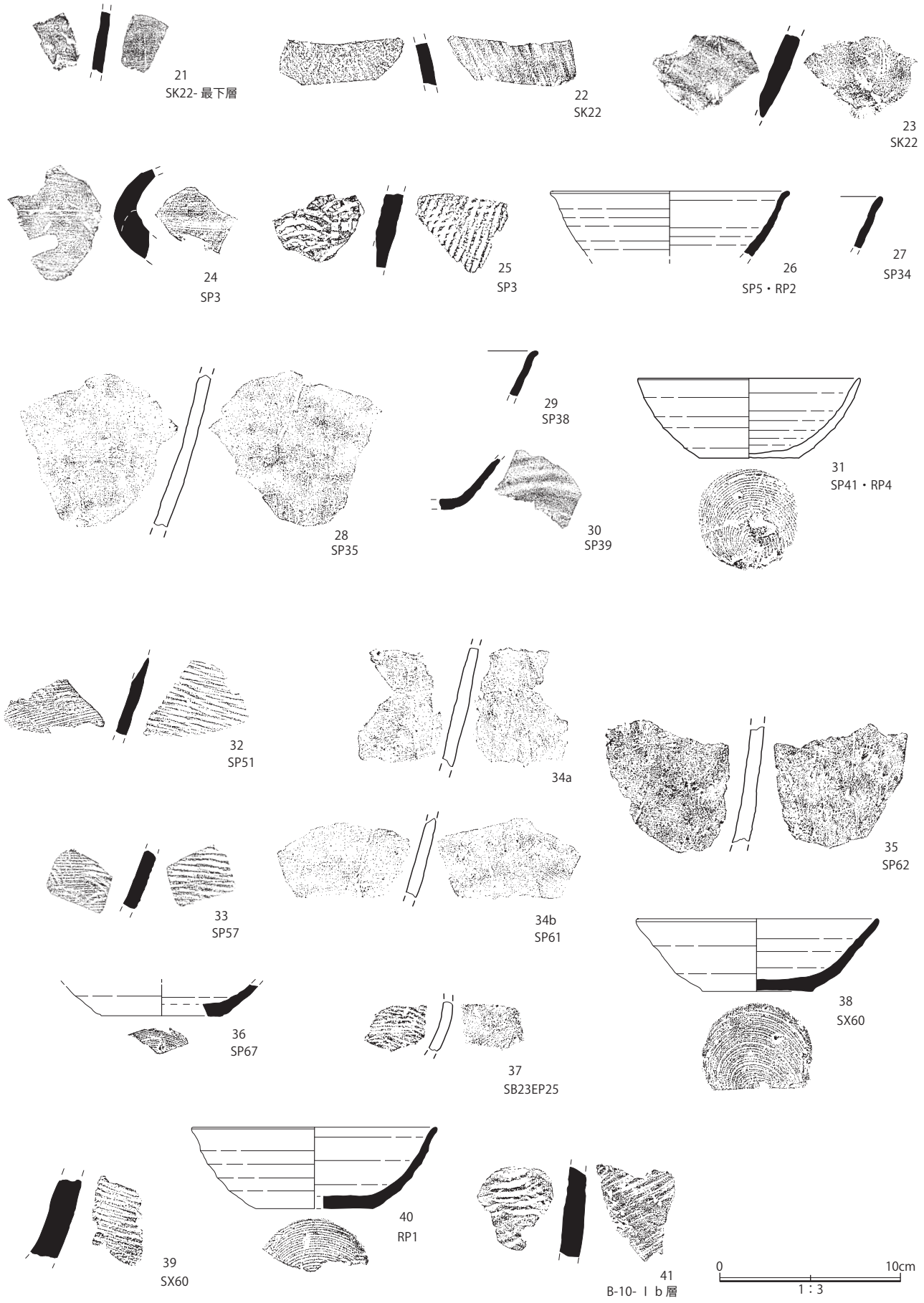
第 22 図　SD1 平面図



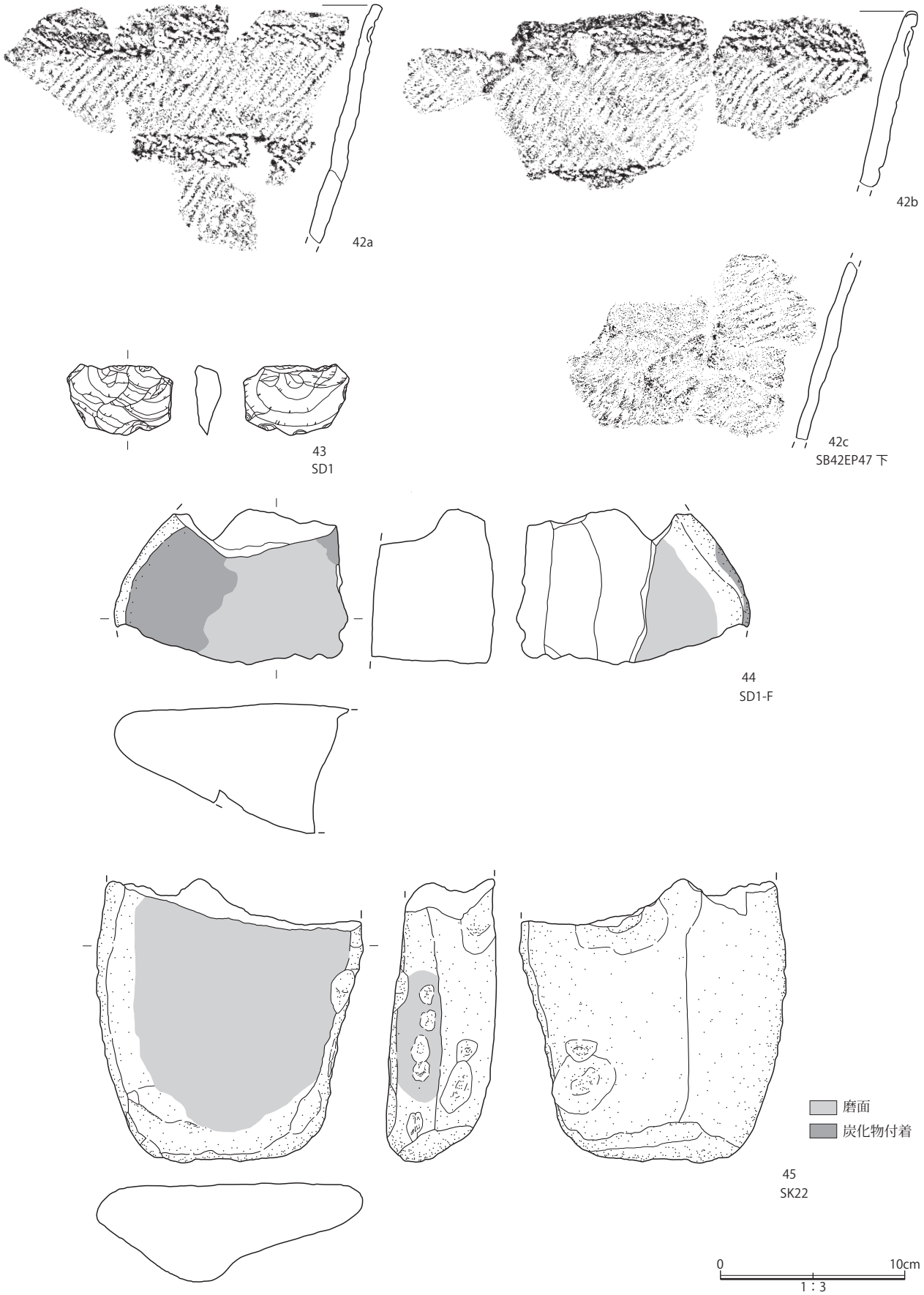
第 23 図　須恵器・土師器（1）



第 24 図　須恵器・土師器（2）



第 25 図　須恵器・土師器（3）



第 26 図　縄文土器・石器

表３　土器観察表

図版番号	遺物番号	写真図版	種別	器種・部位	地区	出土地点・層位	時期	計測値（mm）	調整・成形 外面 / 内面 / 底部	胎土・焼成・備考
23	1	23	須恵器	坏・口縁	2	SD1-F	平安		ロクロ / ロクロ	
23	2	23	須恵器	坏・底部	2	SD1-F	平安	底 (60)	ロクロ / ロクロ / 回転糸切	
23	3	23	須恵器	坏・底部	1	SD1	平安	底 (41)	ロクロ / ロクロ / 回転糸切	
23	4	24	須恵器	壺・底部	2	SD1-F1 RP3	平安	底 (168)	ロクロ / ロクロ・ナデ	付け高台
23	5	24	須恵器	甕・体部	2	SD1-F	平安		タタキ / アテ	砂粒混
23	6	23	須恵器	坏・体部～底部	2	SK21 SP35-F	平安	底 60	ロクロ / ロクロ / 回転糸切	
23	7	23	須恵器	坏・底部	2	SK21-F1	平安	底 (53)	ロクロ / ロクロ / 回転糸切	
23	8	27	土師器	堝・体部	2	SK21-F1 SP35	平安		ハケメ / ハケメ・ナデ	内面に炭化物付着
23	9	27	土師器	甕・口縁～体部	2	SK21-F1 SK21-Y	平安	口 (218)	ハケメ→ナデ / ハケメ	砂粒混
23	10	25 27	土師器	甕・底部	2	SK21-F2	平安	底 (81)	ケズリ / ハケメ / 木葉痕	
23	11	27	土師器	甕・底部	2	SK21-F1	平安		ハケメ / ナデ / ケズリ	
23	12	27	土師器	甕・底部	2	SK21-F2・F3	平安	底 (100)	ケズリ・ナデ / ケズリ・ナデ / 木葉痕	粗砂混
23	13	27	土師器	甕・体部～底部	2	SK21-Y	平安	底 (84)	ハケメ / ナデ / 木葉痕	
24	14	23	須恵器	坏・口縁～底部	2	SK20-F1 下層	平安	口 (128) 底 (54) 高 40	ロクロ / ロクロ / 回転糸切	
24	15	23	須恵器	蓋・ツマミ～体部	2	SK20-F1	平安	ツマミ 34 天井部 55	ロクロ / ロクロ / 回転糸切・回転ヘラケズリ	転用硯・内面に墨痕
24	16	25	土師器	甕・口縁～体部	2	SK20-F1	平安	口 (249)	ハケメ / ナデ	外面・内面に炭化物付着
24	17	26	土師器	甕・口縁～体部	2	SK20-F1	平安		ナデ・ハケメ / ハケメ	
24	18	26	土師器	甕・体部	2	SK20	平安		ハケメ / ハケメ	17 と同一個体の可能性
24	19	26	土師器	甕・体部	2	SK20	平安		ハケメ / カキメ	
24	20	26	土師器	甕・底部	2	SK20-F1	平安	底 (110)	ナデ / ケズリ・ナデ / 木葉痕	
25	21	24	須恵器	壺？・体部？	1	SK22-F5	平安		カキメ・ナデ	
25	22	24	須恵器	甕・体部	1	SK22	平安		タタキ・アテ	胎土緻密
25	23	24	須恵器	鉢・体部	1	SK22	平安		ロクロ / ロクロ	
25	24	24	須恵器	甕・口縁	1	SP3	平安		タタキ / ナデ	
25	25	24	須恵器	甕・体部	1	SP3	平安		タタキ / アテ	
25	26	23	須恵器	坏・口縁～体部	1	SP5 RP2	平安	口 (126)	ロクロ / ロクロ	粗砂混
25	27	23	須恵器	坏・口縁	2	SP34	平安		ロクロ / ロクロ	
25	28	26	土師器	甕・体部	2	SP35	平安		ハケメ / ハケメ	
25	29	23	須恵器	坏・口縁	1	SP38	平安		ロクロ / ロクロ	
25	30	23	須恵器	坏・体部～底部	1	SP39	平安		ロクロ / ロクロ	
25	31	25	土師器	坏・口縁～底部	2	SP41-F1 RP4	平安	口 122 底 55 高 44	ロクロ / ロクロ / 回転糸切	砂粒混
25	32	24	須恵器	甕・体部	1	SP51	平安		タタキ / アテ→カキメ	
25	33	24	須恵器	甕・体部	1	SP57	平安		タタキ / アテ→カキメ	32 と同一個体の可能性
25	34	26	土師器	甕・体部	2	SP61	平安		ハケメ / ハケメ	粗砂混
25	35	25	土師器	甕・体部	2	SP62	平安		ナデ / ナデ	16 と同一個体の可能性
25	36	23	須恵器	坏・体部～底部	1	SP67	平安	底 (66)	ロクロ / ロクロ / 回転糸切	

図版番号	遺物番号	写真図版	種別	器種・部位	地区	出土地点・層位	時期	計測値（mm）	調整・成形 外面 / 内面 / 底部	胎土・焼成・備考
25	37	26	土師器	甕・体部	1	SB23EP25	平安		/ ハケメ	外面摩滅
25	38	23	須恵器	坏・口縁～底部	2	SX60	平安	口 (134) 底 60 高 40	ロクロ / ロクロ / 回転糸切	
25	39	24	須恵器	甕・体部	2	SX60	平安		タタキ / ナデ	
25	40	23	須恵器	坏・口縁～底部	1	D-6 Ⅱ RP1	平安	口 (132) 底 (64) 高 45	ロクロ / ロクロ / 回転糸切	
25	41	24	須恵器	甕・体部	1	B-10 南壁東カド Ⅰb	平安		タタキ / アテ	
26	42	28	縄文土器	深鉢・口縁～体部		SB42EP47YF	縄文		指圧痕・縄文・押圧縄文 LR0 段多条 / ケズリ・荒いナデ	繊維入る
	47	29	磁器	湯呑碗	1	SX60	現代			染付・文様は外面のみ
	48	29	陶器	土管	1	SX60	現代			外面・内面に釉薬
30	49	29	土師器	坏			平安	口 (144) 底 49 高 52	ロクロ / ロクロ / 回転糸切	鮭川村石名坂出土

表４　石器・石製品観察表

図版番号	遺物番号	写真図版	器種	地区	出土地点・層位	時期	計測値 (mm) 長さ	幅	厚さ	重量 (g)	石材	備考 (加工・付着物等)
26	43	29	剥片	2	SD1	縄文	37.5	56.5	15.5	24.3	頁岩	
26	44	28	石皿？	1	SD1-F	縄文	[83]	[127]	65	853.5	安山岩？	両面に磨面・炭化物付着 破損
26	45	28	石皿？	1	SK22	縄文	[152]	[143.5]	51	1665.6		磨面あり・破損

表５　金属製品観察表

図版番号	遺物番号	写真図版	器種	地区	出土地点・層位	時期	計測値 (mm) 長さ	幅	厚さ	重量 (g)	状態・残存状況	備考 (加工・付着物等)
	46	29	銭貨	1	SK22	平安？	[23]	[20]	1.5	5.1	腐食が進んでいる 外縁が欠けている	RM5・銅銭か・２枚が付着している

※計測値の口は口径、底は底径、高は器高を表す。また、（　）内の値は、復元による推定値、[　] 内の値は残存値を示す。

表６　出土遺物重量表

区	遺構番号・層・グリッド	重量（g） 土師器	計	須恵器	計	縄文土器	石器	計	陶磁器	計	金属	総計	
1	SD-1	―		5.91		―	―		―	―	―	5.91	
1	SD1-F	5.40		5.31		―	1981.35		―	―	―	1992.06	
1	SD1-F1	2.98		2.38		―	904.43		―	―	―	909.79	
2	SD1	9.32		1.87		―	24.33		―	―	―	35.52	
2	SD1-F	1.36		28.91		―	―		―	―	―	30.27	
2	SD1-F1	―	19.06	69.74	114.12	―	―	2910.11	―	―	―	69.74	3043.29
1	SK22	30.67		18.77	―	―	1668.95		―	―	―	1718.39	
1	SK22-F1	1.99		―	―	―	96.27		―	―	―	98.26	
1	SK22-F2	3.93		―	―	―	―		―	―	―	3.93	
1	SK22-F5	1.00		6.03	―	―	―		―	―	―	7.03	
1	SK22- 下層 RM5	―	37.59	―	24.80	―	―	1765.22	―	―	2.00	2.00	1829.61
1	SP2	3.19	―	―	―	―	―	―	―	―	―	3.19	―
1	SP3	2.11	―	64.66	―	―	―	―	―	―	―	66.77	―
1	SP4	6.42	―	―	―	―	―	―	―	―	―	6.42	―
1	SP5	―	―	13.51	―	―	―	―	―	―	―	13.51	―

区	遺構番号・層・グリッド	重量（g）											
		土師器	計	須恵器	計	縄文土器	石器	計	陶磁器	計	金属	総計	
1	SP6-F	17.93	―	―	―	―	―	―	―	―	―	17.93	―
1	SP38	―	―	4.06	―	―	―	―	―	―	―	4.06	―
1	SP39	―	―	8.60	―	―	―	―	―	―	―	8.60	―
1	SP40	―	―	―	―	―	1.07	―	―	―	―	1.07	―
1	SP49	4.57	―	―	―	―	1.37	―	―	―	―	5.94	―
1	SP51	―	―	15.44	―	―	―	―	―	―	―	15.44	―
1	SP52	―	―	1.20	―	―	―	―	―	―	―	1.20	―
1	SP53	3.18	―	―	―	―	―	―	―	―	―	3.18	―
1	SP57	―	―	11.48	―	―	―	―	―	―	―	11.48	―
1	SP58	5.03	―	―	―	―	―	―	―	―	―	5.03	―
1	SP65	2.81	―	―	―	―	―	―	―	―	―	2.81	―
1	SP67	―	―	8.68	―	―	―	―	―	―	―	8.68	―
1	SX68	―	―	―	―	―	―	―	14.22	―	―	14.22	―
1	SB8EP7	1.12	―		―	―	―	―	―	―	―	1.12	―
1	SB23EP25	7.63	―		―	―	―	―	―	―	―	7.63	―
1	SB23EP29	2.56	―		―	―	―	―	―	―	―	2.56	―
1	SB23EP30	24.92	―		―	―	―	―	―	―	―	24.92	―
1	SX60 南東隅	56.00				―	―	―	60.51		―	116.51	
2	SX60	85.14	141.14	127.51	127.51	―	―	―	9.12	69.63	193.57	415.34	531.85
1	B-10 南壁東カドⅠb	―	―	29.17	―	―	―	―	―	―	―	29.17	―
1	RP1 付近	―	―	―	―	―	57.29	―	―	―	―	57.29	―
1	Ⅱ層 RP1	―	―	73.85	―	―	―	―	―	―	―	73.85	―
1	X-O 北西隅	―	―	―	―	―	―	―	18.89	―	―	18.89	―
1	X-O	―	―	―	―	―	2.59	―	2.59	―	―	2.59	―
2	SK20	809.11		22.87		―	76.78		―	―	―	908.76	
2	SK20-F1	310.20		100.45		―	―		―	―	―	410.65	
2	SK20-F1 下層	14.50	1133.81	17.17	140.49	―	―	76.78	―	―	―	31.67	1351.08
2	SK21	19.49		51.27		―	―		―	―	―	70.76	
2	SK21-F	19.94				―	―		―	―	―	19.94	
2	SK21-F1	209.85		20.26		―	167.07		―	―	―	397.18	
2	SK21-F2	155.04		1.58		―	7.51		―	―	―	164.13	
2	SK21-F3	31.92		―		―	―		―	―	―	31.92	
2	SK21-Y	95.88	532.12	―	73.11	―	――	174.58	―	―	―	95.88	779.81
2	SK37	5.27	―	8.01	―	―	―	―	―	―	―	13.28	―
2	SP33	6.06	―	―	―	―	―	―	―	―	―	6.06	―
2	SP34	18.71	―	4.79	―	―	―	―	―	―	―	23.50	―
2	SP35	170.96		―	―	―	―	―	―	―	―	170.96	
2	SP35-F	2.45	173.41	1.85	1.85	―	―	―	―	―	―	4.30	175.26
2	SP41	110.52	―	―	―	―	27.60	―	―	―	―	138.12	―
2	SP48	0.83	―	―	―	―	―	―	―	―	―	0.83	―
2	SP61	56.34	―	―	―	―	―	―	―	―	―	56.34	―
2	SP62	124.03	―	―	―	―	―	―	―	―	―	124.03	―
2	SP64	4.17	―	―	―	―	2.16	―	―	―	―	6.33	―
2	SX36-F	15.47	―	―	―	―	―	―	―	―	―	15.47	―
2	SB42EP47Y・下	―	―	―	―	1704.56	―	―	―	―	―	1704.56	―
2	D-6	8.67	―	―	―	―	―	―	―	―	―	8.67	―
2	Ⅱ層	―	―	2.42	―	―	―	―	―	―	―	2.42	―
2	X-O 西壁	―	―	4.50	―	―	―	―	―	―	―	4.50	―
	X-O	7.69	―	―	―	―	3800.00	―	―	―	―	3807.69	―
合計		2476.36	―	732.25	―	1704.56	8818.77	―	102.74	―	195.57	14030.25	―

Ⅳ　理化学分析

1　中関屋遺跡理化学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社
田中義文・松元美由紀

はじめに

中関屋遺跡 (新庄市金沢字中関屋) では、平安時代の溝跡、掘立柱建物跡、土坑などの遺構や、須恵器・土師器などの遺物が出土し当時の集落跡と考えられている。

本分析調査では、掘立柱建物跡、柱穴、溝跡の炭化物層から出土した炭化材について同定を行い、当時の木材利用について検討する。また、土坑の覆土について種実洗い出し同定を実施し、植物利用・周辺の植生について検討する。

1. 試　料

炭化材同定の試料は 3 点（No.1 ～ 3）である。No.1 は、SB42 掘立柱建物跡 EP47 柱穴から出土した炭化材であり、出土状況から炭化した柱材の可能性が指摘される。No.2 は SP61 柱穴の柱痕から出土した炭化材であり、No.1 同様、炭化した柱材と考えられている。No.3 は SD1 溝跡の覆土 1 層（炭化物層）から出土した炭化材であり、集落で利用された木材が廃棄されたと考えられている。これら 3 試料について炭化材同定を実施する。また、No.4 は SK20 土坑覆土 1 層の土壌である。焼土・炭化物を多く含む。本試料について、種実同定・樹種同定を実施する。

2. 分析方法

(1) 樹種同定

炭化材 3 袋の中には複数の炭化材がみられるものもあったが、すべて同定する。種実同定試料 (No.4) 中の炭化材は、大型 (4mm 以上) の炭化材 3 個を対象にする。選んだ炭化材は、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の各割片を作成し、双眼実体顕微鏡や電子顕微鏡で観察する。木材組織の種類や配列の特徴を、現生標本や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類 (分類群) を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東 (1982)、Wheeler 他 (1998)、Richter 他 (2006) を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林 (1991) や伊東 (1995,1996,1997,1998,1999) を参考にする。

(2) 種実同定

試料から種実や炭化材を分離・抽出するために、水を満たした容器内に乾燥後の試料を投入し、容器を傾けて浮いた炭化物を粒径 0.5mm の篩に回収する。容器内の残土に水を入れて軽く攪拌し、容器を傾けて炭化物を回収する作業を炭化物が浮かなくなるまで繰り返す（約 20 回）。残土を粒径 0.5mm の篩を通して水洗する。水洗後、水に浮いた試料 (炭化物主体) と水に沈んだ試料 (砂礫主体) を、粒径 2mm、1mm の篩に通し、常温乾燥させる。

水洗・乾燥後の炭化物主体試料・砂礫主体試料を、大きな粒径から順に双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、同定が可能な種実や炭化材（主に 2mm 以上）等の遺物を抽出する。

抽出物は、炭化材は重量と最大径、炭化材主体と砂礫主体、植物片主体は重量を一覧表で示し、炭化材の一部を樹種同定対象とする。分析後は、抽出物と残渣を容器に入れて保管する。

3. 結　果

(1) 樹種同定

結果を表 7 に示す。検出された種類は広葉樹 6 種類 (ヤナギ属、コナラ亜属コナラ節、カツラ、モクレン属、ナシ亜科、カエデ属) である。微細なため、複合放射組織がみられなかった試料は、クリ属―コナラ節とした。以下に検出された試料の解剖学的所見を述べる。

・ヤナギ属（Salix）　ヤナギ科

散孔材で、道管は単独または 2 ～ 3 個が複合して散在する。道管は、単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、単列、1 ～ 15 細胞高。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節（Quercus subgen. Quercus sect. Prinus）　ブナ科

環孔材で、孔圏部は１～３列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔、壁孔は交互状。放射組織は同性、単列、１～20 細胞高程度のものと複合放射組織とがある。

・カツラ（Cercidiphyllum japonicum Sieb. et Zucc.）　カツラ科カツラ属

散孔材で、管孔はほぼ単独で散在し、年輪界に向かって管径を漸減させる。道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性、１～２細胞幅、１～ 30 細胞高。

・モクレン属（Magnolia）　モクレン科

散孔材で、管壁厚は中庸～薄く、単独および２～４個が放射方向に複合して散在する。道管の分布密度は比較的高い。道管は単穿孔、壁孔は階段状～対列状。放射組織は異性、１～２細胞幅、１～ 40 細胞高。

・バラ科ナシ亜科（Rosaceae subfam. Maloideae）

散孔材で、単独および２～５個が複合して散在する。道管の分布密度は比較的高い。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、２～３細胞幅、１～ 20 細胞高。

表７　樹種同定結果

No	性状	出土遺構	樹種
1	炭化材 (5 個)	SB42EP47 柱穴	カエデ属 (5 個)
2	炭化材	SP61 柱穴	モクレン属
3	炭化材 (3 個)	SD1 溝跡覆土 1 層	カツラ (1 個) ヤナギ属 (2 個)
4	土壌	SK20 土坑覆土	ナシ亜科 (1 個) コナラ節 (1 個) クリ属－コナラ節 (1 個)

表８　種実同定結果

分類群	粒径	4 SK20 土坑覆土	単位
炭化材		7.46	最大径径 (mm)
	＞ 1 mm	0.11	乾重 (g)
炭化材主体	1 － 0.5 mm	0.09	乾重 (g)
砂礫主体	2 － 1 mm	1.16	乾重 (g)
	1 － 0.5 mm	3.01	乾重 (g)
植物片		0.03	乾重 (g), 混入の可能性
分析量		200	容積 (cc)
		337.8	湿重 (g)

注）種実は検出されなかったため、炭化材同定を実施した。

・カエデ属（Acer）　カエデ科

散孔材で管壁は薄い。単独および２～３個が複合して散在する。道管は単穿孔を有し壁孔は対列～交互状。放射組織は同性、１～５細胞幅、１～ 40 細胞高。木繊維が木口面において不規則な紋様をなす。

(2) 種実同定

結果を表８に示す。SK20 土坑覆土 (No.4) のほぼ全量 200cc(337.8g) を洗い出した結果、炭化材 0.11g(最大 7.46mm)、炭化材主体 0.09g、砂礫主体 4.17g、植物片 0.03g が検出された。種実は確認されなかった。なお、植物片は、保存状態が良好であることから、後代の混入の可能性がある。

4. 考　察

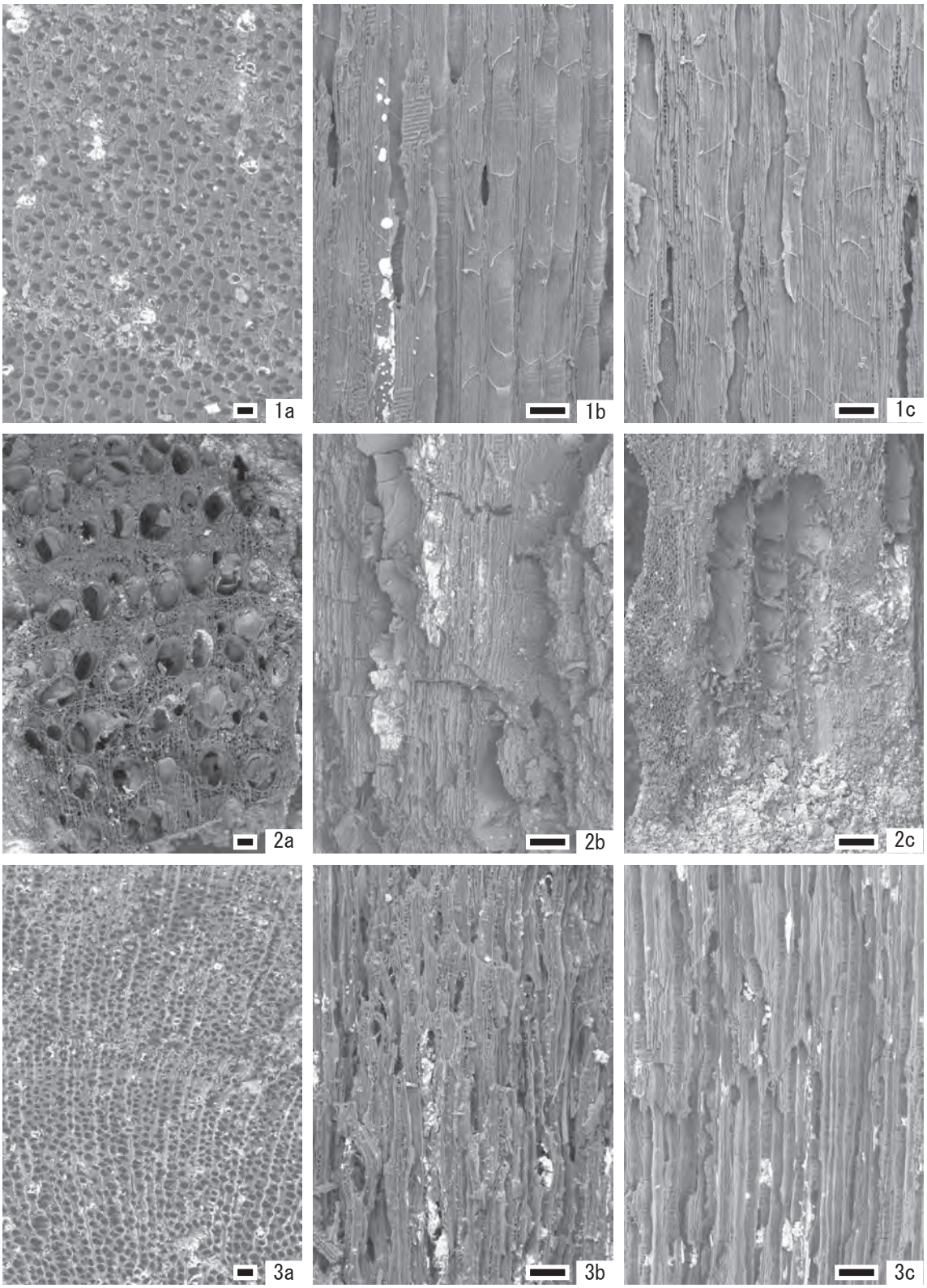
本分析調査の結果、SK20 土坑の土壌試料からは種実遺体がみられなかったため、大きめの炭化材試料３点について、同定を行った。これら結果をもとに、当時の植物利用について検討を行う。

SB42EP47 柱穴 (No.1) は５片ともカエデ属である。接合関係は不明だが、おそらく同一個体の破片と考えられる。SP61 柱穴 No.2 はモクレン属である。いずれも軽軟な部類に入るが、出土状況から考えると、柱材として利用されていた可能性が高い。先述のように軽軟な木材であるため、柱材には適さないことから、他用途のものが廃棄された可能性も含め検討することが望まれる。SD1 溝跡覆土１層 (No.3) では、カツラとヤナギ属が確認される。これらも軽軟な木材であり、器具材などに使われる。SK20 土坑覆土 (No.4) では、ナシ亜科とコナラ節が検出される。これらは重堅な木材のため、木炭として残りやすい。

検出された種類をみると、河川沿いなど明るい林地を好む種類が多い。これらの種類は成長が早く、萌芽による再生も容易といった特徴があるため、人里や川沿いなど樹木の生長を阻害されやすい場所でも生育可能な種類である。遺跡の立地環境から考えても、これらの樹種は周辺で得やすい樹種であったとみられることから、平安時代には近くから採取し、材料として利用していたことがうかがわれる。

参考文献

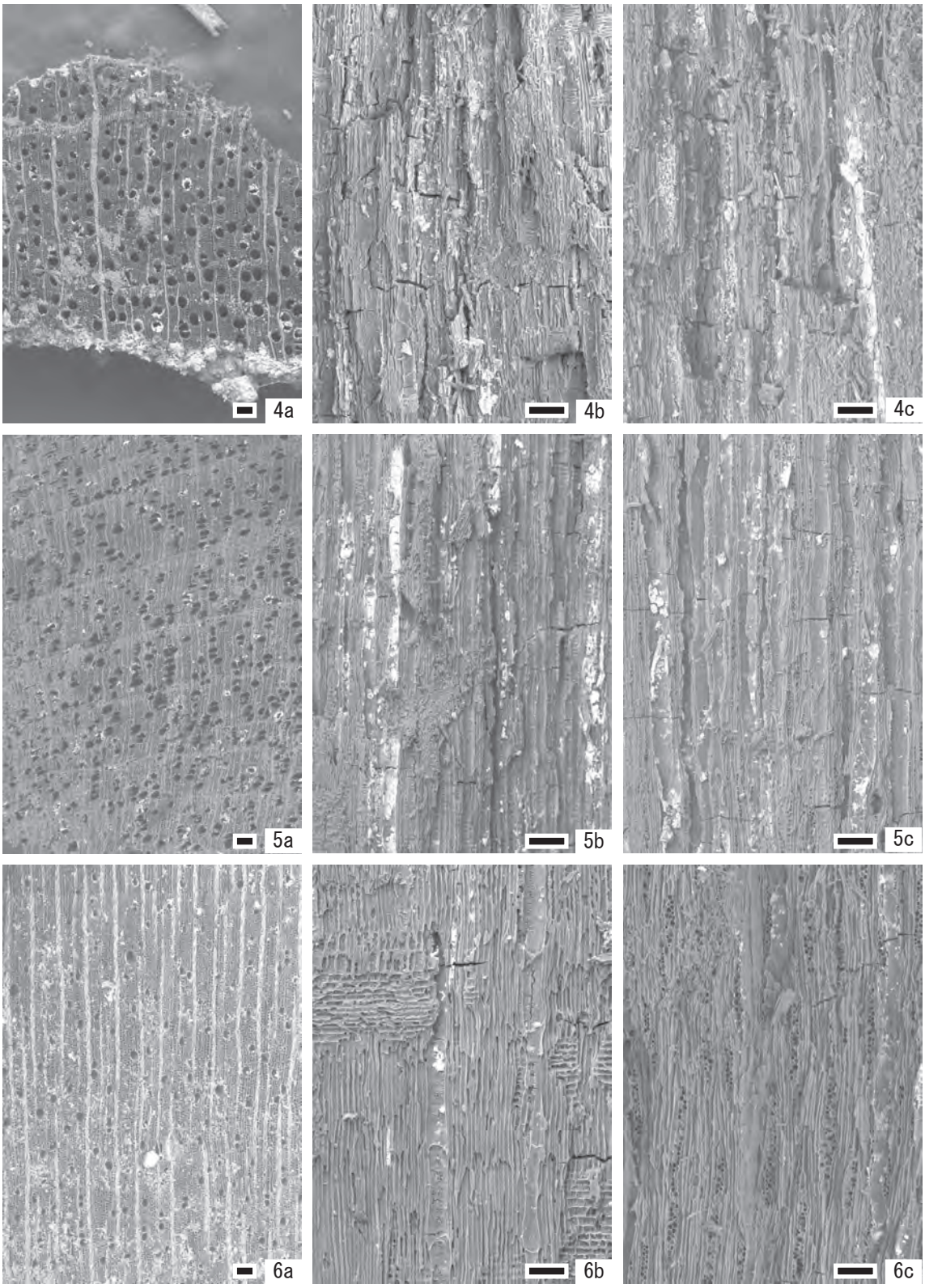
林　昭三　1991 『日本産木材顕微鏡写真集』 京都大学木質科学研究所
伊東隆夫　1995 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ」『木材研究・資料　31』 p.81 ～ p.181　京都大学木質科学研究所
伊東隆夫　1996 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ」『木材研究・資料　32』 p.66 ～ p.176　京都大学木質科学研究所
伊東隆夫　1997 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ」『木材研究・資料　33』 p.83 ～ p.201　京都大学木質科学研究所
伊東隆夫　1998 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ」『木材研究・資料　34』 p.30 ～ p.166　京都大学木質科学研究所
伊東隆夫　1999 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ」『木材研究・資料　35』 p.47 ～ p.216　京都大学木質科学研究所
伊東隆夫・山田昌久 (編)　2012 『木の考古学　出土木製品用材データベース』 p.449　海青社
Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（編） 2006 『針葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト』伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部　久・内海泰弘（日本語版監修） p.70　海青社 ［Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification］
島地　謙・伊東隆夫　1982 『図説木材組織』p.176　地球社
Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編） 1998 『広葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト』 伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修） p.122　海青社 ［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification］.



1. ヤナギ属（試料番号3）
2. コナラ亜属コナラ節（試料番号4）
3. カツラ（試料番号3）

a：木口　b：柾目　c：板目
スケールは100μm

第27図　炭化材（1）



4. ナシ亜科(試料番号4)
5. モクレン属(試料番号2)
6. カエデ属(試料番号1)

a:木口　b:柾目　c:板目
スケールは100μm

第 28 図　炭化材（2）

V　総　　括

1　平安時代

中関屋遺跡では、主な遺構として平安時代に帰属すると考えられる掘立柱建物跡３棟（SB8･23･42）、土坑群、ピット・柱穴群、溝跡 SD1 が検出された。土坑群を中心に、須恵器・土師器が出土し、遺物の年代は９世紀第２四半期から第３四半期にかけての時期と考えられ、集落はこの期間に営まれたものと考えられる。また、建物が分布する北・西側にかけて溝跡 SD1 がめぐる。溝跡は SB8 よりも新しい。このため、集落は当初溝跡が伴わない時期があり、その後溝跡が構築されたものと思われる。古い段階の建物としては、SB8 があるが、SB42 も建物の主軸方向が類似しており、同時期に建てられていた可能性も考えられる。また SB23 は建物の軸線が溝跡と一致している面があり、SB8 より後出の新しい段階の建物である可能性が推測される。SB23 の周囲にも、建物として検出する事はできなかったが、別の掘立柱建物跡が存在していたものと考えられる。遺物が廃棄されていた SK20、SK21 などの土坑は、SB42 と重複したり近接しすぎるため、この建物とは別時期であり、SB23 などに伴っていた可能性もある。この中関屋遺跡で調査された集落跡は、遺跡の北西部隅にあたると思われ、集落の本体はより南や東側へ広がっていたと推測される。

遺物の中には、須恵器の蓋を転用硯として利用しているものが認められた。また、SK22 土坑より、平安時代の銅銭と思われる銭貨が出土した。集落内には、文字に携わり､貨幣を保有できる人が存在した事が指摘される。

理化学分析では、建物の柱穴から出土した炭化材の同定を行い、広葉樹のカエデ属やモクレン属である事が明らかになった。これらは第Ⅳ章でも述べられているが周辺で得られやすい材を利用していたと考えられる。

奈良・平安時代の新庄市内の遺跡であるが、本合海の宮野遺跡で平安時代の竪穴住居跡が１棟調査されている（川崎・阿部ほか 1981）。一辺が約４ｍの方形の竪穴住居跡で、半分は調査区外となる。カマドが伴うのかは不明である。時期は 10 世紀後半から 11 世紀前半頃とされている。

鮭川村大字庭月の下大曽根遺跡では、平安時代の集落跡が調査され、出土遺物は 10 世紀第１四半期を中心とする年代と報告されている（須賀井・山木 2010）。竪穴建物跡、掘立柱建物跡から構成される集落跡である。

また、鮭川村石名坂上ノ山では、土師器（赤焼土器）が採集されており、参考資料として掲載した（第 30 図右下・写真図版 29 の 49）。[1)]形状から９世紀第４四半期に位置づけられると考えられる。下大曽根遺跡の約 900 ｍ北東に位置し、関連が想定される。

この他、最上町水木田遺跡では、奈良・平安時代の集落跡が確認されている（阿部ほか 1984）。竪穴住居跡が４棟、掘立柱建物跡が検出されている。

周辺地域の集落の様相をみると、竪穴住居跡が主であり、それに掘立柱建物跡を伴う在り方が認められる。中関屋遺跡では、掘立柱建物跡のみの検出であるが、調査区外にも竪穴住居跡が存在していた可能性は考えられる。

また、新庄市大字福田字八幡原の八幡原１遺跡は、升形川の流域に位置し、９世紀中葉から後半の須恵器が出土している。当遺跡について、「避翼駅と佐藝駅を結ぶ南北方向の駅路ルートと本合海や松本・鳥越方面とを結ぶ東西方向の主要道路とが交差する要衝に位置していたと推測できる。言わばターミナル的な当時の重要な中継地としての性格が想定される」（阿部ほか 2008）と述べられている。八幡原窯跡も、詳細な所在地は不明となっているが、この遺跡周辺に位置していたとされ、出土遺物は９世紀第２～３四半期に位置づけられている（阿部ほか 2009）。中関屋遺跡も、これらの遺跡と同時期に存在していたと考えられ、八幡原窯跡の製品が流通していた可能性は高いものと思われる。最上川沿いの水駅から升形川を通じて新庄盆地内に展開した集落の一つであったと推測される。

2　縄文時代

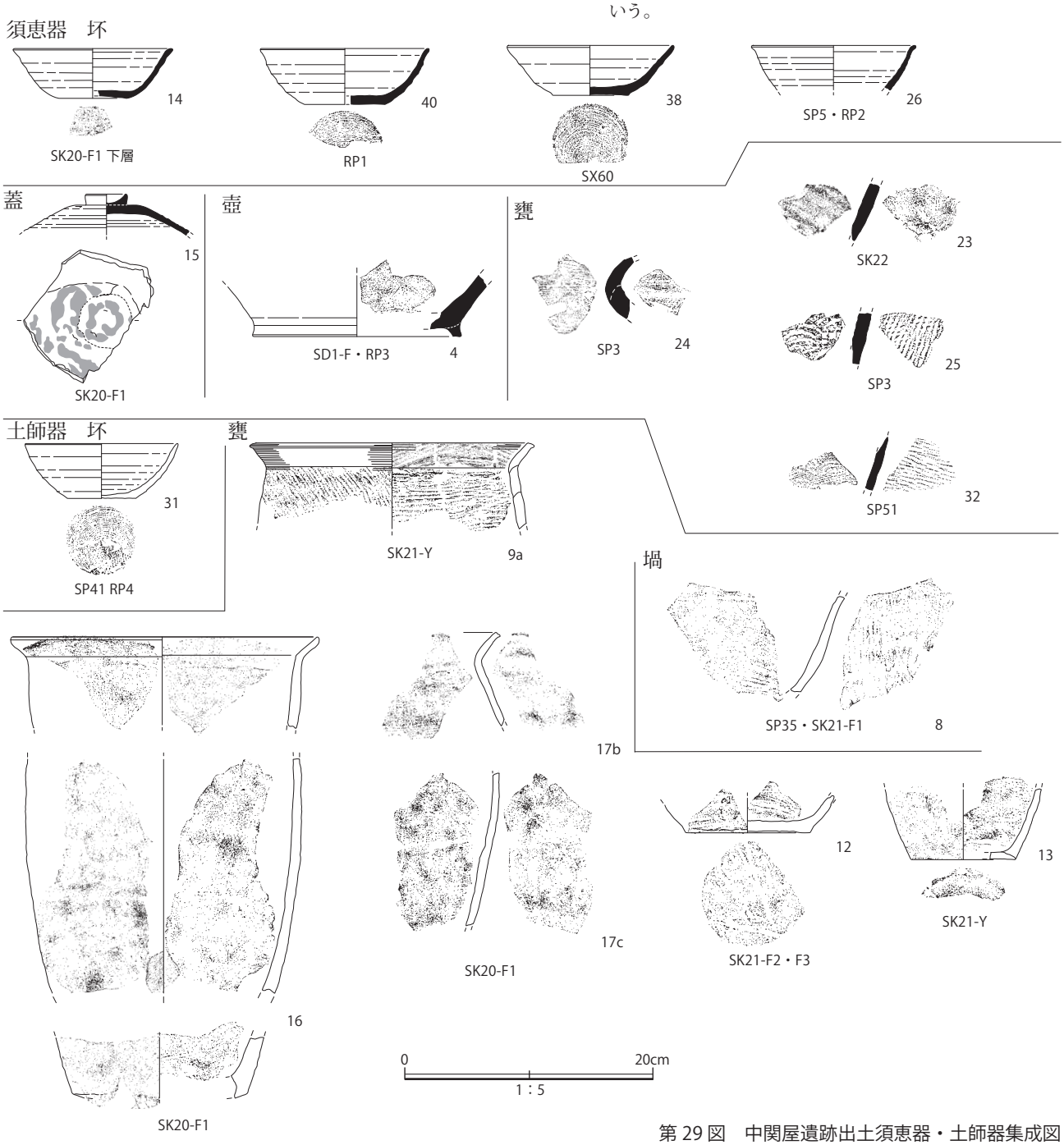
当遺跡では、縄文時代前期初頭と考えらえる縄文土器

が出土している。この時期の該当する土器型式は、上川名Ⅱ式である。当遺跡での出土状況は、平安時代の遺構面の下の暗褐色シルト層中より出土しており、遺構に関係するのかは不明であった。また、平安時代の遺構の覆土中から剥片や石皿などの石器が出土しており、遺構の構築によって下層の包含層に含まれる遺物が混入した可能性がある。

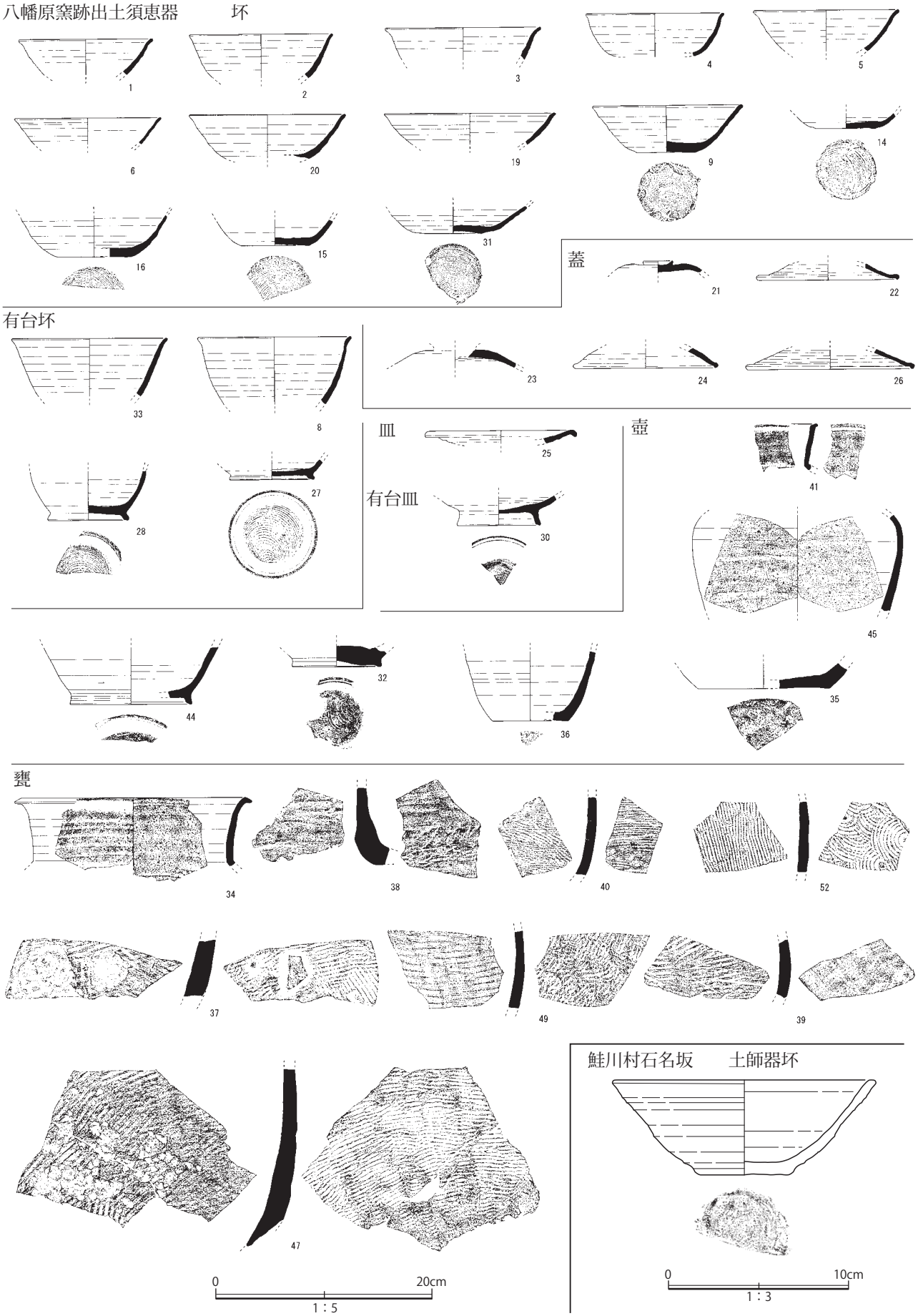
縄文時代前期の周辺地域の遺跡であるが、前期初頭の事例として、新庄市の福田山Ａ遺跡がある（佐藤1981）。竪穴住居跡１棟、土坑、陥穴が検出され、羽状縄文を基本とする第Ⅲ群土器が出土している。また距離的に近い仁間磯ノ沢Ｂ遺跡などでも、同時期の遺物が出土している。既知の縄文前期の遺跡の分布をみると、やや標高の高い段丘上に分布が集中している。中関屋遺跡は扇状地上に立地しており、遺跡が確認されていなかった周辺地域に集落跡などが存在していた可能性が考えられる。

注

1）　黒坂敏夫氏が鮭川村石名坂上ノ山において採集された土師器を、御厚意により掲載・紹介させていただいたものである。当地点は遺跡として登録されてはいない。なお、縄文土器・石器・須恵器なども同じ地点で採集されるという。



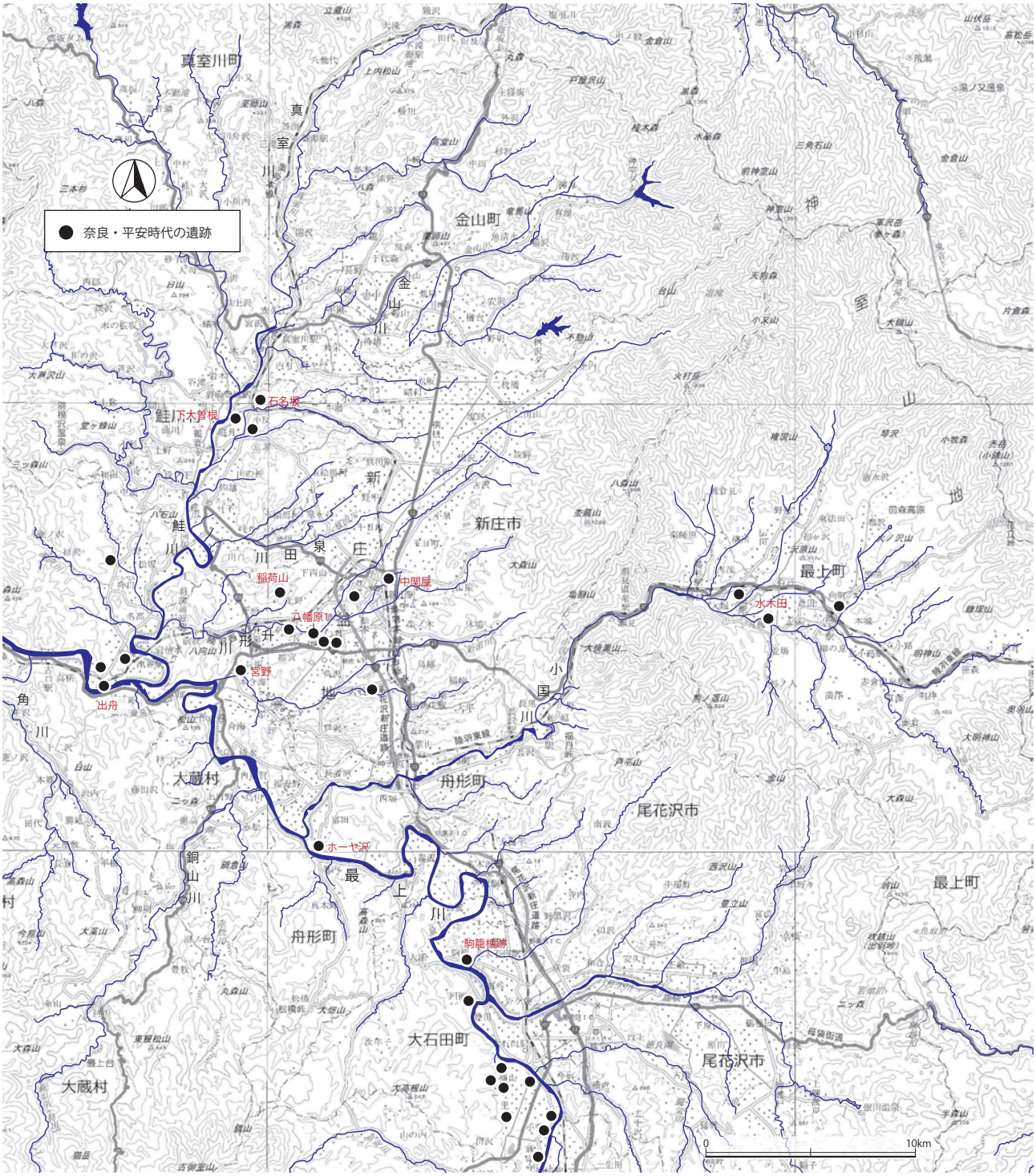
第 29 図　中関屋遺跡出土須恵器・土師器集成図



第 30 図　八幡原窯跡出土須恵器・鮭川村石名坂出土土師器

引用・参考文献

阿部明彦・石井浩幸・丸吉繁一　2008 『最上川関連遺跡確認調査報告書（1）』山形県埋蔵文化財調査報告書第 209 集
阿部明彦・丸吉繁一　2009 『山形県内重要遺跡確認調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第 211 集
阿部明彦・佐々木洋治・佐藤正俊　1984 『水木田遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第 75 集
石井浩幸・鈴木良仁・武田和宏・渡辺薫　1999 「山形県の一般集落の様相」『第 25 回古代城柵官衙遺跡検討会資料』p.113 ～ p.161
第 25 回古代城柵官衙遺跡検討会事務局
川崎利夫・阿部明彦ほか　1981 「宮野遺跡」『分布調査報告書８』山形県埋蔵文化財調査報告書第 45 集　p.30 ～ p.32
佐藤庄一　1981 『新庄中核工業団地関連遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第 43 集
須賀井新人・山木巧　2010 『下大曽根遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 182 集
長澤正機・大友義助　1989 「第二章　原始時代の新庄」『新庄市史　第一巻』新庄市



第 31 図　最上地方・村山地方北部の主な奈良・平安時代の遺跡
（国土地理院発行 20 万分の 1 地形図「仙台」・「新庄」を使用）

写真図版

遺跡近景（南東から）

遺跡近景（東から）

器材搬入

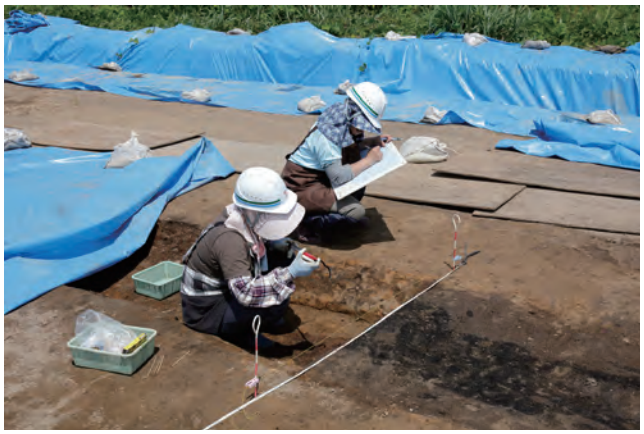
調査区外周の線掘り（南西から）

重機による表土掘削（南から）

面整理作業（西から）

基準点測量（南西から）

遺構精査状況



記録作業

発掘調査説明会

2 区遺構検出状況（北東から）

1 区溝跡検出状況（西から）

1 区遺構検出状況（北西から）

1 区北壁断面（西から）

1 区北壁断面（西から）

1 区東壁断面（南西から）

2 区西壁断面（北から）

1 区西側遺構検出状況（東から）

調査区全景（南から）

調査区全景（南東から）

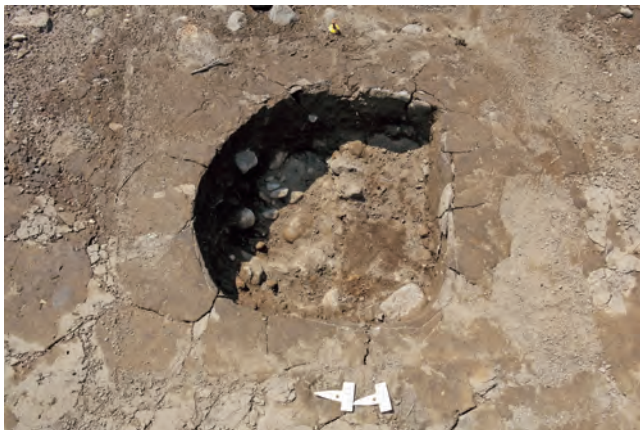
1・2 区遺構完掘状況（北東から）

1・2 区遺構完掘状況（西から）

1 区 SB ８完掘状況（西から）

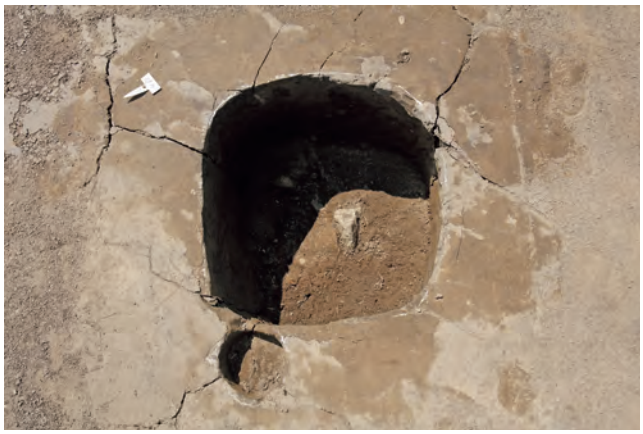
1 区 SB ８完掘状況（東から）

SB8EP9 断面（南から）



SB8EP9 完掘状況（東から）

SB8EP10 断面（南西から）



SB8EP10 完掘状況（東から）

SB8EP11 断面（北東から）

SB8EP11 完掘状況（東から）

SB8EP12 断面（東から）

SB8EP12 完掘状況（北東から）

SB8EP13 断面（東から）

SB8EP13 完掘状況（北から）

SB8EP14 断面（南西から）

SB8EP14 完掘状況（北から）

SB23 検出状況（北から）

SB23 完掘状況（北から）

SB23 完掘状況（東から）

SB23EP7 断面（東から）

SB23EP7 完掘状況（北から）

SB23EP25 断面（北東から）

SB23EP25 完掘状況（北東から）

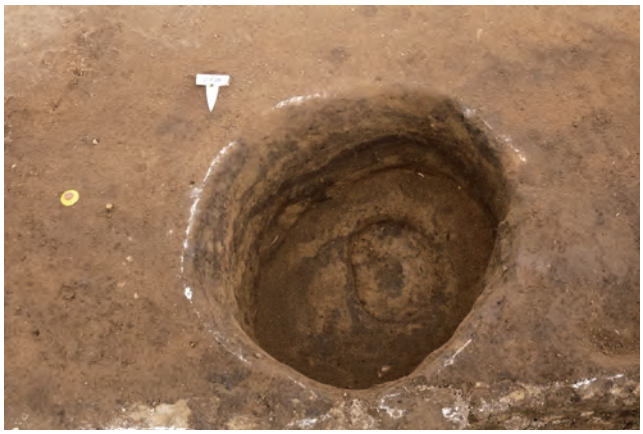
SB23EP24 完掘状況（北東から）

SB23EP26 完掘状況（北東から）

SB23EP27 断面（北東から）

SB23EP32 断面（東から）

SB23EP28 断面（北東から）



SB23EP28 完掘状況（西から）

SB23EP29 断面（北東から）

SB23EP29 完掘状況（西から）

SB23EP30 断面（北東から）

SB23EP30 完掘状況（西から）

SB23EP31 断面（西から）

SB23EP31 完掘状況（西から）

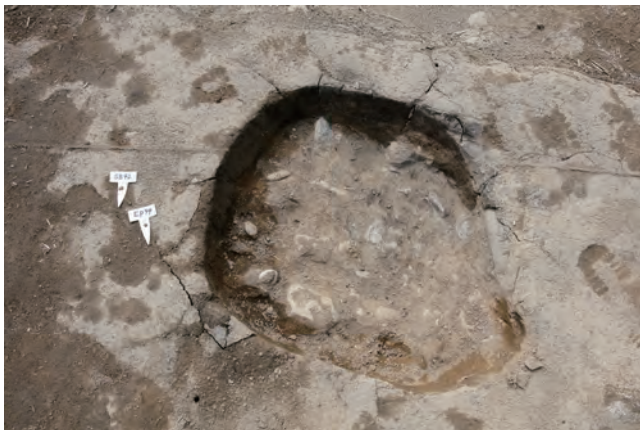
SB42 検出状況（北東から）

SB42 完掘状況（北から）

SB42EP6 断面（北東から）

SB42EP6 完掘状況（北西から）

SB42EP44 断面（北東から）



SB42EP44 完掘状況（北東から）

SB42EP45 断面（南から）

SB42EP45 完掘状況（南西から）

SB42EP46 断面（北東から）

SB42EP46 完掘状況（南から）

SB42EP47 断面（北東から）

SB42EP47 完掘状況（南東から）

SB42EP43 完掘状況（北東から）

SK20 断面 (南西から)

SK20 遺物出土状況（北西から）

SK20-F1 下層遺物出土状況（西から）

SK20・SP62 完掘状況（南から）

SK21 断面（東から）

SK21-F1 遺物出土状況（東から）

SK21-F1 遺物出土状況（東から）

SK21 完掘状況（西から）

SK22 断面（南西から）

SK22 遺物出土状況（南から）

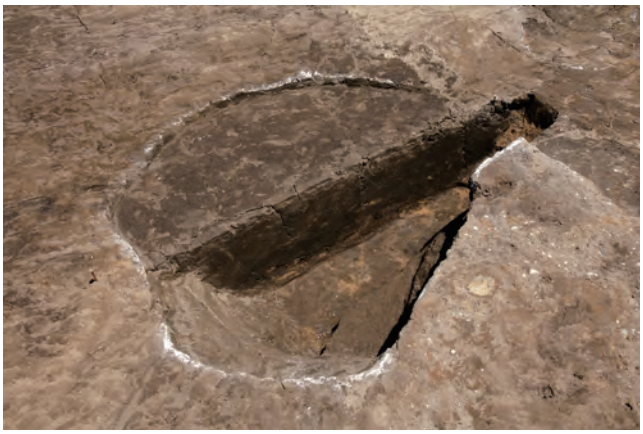
SK22 遺物出土状況（南東から）

SK22-RM5 銭貨出土状況

SX36 断面（南西から）

SK15 断面（南西から）

SK15 完掘状況（西から）

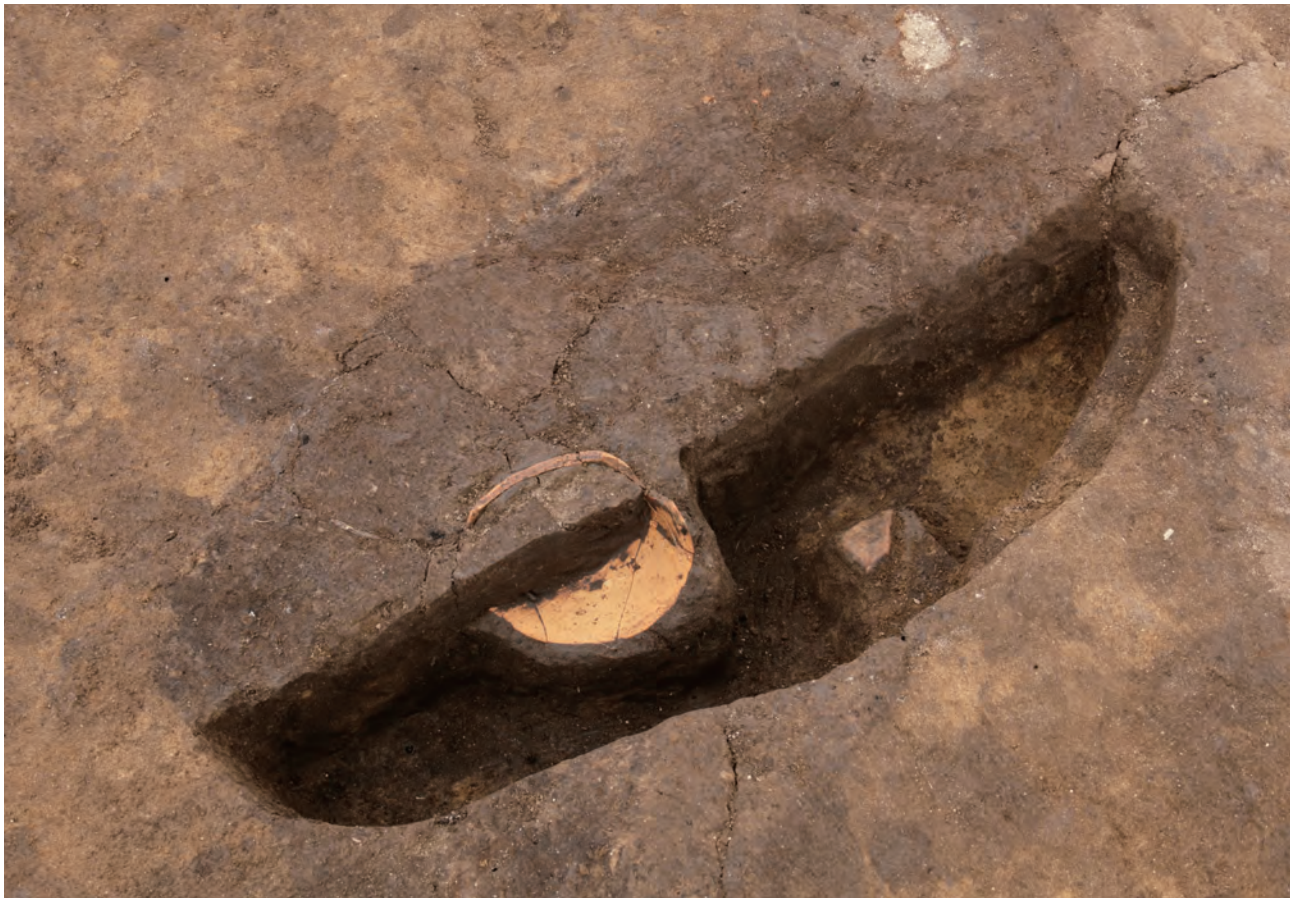


SK37 断面（南西から）

SK37 完掘状況（西から）

SK63 断面（南西から）

SK63 完掘状況（南西から）



SP41 断面（南東から）

SP41-RP4 土師器坏出土状況（南東から）

SP41 断面（南東から）

SP61 断面（北東から）

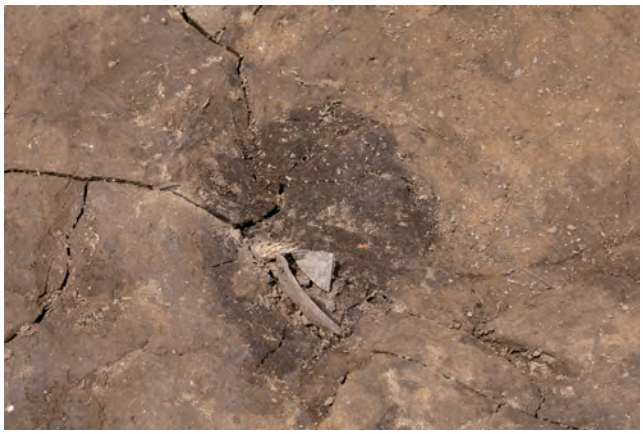
SP61 完掘状況（南東から）

SP34 断面（南から）

SP35 遺物出土状況（北から）

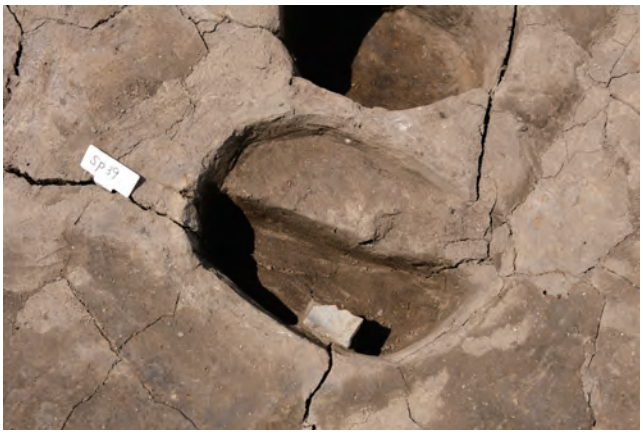
SP3 完掘状況（北から）

SP17・18 断面（北から）



SP5-RP2 出土状況

SP5 完掘状況



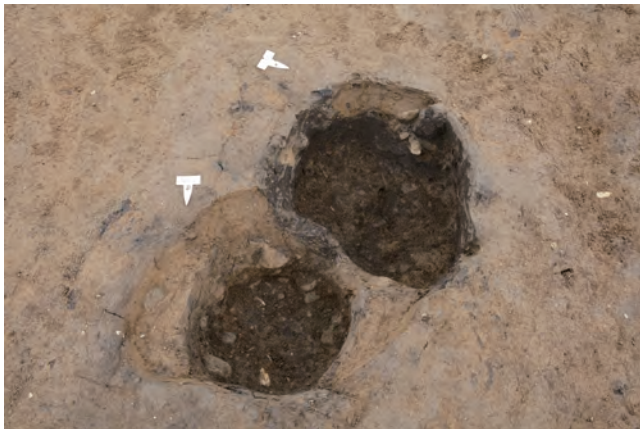
SP39 遺物出土状況

SP52 完掘状況（北から）

SP19 断面（南から）

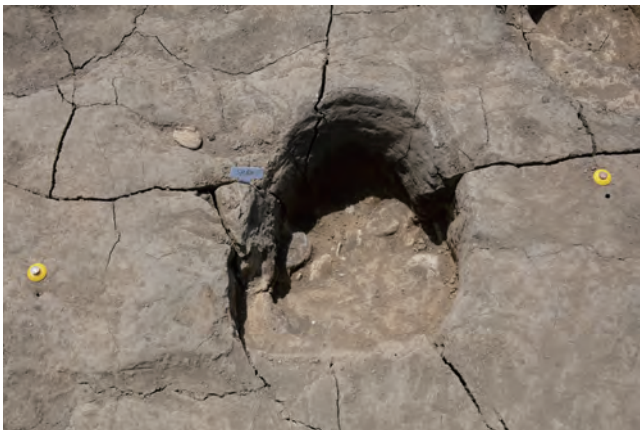
SP19 完掘状況（北から）

SP49・50 断面（南西から）



SP49・50 完掘状況（北西から）

SP51 断面（南から）



SP51 完掘状況（北から）

SP53 断面（南から）

SP53 完掘状況（西から）

SP55・56 断面（南から）

SP55・56 完掘状況（南西から）

SP54 断面（南から）

SP57 断面（南から）

SP58 断面（南から）

SP57・58 完掘状況（西から）

1 区 SD1 検出状況（北東から）

2 区 SD1 検出状況（北から）

1 区 SD1 東端断面

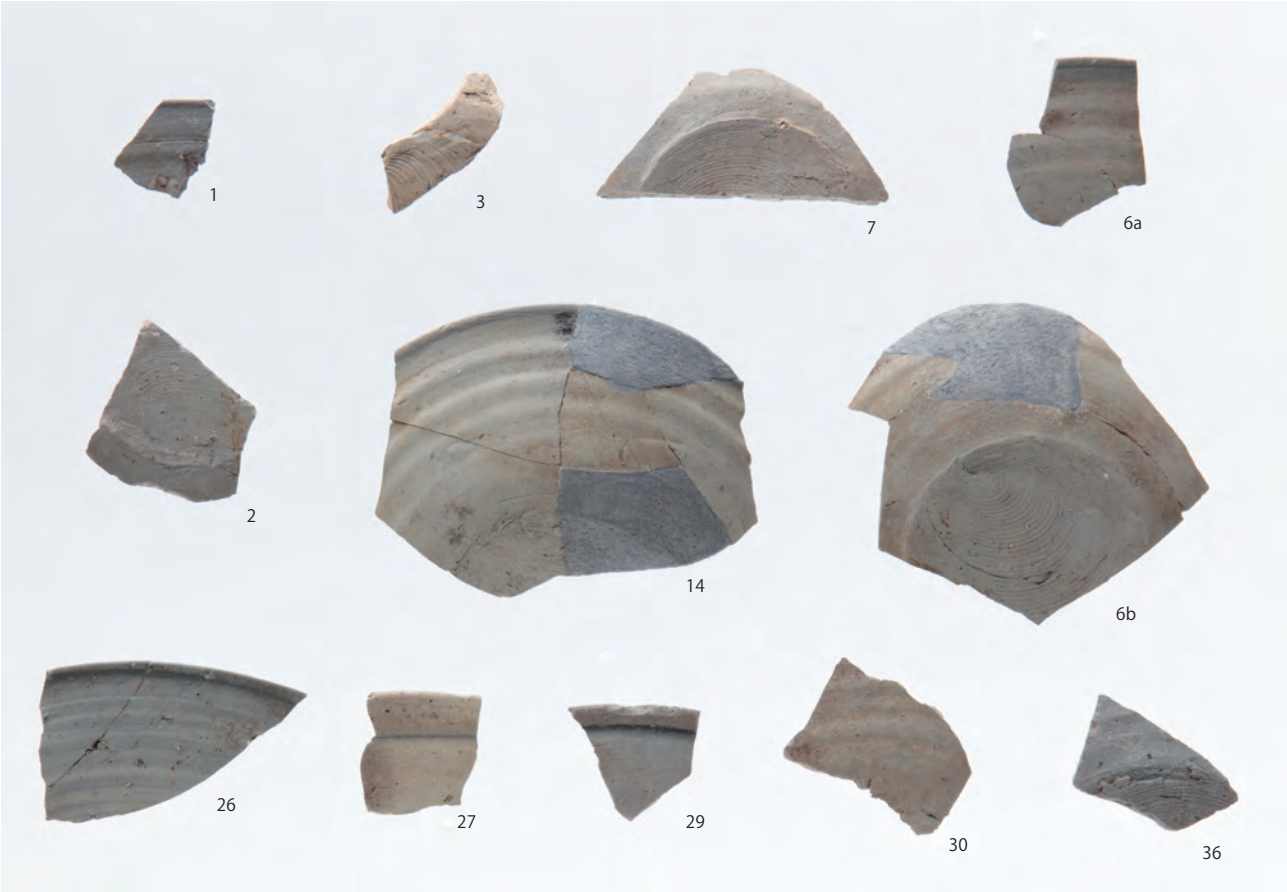
1 区 SD1 断面

2 区 SD1 断面

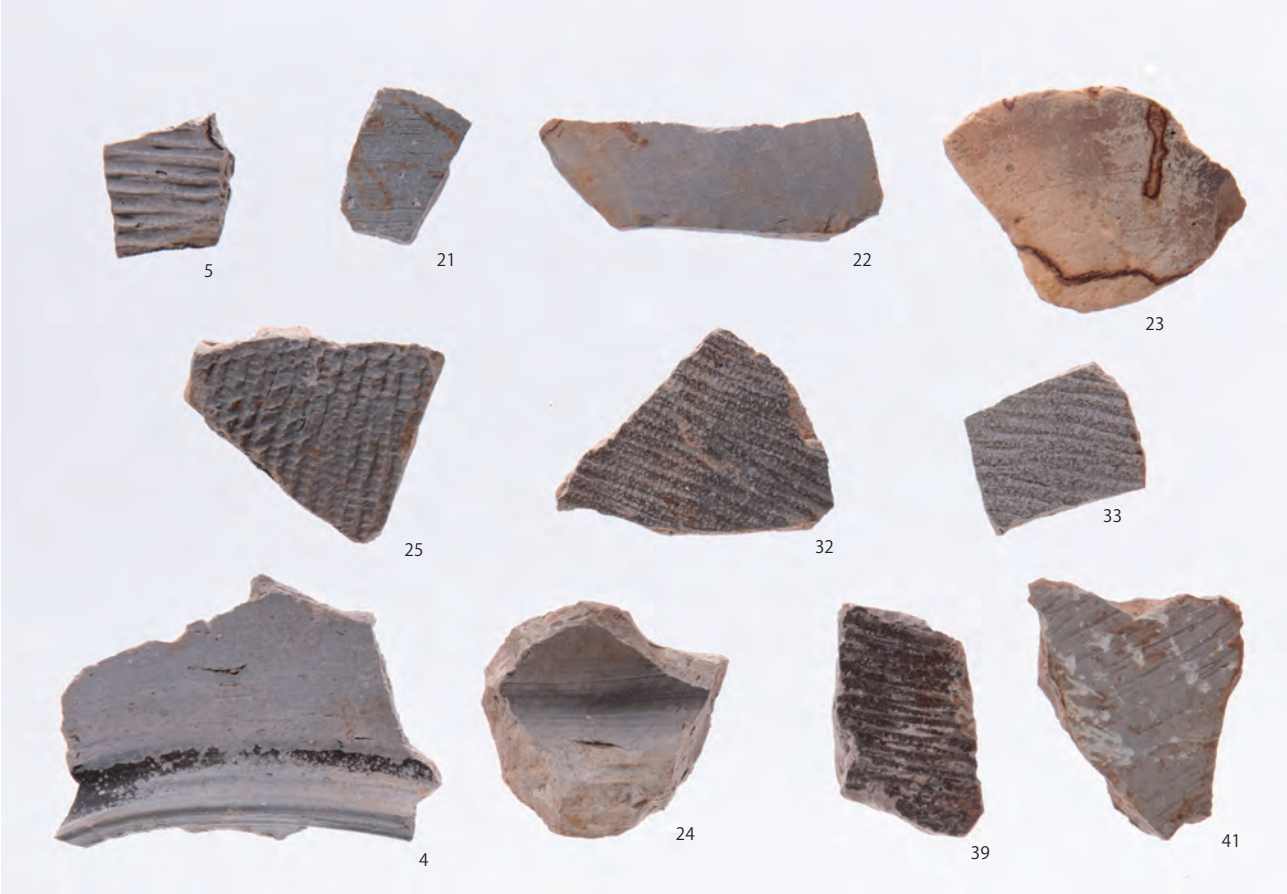
2 区 SD1 遺物出土状況

1 区 SD1 完掘状況（東から）

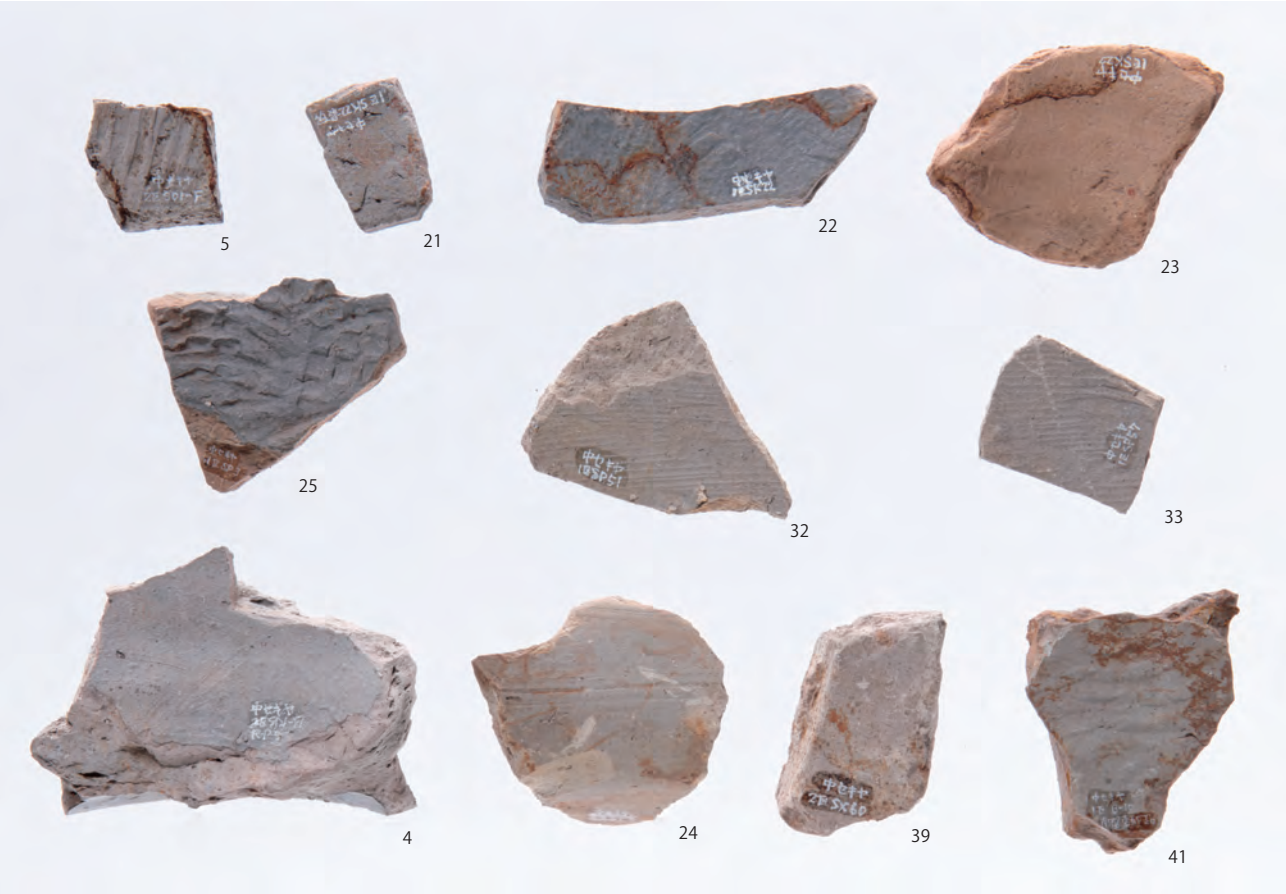
1 区 SD1 完掘状況（北東から）



須恵器坏・蓋

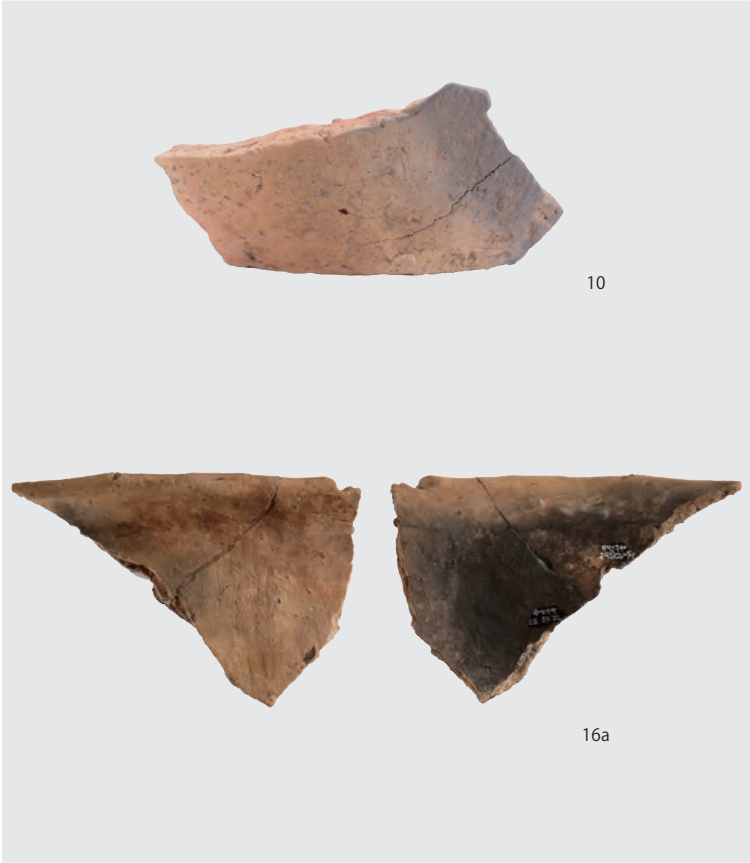


須恵器甕・壺・鉢（表）



須恵器甕・壺・鉢（裏）

31



10

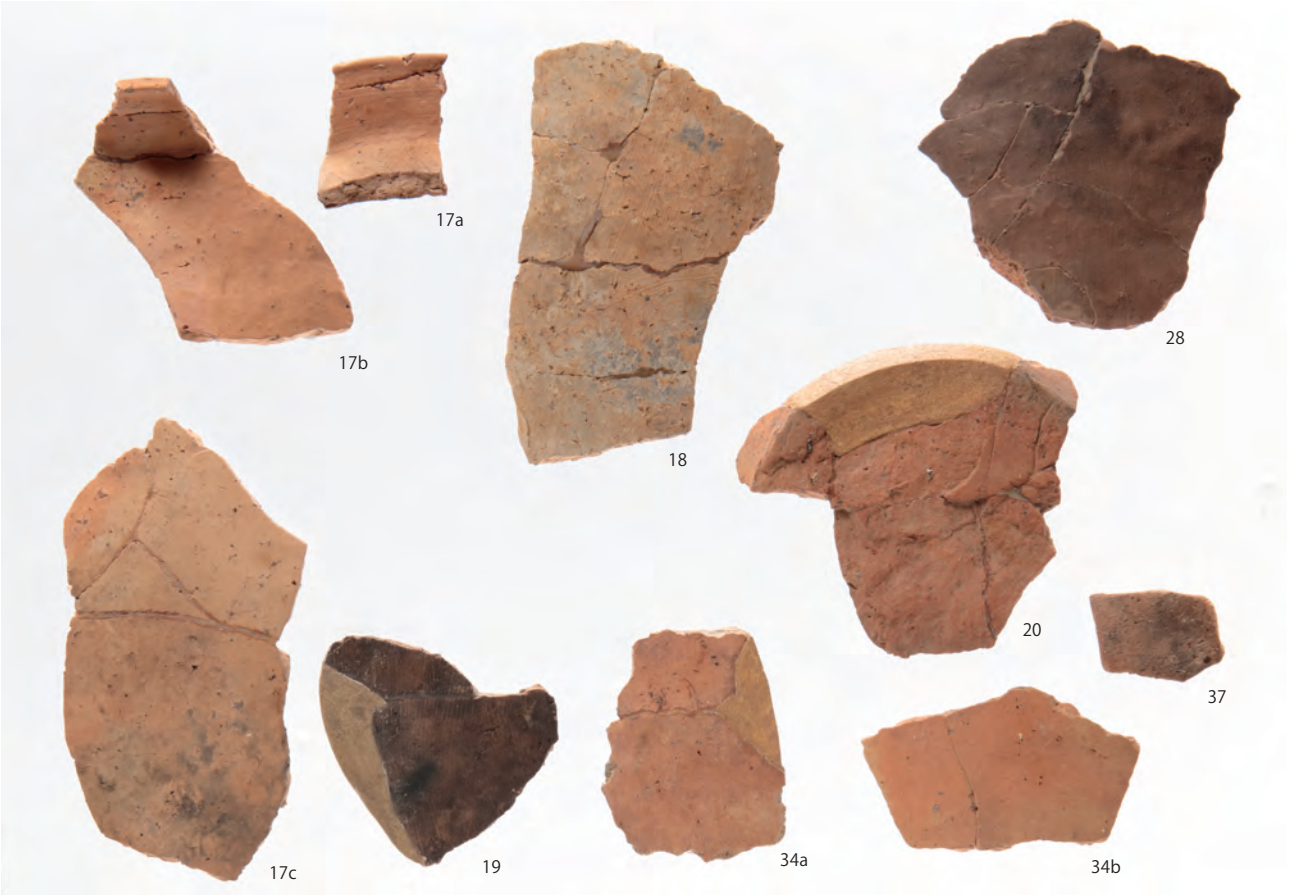
16a

16b

16c

35

土師器坏・甕


17a
17b
18
28
20
37
17c
19
34a
34b

土師器甕（表）

17a
17b
28
18
20
37
17c
19
34a
34b

土師器甕（裏）

土師器甕・堝（表）

土師器甕・堝（裏）

42a

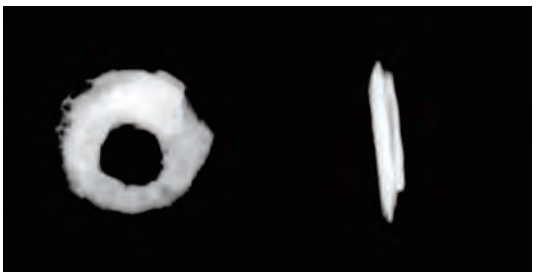
42b

42c

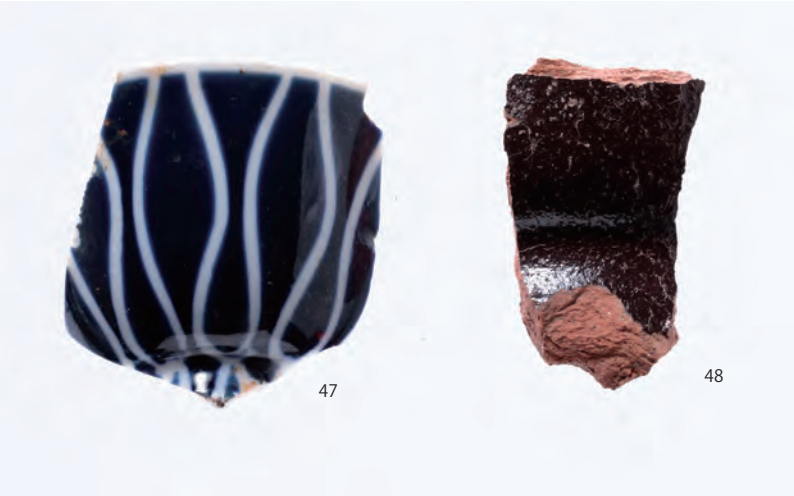
44

45

縄文土器・石器



46　X 線写真



参考資料：（鮭川村出土）

石器・銭貨・陶磁器・参考資料（土師器）

報告書抄録

ふりがな	なかせきやいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	中関屋遺跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第236集
編著者名	菅原哲文　廣瀬美紀
編集機関	公益財団法人山形県埋蔵文化財センター
所在地	〒999-3246　山形県上山市中山字壁屋敷5608番地　ＴＥＬ　023-672-5301
発行年月日	2020年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °　′　″	東経 °　′　″	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
なかせきや 中関屋 いせき 遺跡	やまがたけん 山形県 しんじょうし 新庄市 おおあざかなざわ 大字金沢 あざなかせきや 字中関屋	6205	205-128	38°　46′　06″	140°　18′　35″	20190617 ～ 20190827	1,840	山形県立新庄病院改築整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
なかせきや 中関屋 いせき 遺跡	集落跡	縄文時代	遺物包含層	縄文土器 石器	平安時代では、掘立柱建物跡を中心とし、周囲を溝跡で囲われる集落跡が明らかになった。縄文時代では、前期初頭の縄文土器と石器が出土した。 （文化財認定箱数：８）
		平安時代	掘立柱建物跡　3 土坑 溝跡　1 柱穴・ピット	須恵器 土師器 金属製品（銭貨）	

要約	中関屋遺跡は、平安時代の集落跡である。検出された遺構は、掘立柱建物跡３棟、土坑、溝跡、柱穴群などである。建物跡は、２間×２間の総柱になるもの、３間×２間の間取りになるものが認められた。建物跡が分布する北側から西側にかけて溝跡がめぐり、集落を囲む構成をとっている。建物跡は、溝跡を伴わない古い時期と、溝跡に囲まれる新しい時期の変遷が想定される。 出土した遺物であるが、須恵器、土師器、金属製品（銭貨など）がある。須恵器・土師器は、平安時代の９世紀中頃から後半にかけての時期と推定される。須恵器には転用硯として使用された蓋が認められた。新庄市内で、今まで不明な部分が多かった平安時代の集落の様相が明らかとなった。

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 236 集

中関屋遺跡発掘調査報告書

2020 年 3 月 31 日発行

発行　公益財団法人　山形県埋蔵文化財センター
〒 999 - 3246　山形県上山市中山字壁屋敷 5608 番地
電話　023 - 672 - 5301
印刷　田宮印刷株式会社
〒 990 - 2251　山形県山形市立谷川三丁目 1410 番地の 1
電話　023 - 686 - 6111

このPDFデータは下記の報告書を底本として作成しました。
閲覧を目的としていますので、詳細な写真や図面が必要な場合は、底本を参照して下さい。
底本は、公益財団法人山形県埋蔵文化財センター、山形県内の市町村教育委員会、図書館、各都道府県の埋蔵文化財センター、考古学を教える大学、国立国会図書館等に所蔵されています。
所蔵状況や利用方法は、直接各施設にお問い合わせ下さい。

書名：中関屋遺跡発掘調査報告書
発行：公益財団法人山形県埋蔵文化財センター
〒999-3246
山形県上山市中山字壁屋敷5608番地
電話:023-672-5301
URL:http://www.yamagatamaibun.or.jp/
mail:yac@yamagatamaibun.or.jp
電子版作成日：2020年3月31日